

蠟人形の上に屈み、右手を人形の首の上に置き、分らぬ呪文を唱ふ。空より物の影落ち来り、霞は灰を蒙れる薪の山の如く見ゆ。

松火をお點け。日が暮れた。

(女中等松火臺に馳せ寄る。圍のうちにて、忽ち叫び聲を聞く。バルバラ、オルデルラの二人聲高く叫びつゝ、圍を馳せ来る。)

バルバラ。パンテアが焔に包まれてをります。

オルデルラ。パンテアが火に焚かれてをります。

夫人烈しき運動にて踊り上る。蠟人形は夫人の手に押遣られて地に落つ。

バルバラ。(息を切らして馳せ付く。)パンテアは焼死にます。遊山船が燃上つてをります。男達はみな拔身で斬合つてをります。

オルデルラ。遊山船が燃上つて、パンテアも、一しよに乗つてゐたものも残らず焼死にます。船は焼けながら河を下つて参ります。もう直きそこを通りませう。もうそこいらが船火事の火で明るくなつて参りました。

バルバラ。奥様。まるで戦争でござります。男達がみな氣が狂つたやうになつてをります。そして船と船との間で斬合つてゐます。血だらけでござります。幾たり人死があるやうに分りません。

合つて入らつしやる處でござりました。バルバラ。わたくしはブリアモ・グリツチが血みどれになつたのを見掛けました。

オルデルラ。しまひには只唸り狂つた群衆が見えるばかりでどなたが何處にお出でなさるやら見分ける事が出来なくなつてしまひました。人の怒が河一ぱいになつてゐました。旗を立てた船々が拔身の光で、大きな白い巾に包まれたやうに見えました。そしてみな口々に、パンテア、パンテアと叫ぶのでござります。叫べば叫ぶほど、みなが逆せて参ると見えました。ミラノから来た人達が火矢を投付けます。さう致すとあの女子の遊山船が直に燃え上つてしまひます。その早い事と申したら、まるで枯れた葡萄の蔓の東に火が移るやうでござります。ほくちに火が付くやうでござります。船が燃上りますと、大勢の人達が斬合つてゐる河面一ぱいに強い薫が致して参ります。そして燃立つ火の色が誰も今まで見た事のない色合でござります。

バルバラ。それは香水や柱物の木が湧き立つたり焼けたり致すのでござります。瓶に入れて船に乗せてあつた香水が湧いたり燃えたり致します。香水と薬味とが一しよになつて燃えます。船に火の移つたのがまたたく隙でござりました。周囲の空氣は直に好い匂で噎せるやうになりました。それと一しよに男達の物狂が愈々ひどくなりました。誰も

夫人。(氣が氣でなき様子。)え。それなのにあのお方がその場に入らつしやる。

オルデルラ。喧嘩の始まりましたのは女子が勝ほこつた眞最中でござりました。何百か、何千か知れない。旗を立てた船が、女子の遊山船を取巻いて、河水に流す花の鎖が、水の見えない程になつて、歌の聲と喜びの叫とが遠い處まで聞えてゐる眞最中でござりました。堀割を通つてミラノから来た方々でござります。ブリアモ・グリツチ様、マリオン・ポルツウ様、ピエロ・サグレド様、この人達が武装した兵士を連れて船で参りまして、無理やりに遊山船に乗込んで、パンテアを我物にして、けふの祭の主人公にならうとしたのでござります。もし云ふ事を聞かないなら、遊山船を焼いてしまふ、刀に掛けても云ふ事を聞かせて見せると申したのでござります。

夫人。そしてあの方を殺してしまつたのかい。殺してしまつたのかい。本當の事をわたしに云つて聞かせておくれ。早く云つて聞かせておくれ。もしやお前があの方のお殺されなさるのを見てゐたのではないのかい。

オルデルラ。あの方は御家來達と御一しよに亂暴な人達を遊山船に乗せまいと防いでお出でなりました。お討死なされた處は、わたくしは見ませなんだ。わたくしの見ましたのは遊山船のブリッジへ飛乗つたブリアモ・グリツチと斬

誰も命掛けで斬合ます。その船々が河を下つて参ります。入亂れて、重なり合つて、船の焼ける火を燈にして斬合ふのでござります。もう直き其處へ参ります。あれをお聞きなさりませ。あれをお聞きなさりませ。

(騒がしき物音の漸く近付くを聞く。圍の背景は燃ゆる船の火にて赤く照さる。夫人は苦痛と恐怖との爲に物狂ほしくなり、梯子に馳せ寄る。一二段登りてよろめく。女中達支へ助けんと馳せ寄る。魔女は地上に落ちたる蠟人形を取上げ、エヌスの立像の足の元に置く。蠟人形に刺貫きたる數多の針、銅像の暗色なる肌を反映して白く光る。)

ベンテラ。(螺旋梯子より。)あれ火が見えます。あれ火が見えます。遊山船でござります。女子の遊山船でござります。火に一ぱい包まれて、赤く焼けた人の死骸を一ぱい積んで参ります。大戦争でござります。刀が光ります。何千本かも知れぬ刀が光ります。見えるものはみな焔と血とでござります。

(夫人は螺旋梯子の中段まで登り、二本の柱の間にて、欄干につかまり、身を屈めて覗き、苦痛と恐怖さにて物狂ほしくなれる様にて詞無し。火の子満ちたる煙と叫喚の聲とこの別荘の上を越えて漲り響く。屍の如く蒼ざめたる夫人の顔、血の色の如き反射に染められて、こ

の悲壯なる幻の崇高、美麗を遺憾なく表現す。
聞ふ人々の聲。パンテア。パンテア。

—幕—

戀愛三昧

(シユニツツレル)

人物

ハンス・ワイリング

ヨゼツフスタット座のキ

リオン彈

クリスチエネ

その娘

ミイチイ・シユラッゲル

流行服飾女工

カタリナ・ビンデル

靴足袋造の妻

リナ

カタリナの娘、九歳

フリツツ・ロオプハイメル

學生

テオドル・カイゼル

學生

紳士

場所

キイン

時代

現代

第一幕

學生フリツツの部屋。意氣なる造作にて、住み心地好き

所。

最初に學生テオドル登場。臂に外套を掛ける。部屋に
入りたる後帽を脱ぐ。ステツキは猶手に持ちあふる。

フリツツ。(外より。)おやあ誰も來なかつたのだな。

家來の聲。はい。どなたもお出なさいませんでした。

フリツツ。(登場しつゝ。)辻馬車は返してしまつても好かつ

たのだなあ。

テオドル。無論さ。もう君が返してしまつたかと思つた。

フリツツ。(再び部屋を出て行かんとして、戸口にて。)あの

馬車を返してくれ。さうだな。お前ももうゐなくても好

い。けふは別段用はない。(部屋に歸りテオドルに。)なぜ

君は外套や帽子を置かないのだ。

テオドル。(デスクの前に立つ。)手紙が二三本來てゐるぜ。

(外套と帽を椅子の上に投げ、ステツキは矢張手に持

ちあふる)

フリツツ。(忙しげにデスクの側へ行く。)やあ。

テオドル。なんだ。なんにびつくりするのだ。

フリッツ。これは親父の手だ。(今一本の手紙の封を切る。)

レンスキイだな。

テオドル。遠慮しないで、讀むなら讀み給へ。

(フリッツ手紙を忙しげに讀む。)

君のお父さんは何を言つてよこしたい。

フリッツ。格別の事もない。五旬祭になつたら一週間程田舎へ歸つてゐて貰ひたいと云ふ事だ。

テオドル。うん。尤なわけだ。僕の考へでは、君は半年位歸つてゐても好い。

(デスクの前に立ちゐたるフリッツ、くるりテオドルの方へ向く。)

好いぢやないか。馬に乗つたり、自分で御者をしたりして、新鮮な空気を吸つて、山の牧場の女共でもからかつてゐるさ。

フリッツ。おい。ククルツツ地方には山の牧場なんぞはないよ。

テオドル。さうかい。兎に角僕の考へは君にだつて分かるだらう。

フリッツ。君一しよに来るか。

テオドル。遺憾ながら行かれないね。

フリッツ。なぜ。

テオドル。知れてゐるぢやないか。僕は卒業試験を受けるの

だぜ。無理に行けば、僕は君を田舎に引き留めて置く爲めにわざわざ行くのだが。

フリッツ。僕の世話なんぞしなくても好いよ。

テオドル。どうも僕の考へでは、君は新鮮な空気さへ吸つてゐれば好いのだ。けふなんぞ郊外へ出て、草や木の青くなつた中にゐた間は、君はいつもの機嫌の好い人間に戻つてゐた。

フリッツ。お褒に與かつて有難いよ。

テオドル。それからこゝへ歸つて来ると、勿論元氣沮喪してしまつてゐる。又危険なる空気に近づいたと云ふわけだ。

(フリッツうるさがるやうな身振をなす。)

君はさつき郊外にゐた時、どの位上機嫌でゐたか、自分には分からなかつたのだらう。殆ど常識のある人間に戻つてゐたと云つても好い位で、丁度昔の君のやうだつた。それからこなひだ、あの愛くるしい娘二人と一しよにゐた時も、君は機嫌が好かつたぜ。ところが現在ではまるで駄目だ。大方(イロニイの調子にて仰山に。)例の女の事を是非とも考へなくてはならないと云ふわけだらう。

(フリッツ立ち上がり不機嫌になる。)

君には僕の考へが分かるまい。僕はもうこの上傍觀してはゐない積りだからさう思つてくれ給へ。

フリッツ。いや早。ひどく猛烈に出掛けるね。

テオドル。僕だつて無論君に例の女を忘れてしまへと云ふのぢやない。ねえ君。(優しく)どうもあの事件は危険で、側から見てゐられないやうだね。あれが只一時の洒落になつてしまへば好いと僕は思ふのだ。君が今のやうにあの女を崇拜しないやうになつて見給へ。あいつ直ぐに君に優しくするやうになるに極つてゐる。さうなつたら、君に分かるだらう。あいつは決して恐ろしい女でもなんでもない。普通の若くて美しくて氣性のある女のやうにあいつを相手にして、面白く遊ぶ事が出来るに違ひない。

フリッツ。一體その危険で側から見てゐられないと云ふのはなぜだい。

テオドル。分かつてゐるぢやないか。君がいつかあいつを連れてゐなくなりはしまいかと思つて、僕は一日も安心してゐる事が出来ないのだ。

フリッツ。危険と云ふのはそれかい。

テオドル。(少し間を置く。)そればかりではない。

フリッツ。さうだ。そればかりではないよ。

テオドル。どんな途方もない事でも、すれば出来るからなあ。

フリッツ。(獨言のやうに。)そればかりではない。

テオドル。ぢや、何か極つた事を、君は考へてゐるね。

フリッツ。なあに。別に極つた事なんぞは考へてゐない(窓

の方を一目見る。)いつか一通何でもなかつたのだから。テオドル。なんだと。それはなんの話だ。僕にはまるで分らない。

フリッツ。なあに。なんでもないよ。

テオドル。なんだかさう云ひ給へよ。分かるやうに。

フリッツ。この頃はどうかするとひどく憶病になつてゐてねえ。

テオドル。なぜ。それには何か理由があるだらう。

フリッツ。なんにもありやしない。神經質になつたのだ。(イロニイの調子にて)良心の苛責とでも云へば云はれるだらう。

テオドル。いつか一通なんでもなかつたと云つたが、それはどんな事があつたのだい。

フリッツ。實はけふも又同じ事があつたよ。

テオドル。けふもあつたのだと。どんな事が。

フリッツ。(少し間を置く。)あれがさう云ふのだ。なんでも二人を附け廻つてゐるものがあるのだつて。

テオドル。どうして。

フリッツ。あれが妙な物を見るのだね。まるで幻視とでも云ふやうな物だ。(窓の側に立ち寄る。)いつもここへ来て、この窓掛の透間から、あの向うの町の曲り角を見るのだね。さうするとあそこに男が立つてゐるといふのだ。其男が

(半分にて言ひ息む)一體こゝからあの角にゐる人間の顔が見えるだらうか。

テオドル。覺束ないね。
フリッツ。僕もさう思ふよ。併し女は大騒ぎをするのだ。どうしてもこの内から出て行かれないと云ふので、泣いて泣いて、とうとう痙攣を起したり、僕と一しよに死んでしまひたいと云つたり、いろいろな騒ぎをするのだ。

テオドル。それはさうだらう。
フリッツ。(少し間を置く。)けふなんぞは僕がわざ／＼往來へ見に出なくてはならなかつた。まあ、平氣で散歩にでも出ると云ふ風で、僕が一人で出て見るのだね。無論近所近邊に、知つた顔の人なんぞゐなかつたよ。

(テオドル黙す)

ねえ、君。安心ぢやないか。さう人が突然地の底へ潜り込んでしまふものでないからね。ねえさうぢやないか。

テオドル。ふん。僕がなんと返辭をすれば好いのだ。それは人が地の底へ潜り込む事はないさ。併しそこらの内の入口に隠れる事はあるかも知れないよ。

フリッツ。なに。僕は一軒々々覗いて見た。

テオドル。ふん。そんな事をしたなら、さぞ平氣で散歩に出た人のやうに見えた事だらう。

フリッツ。好いぢやないか。誰もゐなかつたのだから。だか

ら僕は幻視だと云ふのだ。

テオドル。それはさうかも知れない。併し君、用心はしなくては行けないぜ。

フリッツ。それにあの男が氣取つてゐたら、それが僕に分からずにもる筈がない。きのふなんぞも芝居がはねてから、あの人達と一しよに晩飯を食つたのだ。向うは夫婦であるのだ。それは君、暢氣なものだよ。なんの氣取つてゐるものか。馬鹿らしい。

テオドル。僕は君に言ふがね。どうもこれは一番奮發して、斷然止めて貰はなくつてはならないね。僕の爲めに止めてくれるとしても好い。僕だつて神經があるからね。そこで君に例の女と關係を斷ち給へと、單純に云つたところで駄目だと思ふから、僕はもうこれまでにも、君に外の女を世話をししようと努力して見たのだがなあ。

フリッツ。それはいつの事だい。

テオドル。それ、二週間ばかりも前だつたか、僕がマイチイに逢ひに行く時、君を連れて行つたぢやないか。僕はマイチイに、友達の中で一番美しいのを連れて来いとさう言つたのだ。あの時連れて来た小造りな娘は、君にも中々氣に入つたらしかつたぢやないか。

フリッツ。さうさ。あれは中々好い子だよ。僕だつて胸の切ない思ひをしたり、危険を冒して逆上したやうになつてゐ

たりした跡で、あんな無邪氣な、おとなしい、可哀らしい娘と話をするのが、どんなに愉快だか知れない。

テオドル。さうださうだ。そんな風に保養になるやうな女でなくては行けない。女と云ふものはさうしたものなのだ。

だから僕なんぞは所謂おつな女は厭だ。何も女はおつてなくとも好い。面白ければ好いのだ。どうだ君、これからは僕の流儀に見えないか。なんでも危険があつたり、死ぬるの生きるのといふ葛藤があつたりしない女を拵へるのだね。最初の接吻を笑ひながら交換して、いざ別れるとなつてもしんみりと優しい話をして別れる仲が安全で好いよ。

フリッツ。それはさうだ。

テオドル。女といふものは人間らしくしてゐて、それで自分にも愉快であるものだ。なにも強ひて女を天使のやうにしたり悪魔のやうにしたりしなくとももの事だ。

フリッツ。いつかの女なんぞは、實に優しく、おとなしくて、僕には少し好過ぎる位だ。

テオドル。又さう来るやうでは困るなあ。あの女をまで君は眞面目に相手にするのかい。

フリッツ。なに。そんな氣はないよ。保養の爲だからね。テオドル。さうでない僕ももう手を引いてしまひたい。君の戀愛の悲壯劇には、僕は飽きた。お蔭でどんな退屈な目に逢ふか知れない。若し例の、良心がどうのからうと言

ひ出すなら、かう云ふ場合に適用する、僕の簡單な原則を白狀して聞かせよう。それは人にさせる程なら、己がすると云ふのだ。その人と云ふ奴は、どうせ逃れられない運命のやうに、出て来るのだからね。

(メルの音)

フリッツ。なんだらう。

テオドル。行つて見れば好いぢやないか。おや。もう眞つ蒼になつてゐるね。安心すべしだ。例の娘達に違ひない。

フリッツ。(思ひ掛けず、愉快なる事と感ずる様子。)なんだと。

テオドル。うん。實は君の御承諾は得なかつたが、あいつ等をけふこゝへ呼んで置いた。

フリッツ。(室を出でんとして。)なんだ。なぜ早くさう云はないのだ。知らないもんだから、奉公人まで返してしまつた。

テオドル。そんなものはゐない方が氣樂で好い。

フリッツ。(戸の外より。)やあマイチイさん。

(フリッツと共に、マイチイ手に紙包を持ちて登場。)

クリスチイネさんは。

マイチイ。今に跡から來ますの。テオドルさん。今日は。

(マイチイの手にテオドル、接吻す。マイチイ主人に。)あなた、びつくりなすつたでせう。テオドルさんがこちら

へ伺ふやうに、さう申しましたの。
フリッツ。實に好い思ひ付きでした。只困る事には、僕に言はないものだから。
テオドル。なんの困る事があるものか。(ミイチイの手より包を受け取らんぞす。)僕の書いてあげたものは皆揃つてゐるでせうね。
ミイチイ。ゐますとも。(主人に。)どこに置ませう。
フリッツ。好いから、僕が貰つて兎に角この小卓の上に置くとしませう。
ミイチイ。わたしテオドルさんの書いておよこしにならない物も買つて來ましたの。
フリッツ。まあ、その帽子をこつちへ下さい。さあ。(主人帽子をゴアミを受取り、ピアノの上に置く。)
テオドル。(けんのんがる様子。)一體何を買つて來たのです。
ミイチイ。お菓子よ。モツカ・クレム・トルテですの。
テオドル。いちきたなだなあ。
フリッツ。なぜクリスチイネさんは一しよに來なかつたのです。
ミイチイ。お父うさんを芝居まで連れて行つて置いて、あすこから電車で來ますの。
テオドル。親孝行だなあ。

ミイチイ。それは大變なの。不幸があつてからと云ふものはあんまり氣を付け過ぎる位ですわ。
テオドル。一體誰が亡くなつたのです。
ミイチイ。あのお爺いさんの妹さんですわ。
テオドル。は、あ。をばさんだね。
ミイチイ。縁付かないで、疾うから一しよにゐましたの。それが亡くなつたのですから、お爺さんが寂しがつて。
テオドル。ねえ、ミイチイさん。あのクリスチイネさんのお父うさんと云ふのは、背の低い、白髪を短く刈込んでゐる人でせう。
ミイチイ。(かぶりを振る。)あら。違ひますわ。髪を長くしてゐますの。
フリッツ。どうして君、そんな爺いさんをクリスチイネさんのお父うさんと思つたのだい。
テオドル。なに。こなひだレンスキイと一しよにヨゼツフスタット座へ行つた時、コントル・バスをやつてゐる爺いさんを見たのさ。
ミイチイ。コントル・バスではありませんわ。クリスチイネさんのお父うさんはキオリンを弾きますの。
テオドル。ああ、さうでしたか。僕は又コントル・バスだと思つた。(ミイチイ笑ふ。)何が可笑しいのです。キオリンを弾くに極つてはゐらないでせう。

ミイチイ。ほんとに好いお部屋だ事。窓からはここが見えますの。
フリッツ。この窓から見えるのは藥町です。それからこの隣の部屋からは。
テオドル。(詞急に。)おい。一體なんだつてそんな他人行儀な挨拶を爲合つてゐるのだい。もつとぞんざいな詞を使ふが好い。
ミイチイ。それは晩の御飯の時兄弟分のお盃をして、それからぞんざいな詞を使ふ事にしませうね。
テオドル。いやに堅く出るな。併しそれを聞いて置けば、少しは安心だ。時にお母あさんはどうしたね。
ミイチイ。(突然心配げなる顔色になり、テオドルの方へ向く。)まあ、聞いて下さいよ。お母さんはひどく。
テオドル。歯が痛むと云ふのだらう。知つてゐる、知つてゐる。お母あさんはいつも歯が痛みに極つてゐる。もう疾つくに齒醫者の所へ行つて好い時分だ。
ミイチイ。だつてお醫者さんがレウマチスだと云ふのですもの。
テオドル。(笑ふ。)ふん。レウマチスなら。
ミイチイ。(アルバムを一冊手に取る。)お立派な物が澤山あります事ね。(繰り開けつ。)これはどなた。おや。これはあなたね。軍服を着て入らつしやるわ。あなた軍人でお

出なさるの。
フリッツ。ええ。
ミイチイ。龍騎兵なのね。あなた黒の方なの。それとも黄いろの方。
フリッツ。(微笑む。)僕は黄いろの方です。
ミイチイ。夢見る如き様子。あの黄いろの方。
テオドル。おい。そんなにうつとりしてしまつては困るなあ。目を覺ませよ。
ミイチイ。そんなら今では豫備少尉になつてお出なさるでせう。
フリッツ。さうです。
ミイチイ。あなた、毛皮の付いたお服が好くお似合なさるでせうね。
テオドル。恐ろしく服裝が精しいなあ。おい。ミイチイ。かう見えても僕だつて軍人だぞ。
ミイチイ。あなたもやつぱり龍騎兵。
テオドル。うん。
ミイチイ。なぜそんならさうだと早く仰やらないの。
テオドル。僕はな、軍服を可哀がつて貰ひたくないのだ。自分可哀がつて貰ひたいからな。
ミイチイ。厭な。ねえ、あなた。今度一しよに出る時は、軍服を着て入らつしやいな。

テオドル。八月が来れば厭でも召集せられるのだ。

ミイチイ。あの八月。

テオドル。ああ、さうだつて。永遠な戀愛といふ奴も、八月までは覺えないかな。

ミイチイ。だつてまだ五月なのに、八月の事なんか、考へてゐられませんか。ねえ、フリッツさん。さうぢやありませんか。それはさうと、フリッツさん、あなたきのふなぜ逃げ出してしまひなすつたの。

フリッツ。逃げ出すつて。

ミイチイ。それ、あの芝居がはねてから。

フリッツ。そんなら僕がわけを話したのを、テオドル君は言はなかつたのですか。

テオドル。僕は言つたぜ。

ミイチイ。でも言わけなんかは、わたしの役には立ちませんわ。あら。さうぢやなかつた。クリスチエネさんの役には立ちませんわ。なんでもお約束をなすつたら、違へないやうにして下さらなくつては。

フリッツ。實は僕はあなたなんぞと一しよにゐたかつたのだ

が。

ミイチイ。本當。

フリッツ。ところが其が出来なかつたのです。あの校敷に一しよにゐた男があるでせう、あの男が離さないものだから

ミイチイ。いゝえ。男ではないでせう。あの女の方だわ。わたしのゐた所から見えないとお思ひなすつて。

フリッツ。それは僕の方からも見えたから。

ミイチイ。あなた、いつも一番背後の方に坐つて入らつしやつてね。

フリッツ。なに。いつもさうしてはゐませんでした。

ミイチイ。大抵さうして入らつしやつたわ。あの黒い天鵝絨の服を着た女の方の背後に坐つて、こんなにして。(滑稽なる身振)首をのぞけて見て入らつしやつたわ。

フリッツ。おやおや。大層好く見てゐましたね。

ミイチイ。それはわたしはどうでも好うございますの。ですけどわたしはクリスチエネさんだつたら。一體テオドルさんは芝居がはねてから、餘所の人と一しよになんか行かないのに。

テオドル。(息張る真似。それは僕は餘所の人なんかとは行かないさ。

(ベルの音。)

ミイチイ。きつとクリスチエネさんよ。

(フリッツ急ぎ出迎ふ。)

テオドル。少し頼みがあるがなあ。

(ミイチイ何事かと問ふ科をなす。)

當分の内で好いが、その軍人の昔馴染の事を忘れてゐてく

れないか。

ミイチイ。忘れようにもそんなものはありませんわ。

テオドル。いやいや。お前の知つてゐるだけの服装の事は、中々圖やなんぞを見たばかりで覺えたのではない。隠したつて分るよ。

(クリスチエネ手に花を持ちて登場。)

クリスチエネ。(ほんの少しばかり間の悪き様子にて會釋す)今晩は。(互に挨拶す。フリッツに)わたし共が参つても宜しかつたのでせうか。おおこりなさりはしないでせうね。

フリッツ。そんな事を云ふものぢやないよ。偶にはテオドル君の方が僕より氣が利く事もあるのだからね。

テオドル。どうだね。お父うさんはもう弾いてゐるのかね。

クリスチエネ。弾いてゐますとも。わたしが芝居まで連れて行つて来たのですもの。

フリッツ。ミイチイさんが僕達に其話をしたのです。

クリスチエネ。(ミイチイに)わたしあのカトリイネに引き留められてよ。

ミイチイ。おやおや。あの横著者が。

クリスチエネ。そんなでもないらしくてよ。わたしにはひどく親切にしてゐるわ。

ミイチイ。お前さん又誰の言ふ事をも眞に受けるのだもの。

クリスチエネ。だつてあの人が何もわたしを騙す筈がないわ。

フリッツ。一體そのカトリイネといふのは誰ですわ。

ミイチイ。靴足袋屋のお上さんで、誰でも自分より若いと氣にする女ですの。

クリスチエネ。だつてカトリイネさんだつてまだ若いぢやありませんか。

フリッツ。まあ、そのカトリイネさんの事はその位で置かうぢやないか。そのお前さんの持つて来たのは。

クリスチエネ。えゝ。あなたに上げようと思つて、花を少しばかり。

フリッツ。(花を受け取り、手に接吻す。)親切者だね。ちよつと待つて下さいよ。あの瓶に挿して置くから。

テオドル。待て。君には宴會の裝飾掛りになる資格がまるでないね。その花は食卓の上に蒔き散して置かなくては行けない。無論食卓へ巾を掛けてからの事だ。一體天井から花が落ちるやうにするのが本當だが、それはむづかしからうで。

フリッツ。(笑ふ。)うん。それはむづかしいよ。

テオドル。まあ、それまでこの中へ挿して置かう。

(花を瓶に挿す。)

ミイチイ。おや。もう暗くなりますわ。

(クリスチエネが外套を脱ぐ時、フリッツ手傳ふ。クリスチエネは帽をも脱ぐ。フリッツ外套と帽とを奥の方なる椅子の上に置く。)

フリッツ。今直ぐにランプを點けるからね。
テオドル。ランプだと。大違ひだ。蠟燭を點けるのだよ。その方が幾ら氣持が好いか知れない。さあ、ミイチイさん。来てくれるのだぞ。

(テオドルとミイチイと蠟燭に火を點す。窓と窓との間に腕附燭臺二つ、卓の上に蠟燭一つ、準備卓の上に蠟燭二つ。その間フリッツとクリスチエネと話しあふ。)

フリッツ。この頃はどうぞだね。
クリスチエネ。もうようございませう。

フリッツ。そこで。
クリスチエネ。わたしあなたにお目に掛りたくつて。

フリッツ。だつてきのふも逢つたぢやないか。

クリスチエネ。だつて、あんなに遠くからお見掛け申したつて詰まりませんわ。(間の悪氣に。)あなたこの間はひどうぞいませう。

フリッツ。分かつてゐるよ。さつきミイチイさんがさう云つたのだが、やつぱりお前さんもまだ子供なのだ。己はどうしても外す事が出来なかつたのだから爲方がない。それを察してくれなくては。

クリスチエネ。えゝ。ですが、あの時棧敷にゐた人達は誰々でございませう。
フリッツ。僕の知つた人さ。名前なんぞはどうでも好いちやないか。

クリスチエネ。そんならあの黒天鵝絨の上着を着てゐた女の方はどなた。

フリッツ。困つたなあ。僕はいつでも誰はどんな著物を着てゐたかまるで覚えてゐないのだ。

クリスチエネ。(甘えて。)あら。

フリッツ。さうは云ふものゝ、僕だつて場合に依つては覚えてゐるよ。初めて逢つた時、お前さんの著てゐた、あの濃い藍色のブルズなんぞは忘れはしない。それからきのふ芝居で著てゐた黒白のだんだらの上着も覚えてゐる。

クリスチエネ。あれはけふも著てゐますわ。

フリッツ。さうさう。遠くから見るとまるで變つて見えるよ。實際だ。それからそのメダイオンも覚えてゐる。

クリスチエネ。(微笑む。)そんならいつ掛けてゐましたの。フリッツ。さうさな。あの公園を散歩した時だよ。それ、子供が大勢遊んでゐたつね。あの時掛けてゐたのだから。

クリスチエネ。えゝ。あなた時々はわたしの事を思つて下さつて。

フリッツ。随分度々思ひ出すよ。

クリスチエネ。でもわたしがあなただの事を思ふ程は思つて下さいませんわ。わたしいつもあなたの事ばかり思つてゐますの。朝から晩まで。そしてあなたにお目に掛かつてゐる時でなくては、わたし何を見ても面白くはございませぬの。

フリッツ。だつて随分度々逢ふぢやないか。

クリスチエネ。あの度々ですと。

フリッツ。さうさ。夏にでもなつて御覽。こんなに度々逢ふ事は出来やしない。早い話が僕は二三週間旅行することもある。そんな時はどうぞだね。

クリスチエネ。(心配げに。)あら。旅行なさるのですつて。フリッツ。なに。さうぢやないよ。だが僕だつてどうかして氣まぐれに一週間位人に逢はずにゐようと思ふ事があるかも知れない。

クリスチエネ。まあ、なぜでせう。

フリッツ。只僕はそんな事もあるかも知れないと云ふのだ。自分の事を自分で好く知つてゐるが、己は氣まぐれだからな。それにお前さんの方でも二三日僕に逢はずにゐたいと思ふ事もあるかも知れない。そんな事があつても、僕は不思議だとは思はないのだ。
クリスチエネ。わたしそんな氣まぐれなんぞは出しませぬ

わ。

フリッツ。それが前から分かるものかね。

クリスチエネ。わたしには分つてゐますの。わたしあなたが大好き。

フリッツ。僕だつてクリスチエネさんは大好きさ。

クリスチエネ。でも違ひますわ。わたしの爲めにはあなたが何よりも大事なのですもの。わたしあなたの爲めには、本當に。(詞を切る。)わたしいつになつたつて、あなたに逢はないでゐたいなんぞと思ふ事はありませんわ。わたしの命のある間は。

フリッツ。(詞を遮る。)お待ちよ。そんな事は云はない方が好い。僕は大事な事を云ふのは嫌ひだ。永遠にどうのかうのとは云はないが好い。

クリスチエネ。(悲げに微笑む。)あなた御心配なさらなくつても好いのよ。これが生涯かうしてゐられないのだと云ふ事は、わたしも知つてゐるよ。

フリッツ。それは僕の云つた事を誤解してゐるのだよ。それは、(笑ひつつ。)かうしてゐる内に、いつか離れては生きてゐられないと云ふやうになるまいものでもないさ。だがそれは今からはお互に分らないのだ。詰まり人間だからね。
テオドル。(蠟燭を指さす。)どうぞ見てくれ給へ。氣の利か

ないランプなんぞの點いてゐるのとは違ふだらうがね。
フリッツ。成程。君は生れ付いた裝飾掛だね。
テオドル。ところでどうだい。もうそろ／＼御馳走を始めて
は。

ミイチイ。好いでせう。さあ、クリスチエネさん、お出なさ
いな。

フリッツ。まあ、ちよつと待つておくれ。何やかがある所
を、僕がお前さん達に見せるから。

ミイチイ。何よりテエブルに掛ける巾がなくつては行けませ
んわ。

テオドル。(道化方の聲色にて、イギリス風の發音をなす。)
「これがテエブル掛でござい。」

フリッツ。それはなんだい。

テオドル。あのオルフェウムに出た道化方を忘れたのかい。
「これがテエブル掛でござい。これがブリツキでござい。

これが小さいビツコロでござい。」
ミイチイ。あなた今度はいつわたしをオルフェウムに連れて
行つて下さるの。この間も約束をしてゐるぢやありません
か。今度行く時は、クリスチエネさんも一しよに來るの
よ。それからフリッツさんも。

(フリッツの準備卓より取り出したる卓被を受け取る。)
さらなれば、淺敷の知つた人は餘所の人ではなくつて、わ

が感しくて潤まらないがなあ。
フリッツ。それは悪くはないね。

テオドル。馬鹿に好い氣持がする。君はどうだい。
フリッツ。さうさ。僕もいつも今のやうな氣持になつてゐた
いね。

ミイチイ。ちよいと、フリッツさん、このコオファイイ沸かし
の中にコオファイイが道入つてゐますの。

フリッツ。えゝ。もう直ぐにアルコホルランプに火を點けて
も好いのですよ。その道具で煮ると、コオファイイの出來上
がるまでにはどうせ一時間掛かるのだから。

テオドル。(フリッツに。)僕なんぞはかう云ふ可哀らしい娘
一人と凄い奥さん十人位と換へても好いのだがね。

フリッツ。それは比較にならないよ。

テオドル。どうも我々は自分の愛してゐる女を憎んで、どう
でも好い女を愛するのだ。

(フリッツ笑ふ。)
ミイチイ。何を言つて入らつしやるの。わたし達にも少しは
聞かせて頂戴な。

テオドル。お前なんぞの聞く話ぢやない。こつちは哲學を遺
つてゐるのだ。(フリッツに。)かう云ふ女を相手だと、今
夜が最後の出合だとしても、矢張り同じやうに愉快だら
う。どうだね。

たし達ですわ。
フリッツ。成程。

ミイチイ。さらなれば黒天鵝絨の奥さんは一人で内へ歸るが
好いわ。

フリッツ。なんだつてそんなに黒を着てゐた女を氣にするの
だい。馬鹿げてゐるなあ。

ミイチイ。いゝえ。そんな人にはわたし達は構ひませんの。
さあ、これで好いわ。道具はどこにあるのでせう。

(フリッツ準備卓の抽出にある品々を示す。)
分かりましたわ。皿は。有難う。もう跡はわたし達ばかり
で出來ますわ。さあ、あつちへ入らつしやいよう。あなた
が入らつしやると、邪魔になるわ。

(この間、テオドルは長椅子の上に横になりある。そこ
へフリッツ來掛かる。)

テオドル。失敬だがちよいとの間寝かして置いてくれ給へ。
(娘二人にて食卓を飾る。)

ミイチイ。あなたもうフリッツさんの軍服を召した所を見
て。

クリスチエネ。いゝえ。
ミイチイ。さう。見せたいわ。それは様子が好いのよ。

(二人暫く話し續く。)
テオドル。長椅子の上にて) どうだい。僕はかう云ふ催し

フリッツ。さうさね。最後だとすると、どうしても幾らかメ
ランコロイの趣があるね。別れたい別れたいと久しく思つ
てゐた中でも、いざとなるとつらいものだ。

クリスチエネ。フリッツさん。小道具はどこにございます
の。

フリッツ。(奥の方、準備卓の側へ行く。)こゝだよ。
(ミイチイ前の方へ歩み出で、長椅子に横になりあるテ
オドルの髪に手の指を衝き込む。)

テオドル。いたづらをするなよ。

フリッツ。(ミイチイの持て來たる紙包を開く。)大した御馳
走だなあ。

クリスチエネ。(フリッツに。)あなた好く何もかも綺麗に始
末をしてお置きなされるのね。

フリッツ。えゝ。
(ミイチイの持て來たる品々を、フリッツ陳列す。サル
サイメの罐詰、冷肉、バター、チーズ。)

クリスチエネ。フリッツさん。あなたわたしに言つて聞かせ
て下さいませんか。

フリッツ。何を。
クリスチエネ。(ひどくはにかみて。)あの時の奥さんはどな
ただか。

フリッツ。よしておくれ。僕の氣持を悪くしては困るね。

(少し優しく)ねえ、その事を最初に約束して置いたでせう。なんにも問ひつこなしと云つたでせう。それが却て面白いんぢやありませんか。かうしてお前さんと一しよになつてゐる。その間は世界も何もなくなつてゐる。それで好いでせう。お前さんの事も、わたしは聞かないのだ。クリスチエ。わたしの事なんか、なんだつてお聞きなさるが好いわ。

フリッツ。ところが僕は聞かない。なんにも聞きたくないのだから。

ミイチイ。(卓に歩み寄る。)おやおや。そんなに亂暴にしては困るぢやありませんか。(食品を受取り、皿に載す。)これで好いわ。

テオドル。おい。フリッツ君。何か飲む物が内にあるかね。

フリッツ。うん。何かしらあるだらう。

(フリッツ前房へ出で行く。テオドル長椅子より立ちて食卓を見る。)

テオドル。好し好し。

ミイチイ。さあ、これで何も足りない物はない筈だわ。

(フリッツ酒の瓶二三本を持ちて登場)

フリッツ。さあ、これが飲む物だ。

テオドル。そこで天井から落ちる薔薇はどうしたのだ。

ミイチイ。さうさう。薔薇をすつかり忘れてゐたわ。

(瓶より薔薇を取り、椅子の上に乗じて、高き所より卓の上に花を落す。)

これで好いでせう。

クリスチエ。おやおや。随分御遠慮をしないわね。

テオドル。どうぞ皿の中へ落さないやうにしてくれ。

フリッツ。クリスチエさんはどこへ坐るのだね。

テオドル。栓抜はどこにあるのだい。

フリッツ。(準備卓より栓抜一つ取り出す。)それ。

(ミイチイ葡萄酒の栓を抜かんぞす。)

こつちへよこしたよこした。

テオドル。それは僕に遣らせて貰はう。(瓶を栓抜を受取る。)君にはその間遣つて貰ひたい事がある。

(ピアノを弾く真似をなす。)

ミイチイ。あゝ。それがようございますね。

(ミイチイ、ピアノの前に走り行き、蓋の上に載せある品々を椅子の上に移し、蓋を開く。)

フリッツ。(クリスチエに。)遣らうかしら。

クリスチエ。どうぞ後生ですから。いつか聴かせて貰かうと思つて、疾うから待つてみましたわ。

フリッツ。(ピアノの前に腰を掛く。)クリスチエさんも少し弾けるのだらう。

クリスチエ。(辭む振をなす。)いゝえ。一向。

ミイチイ。諛ですよ。中々上手ですの。それに歌ひますわ。フリッツ。驚いた。今までそんな話はずつとも聞かなかつたぢやないか。

クリスチエ。だつていつか歌ふかとお聞きなすつた事があつて。

フリッツ。一體どこで歌なんぞを稽古したのだね。

クリスチエ。稽古と云つては別にしませんわ。只お父うさんが少しばかり教へてくれましたの。聲の量がないのですから駄目。それに一しよにゐたをばさんが亡くなつてからは、内が前より一層陰氣になつてしまひましたの。

フリッツ。そこで毎日何をしてゐるのだね。

クリスチエ。それはいろ／＼ありますわ。

フリッツ。勝手の事でもするのかね。

クリスチエ。えゝ。それにノオトを寫しますの。随分澤山寫してよ。

テオドル。ノオトと云ふのは曲譜かい。

クリスチエ。えゝ。それに極まつてゐるぢやありませんか。

テオドル。恐ろしく金になるものだと云ふぢやないか。

(皆々笑ふ。)

少くも僕ならしつかり報酬をするね。あんな物を寫すのは馬鹿に骨が折れるに違ひないから。

ミイチイ。一體クリスチエさんがあんな事までして骨を折るのは餘計な事ですわ。(クリスチエに。)わたしなんぞは、お前さんの聲があれば、もう疾づくに芝居へ出てゐるわ。

テオドル。聲なんかなくつても出兼ねない質だなあ。どうだい。朝から晩までなんにもしやしないだらう。

ミイチイ。違ひますよ。これで弟が二人も學校へ行くのですから、毎朝支度をさせなくてはなりません。それから歸つて來ると宿題の手傳ひもしますわ。

テオドル。諛だ諛だ。

ミイチイ。諛だと云はれゝばそれまでだわ。それから去年の秋までは店に行つてゐました。午前八時から午後八時までですよ。

テオドル。(少しく嘲る調子。)どこのなんの店だい。

ミイチイ。裁縫店ですわ。お母あさんが又出ると云ひますの。

テオドル。(前の調子。)なぜよしたのだ。

フリッツ。(クリスチエに。)何か歌つて聴かせて貰ひたいな。

テオドル。それよりも御馳走に取り掛からうぢやないか。

それが濟んだら君が何か弾くのだ。好いだらう。

フリッツ。(立ち上がりつゝ、クリスチエに。)さあお出で。

「フリッツはクリスチエネを卓に導く。」
「ミイチイ。あら、コオファイイが。まだなんにも食べないのに、コオファイイが煮え越すわ。」

テオドル。もうどうなつても好いぢやないか。
ミイチイ。だつて煮え越すぢやありませんか。

（ミイチイ、アルコールランプを吹き消す。皆々食卓に就く。）

テオドル。ミイチイは何を食べるのだい。早速断つて置くが、菓子が一番跡だぞ。最初には何か酸っぱい物ばかり澤山食つて貰はなくちやならない。

（フリッツ葡萄酒を注ぐ。）

待つた。この頃はそんな注ぎやうはしないものだ。最近の注ぎ方をまだ知らないと思えるね。

（立ち上がり物體振り、瓶を手持ちてクリスチエネに。）

ウヨスラウ産千八百。

（跡の年數を口の内にて分らぬやうに言ひて注ぐ。次にミイチイに。）

ウヨスラウ産千八百。

前の如く注ぐ。次にフリッツに。）

ウヨスラウ産千八百。

（前の如く注ぐ。自分の席に歸り。）

ウヨスラウ産千八百。

（前の如く注ぐ。坐る。）

ミイチイ。（笑ふ。）ほんとにふざける人ね。

テオドル。（盃を擧ぐ。皆々盃を打ち合す。）プロジット。

ミイチイ。テオドルさんのお喜びに飲んでよ。

テオドル。（立ち上がる。）貴夫人並びに紳士諸君。

フリッツ。君直に始めては困るよ。

テオドル。（坐る。）そんなら跡にしよう。

（皆々飲食す。）

ミイチイ。わたし食卓演説が好き。わたしの甥がいますが、いつも韻文で演説しますの。

テオドル。その先生は何聯隊にゐるのだい。

ミイチイ。およしなさいよ。本當に手控もなんにも持たないで、韻文の演説をするの。クリスチエネさん。それは大したものよ。その癖もう若い人ではないの。

テオドル。それは年を取つたつて、韻文の演説をする事もあ

るさ

フリッツ。おや。みんなどうしたのだ。ちつとも飲まないぢやないか。クリスチエネさん。お飲みよ。

（盃を打ち合す。）

テオドル。（ミイチイ盃を打ち合す。一つ韻文で演説する、年を取つた人達の健康を祝して飲まうぢやないか。

ミイチイ。（ふざけて。）いゝえ。演説なんかしない。年を取

らないお方の健康を祝した方が好いわ。まあ。フリッツさんのやうな方ね。さあ、フリッツさん。今なら、お望の兄弟のお盃をしますわ。そして丁寧な詞を使ふ事をやめませうね。その代りクリスチエネさんとテオドルさんとも、兄弟にならなくちや厭よ。

テオドル。待つた。さうなると、この酒では行けない。これは兄弟の盃をする酒ではない。

（立ち上がり、外の瓶を取り、前の如き振りをなす。）

セレス・ド・ラ・フロントラ・ミル・ウイット・サン・サンカン

ト。

「一杯注ぐ毎にこの白を繰り返す。」

ミイチイ。（口紙めて。）ああ。

テオドル。みんなで飲むまで待たれないのかい。さあ、諸君、これから神聖なる契約をするよと云ふものですが、それに先立つて我等を邂逅するに至らしめた「偶然」そのものの爲めに一杯を擧げませう。と云ふやうなわけだ。

ミイチイ。もう澤山よ。

（皆々飲む。さてフリッツとミイチイと肘を交叉し、テ

オドルとクリスチエネと肘を交叉し、兄弟の契約をなす

時の式に依り、酒を飲み交す。飲み終りて、フリッツは

ミイチイに接吻す。テオドルはクリスチエネに接吻せん

とす。）

クリスチエネ。（微笑む。）そんな事をしなくてはならないのでせうか。

テオドル。無論さ。これをしなくては契約は無効だ。クリ

スチエネに接吻す。）さあ、これで好い。おの／＼自分の

席に歸つた歸つた。

ミイチイ。まあ、恐ろしく暑くなつた事。

フリッツ。それはテオドル君が方方へ蠟燭を點けたからだ

ね。

ミイチイ。それにお酒のせいもありますわ。

（安樂椅子に寄り掛かる。）

テオドル。さあ来い。さつきから欲しがつてゐたものを食は

せて遣るぞ。

（菓子の一切を切り取り、ミイチイの口に入れて遣る。）

さあ猫奴。旨いか。

ミイチイ。おいしい事よ。

（テオドル又一口口に入れて遣る。）

テオドル。さあ、フリッツ君、時節到来だ。何か弾いてくれ

給へ。

フリッツ。（クリスチエネに。）弾かうかね。

クリスチエネ。どうぞ。

ミイチイ。何か氣の利いたものにして頂戴よ。

（テオドル銘々の盃に酒を注ぐ。）

もう飲めなくつてよ。(飲む)
クリスチネ。(一口紙めて) このお酒は強いわ。
テオドル。(盃に指さし、フリッツに。) さあ。

(フリッツその盃を飲み乾し、ピアノの側に歩み寄る。
クリスチネ立ちてフリッツの側へ行き坐る。)

マイチイ。フリッツさん。あなたあのドツベルアアドレル
(二羽の鷲)をお弾きなさいな。

フリッツ。ドツベルアアドレルですと。どんなのでしたつ
け。

マイチイ。テオドルさん。あなたドツベルアアドレルは弾け
なくて。

テオドル。僕はピアノはまるで弾けないのだ。
フリッツ。なに僕は知つてゐるのだよ。只ちよいと忘れを
したのだ。

マイチイ。そんならわたしが歌つて聴かせて上げませう。ラ
ラ・ラ・ラ・ラ。

フリッツ。ははあ。分つた分つた。
(ピアノを弾く。されど誤りたる所あり。)

マイチイ。(ピアノの側に行く。) い、え。かうですわ。
(一本指にて旋律を弾く。)

フリッツ。さうださうだ。
(フリッツ弾く。マイチイ合せて歌ふ。)

けずに置き給へな。
クリスチネ。(フリッツに。) どうなすつたの。

フリッツ。なに。なんでもないのです。
(ベル又鳴る。フリッツ立ち上がり、その儘ちつと立ち
ゐる。)

テオドル。なに。留守の積りであれば好いぢやないか。
フリッツ。そんな事を云つたつて、ピアノの音は外の廊下ま
で聞えるのだ。それに往來から窓に明りの點いてゐるのが
見えるからなあ。

テオドル。そんな事はどうでも好いぢやないか。構はずに留
守の積りでゐれば好い。

フリッツ。どうも僕には氣になつてならない。
テオドル。大抵なんだと云ふ事は知れてゐるぢやないか。手
紙か。それとも電報か。(時計を出して見る。) まさか九時
にもなつて君の所へ来る客もあるまいぢやないか。
(ベル又鳴る。)

フリッツ。え、兎に角見て来よう。
(フリッツ退場。)

マイチイ。ほんとにあなたのお友達も正直過ぎるわ。
マイチイ、ピアノの上を指を走らす。)

テオドル。今はよせよ。(クリスチネに) あなたはどうし
たのです。やつぱりベルの鳴るのが氣になるのですか。

テオドル。大方その歌にも美屋落か何かがあるのだらう。
フリッツ。(又弾き誤りて手を停む。) どうも行けない。歌を
聞いて合せるだけの熟練が己の耳にはないのだ。
(フリッツ空想の曲を弾く。)

マイチイ。(タクト一つ終るや否や) そんなものは駄目です
わ。

フリッツ。笑ふ。そんなに悪く云つたものぢやありません
ん。これでも僕の作つたのだ。

マイチイ。だつてそんなのでは踊られませんか。
フリッツ。踊られるか踊られないか試して見なくては分らな
いでせう。

テオドル。(マイチイに。) さあ、来い来い。一しよに遣つて
見よう。

(テオドルはマイチイの腰に手を掛け、二人にて踊る。
クリスチネはピアノの側に立ちゐて、鍵盤を見る。
ベルの音。フリッツ突然ピアノの手を停む。テオドルと
マイチイはそれに構はずに踊りゐる。)

テオドル。 (同時に) どうしたのだい。
マイチイ。 (同時に) どうなすつたの。

フリッツ。ベルが鳴つたぢやないか。(テオドルに。) 君まだ
誰かを呼んで置いたのかい。

テオドル。この外に誰を呼ぶものか。ベルを鳴らしたつて開

けずには置き給へな。
クリスチネ。(同時に) どなた。
フリッツ。(わざとらしく微笑む) 濟まないがみんな一しよ
に一寸あすこへ這入つてゐて貰はなくぢや。

テオドル。何事が始つたのだ。
クリスチネ。どなたが入らつしやいましたの。

フリッツ。なに。なんでもないのです。一寸話をしなくては
ならない男の客が来たのです。

(隣室の戸を開き、娼女を中に入らしむ。テオドル跡よ
り行き掛かりて、フリッツを見る。何事かま問ふ表情。
フリッツ囁く。恐怖の表情。)

あいつだ。
テオドル。はあ。

フリッツ。どうぞ這入つてゐてくれ給へ。
テオドル。しつかりしてゐ給へよ。係婦かも知れないぜ。
フリッツ。好いから這入つてくれ給へ。

(テオドル隣室に入る。フリッツ足早に室内を歩みて廊
下へ退場。
舞臺一時空虚になりゐる。續いてフリッツは一人の服
装立派なる三十五歳計の男を先に立てて登場す。その
男は黄なる外套を著し、帽を脱ぎて手袋を嵌めたる手に

持ちあふる。フリッツ室内に入りつつ。
お待せ申して済みませんでした。さあ、どうぞ。
客。(甚だ軽き調子。)なに。そんな事はどうでも好いので
す。まことにお妨げをして済みません。
フリッツ。いゝえ。どういたしまして。お掛けなさいませ
んか。

(フリッツ客に椅子を示す。)

客。どうも飛んだお妨げをしたやうですね。なにか面白さう
なお催しで。

フリッツ。なに友達か二三人来てゐました。

客。(腰を掛けつゝ、矢張優しき調子にて。)假裝舞踏の眞似事
ですか。

フリッツ。(用心して。)それはどう云ふわけです。

客。でもそのお友達は女の帽子や肩掛を持つてゐたと見え
ますから。

フリッツ。ああ、さうですか。(微笑む。)それは女の友達も
交つてゐたかも知れませんか。

(沈黙。)

客。世の中はどうかすると随分面白いものですよ。さうでは
ありませんか。

(客主人をちらつゝ見る。主人暫くの間目を合せゐてきて
目を反らす。)

りませんか。フリッツ。(十分強き聲にて。)そんな物を残しては置きませ
ん。

(客フリッツの顔を見る。間。)

そこでこの上の御要求は。

客。(嘲る調子。)なにをわたしが要求するかと云ふのです
か。間ふのですか。

フリッツ。僕はあなたのお望みに任せる決心です。

客。(冷淡に會釋す。)さうですか。承知しました。

(客、室内を見廻し、飲食物を載せたる食卓と女の帽子
とに目を付け再び劇怒を發せんとするが如き表情をな
す。フリッツその様子を見て前の詞を繰り返す。)

フリッツ。僕はあなたのお望みに任せる決心です。明日正午
まで外出をせざるにませう。

(客又會釋し廊下の方へ向き、行き掛る。フリッツ室の戸
口まで送り出さんとする。客辭む科をなす。客の退場した
る後、フリッツ爲事卓の側に歩み寄り、暫く立ちあふる。
次に窓の下に走り行き、窓掛けの透間より覗く。街の人
道を行く客を見送る者の如し。次に窓の下を離れ、一秒
間程視線を床に向けて立ち止まりあふる。次に隣室の戸口
に歩み寄り半ば開けて呼ぶ。)

テオドル君。一寸。

フリッツ。どうでございませう。なんの御用でお尋ね下さつ
たかそれを伺ひたいのですが。

客。お易い御用です。(落ち著きて。)實はわたくしの妻があ
なたの所にエエルを忘れて参りましたさうです。

フリッツ。あのあなたの奥さんが、わたくしの所にエエルを
ですか。(微笑む)それは少し變つた御笑談で。

(客突然立ち上がり、片手を椅子の背に支へ、強烈なる
聲にて次の白を言ふ。)

客。さうです。エエルを忘れて置いたのです。

(フリッツも又立ち上がる。二人立ちて向き合ふ。客フ
リッツを打たんとするが如く拳を上げ、憤怒と厭惡との
交りたる聲にて。)

ああ。

(フリッツ拳を避け、一步跡へ引く。客長き間を置きて。)

これはあなたの手紙です。

(客外套の隠しより一束の手紙を取り出し、爲事卓の上
に擲つ。)

あなたのお手許にある方の手紙を返してお貰ひ申しませ
う。

(フリッツ避くる如き科をなす。客劇しき聲にて詞に意
味を含ませ。)

(次の一段は急速に言動する事を要す。)

テオドル。(興奮して。)どうだ。

フリッツ。あいつ萬事知つてゐたよ。

テオドル。なにを知るものか。君が係蹄に掛けられたのだら
う。正直に白狀したのぢやないか。君がお目出たいのだ。
君が。

フリッツ。(手紙の束を指さす。)この手紙を返したのだ。

テオドル。(ざくりとす。)ふん。(間。)僕のいつでも云ふ事
だが、手紙と云ふものは遺るものぢやないよ。

フリッツ。けふ午後にあそこの下の所にゐたのはあいつだつ
たのだ。

テオドル。そこでどうなつたのだ。早くさう云ひ給へ。

フリッツ。君に是非頼まなくてはならない事があるよ。

テオドル。それは心得てゐるよ。

フリッツ。それは分かつてゐるが、その事ではない。

テオドル。そこで。

フリッツ。これがどうなるとしても。(詞を切る。)さうだつ
け。女通をさういつまでも待たせて置くわけには行かま
い。

テオドル。構ふものか。あいつらは待つてゐるよ。そこで君
は何を言ひ掛けたのだ。

フリッツ。これがどうなるとしても、君が今夜の中にレンス

キイの所へ行つてくれる方が好いのだが。

テオドル。直ぐ行けと云ふ事なら、直ぐでも行く。

フリッツ。今行つたつてゐやしない。十一時から十二時迄の間
間きつとカツフェエに来るのだ。その時揃まへて、都合
が出来たらもう一遍こゝへ歸つて貰ひたいのだがね。

テオドル。まあ、そんな顔をするのはよし給へ。百の物が九
十九までは無事で済むよ。

フリッツ。ところが無事で済むまいて。

テオドル。君まだ覚えてゐるだらう。あの、去年のドクト
ル・ビルリンゲルとヘルツとの一件も、今度の事とまるで
同じぢやないか。

フリッツ。そんな氣休めはよし給へ。君にだつて分かつてゐ
るだらう。なに、あいつは即座に僕をこの場で打ち殺せば
好いのだ。詰まり同じ事だから。

テオドル。(悪さ。)これは盛んだ。大した御挨拶だ。それで
はレンスキイと僕とはなんの役にも立たないと云ふ事にな
るね。僕達がそんな事をさせて、見てゐると思ふのかい。

フリッツ。好いからもうよし給へ。君達だつて先方の要求を
全部容れずにはゐられない事になるのだ。

テオドル。ふん。

フリッツ。なぜ君はそんな心にもない事を言つてゐるのだ。
何もかも分つてゐる癖に。

テオドル。馬鹿な。全體からいふ事は運次第だからね。な
に、今日君が向うを。

フリッツ。(耳にも掛けず。)女が不思議に前知してゐたよ。
僕も一しよに前知してゐたのだ。

テオドル。よせよ。

フリッツ。(爲事卓に歩み寄り、手紙の束をしまふ。)女は今
何をしてゐるか知ら。あいつが歸つてどうかしやしないだ
らうか。テオドル君どうぞ今夜向うの内では何事があつたか
あす搜つて見てくれ給へ。

テオドル。出来るかどうか知れないが、兎に角遣つて見よ
う。

フリッツ。それに餘り事が延びないやうにしてくれ給へよ。

テオドル。まあ、早くてあさつての朝だね。

フリッツ。(殆ど怯れたる様子。)ああ。

テオドル。しつかりしてゐ給へ。ねえ、君、人の確信と云ふ
ものにはまるで價値がない事はあるまいぢやないか。そこ
で僕は確信してゐる。この事件はきつと無事に済むのだ。

(熱心に話す内、不自然なる快活の調子となる。)なせだか
知らないが、どうも僕にはさう云ふ確信があるのだ。

フリッツ。(微笑む。)君は實に好い人だよ。そこで女連にな
んと云つたものだらう。

テオドル。そんな事はどうでも好いぢやないか。つい歸つて

くれと云はうか。

フリッツ。それは行けないよ。成るだけ面白く騒がなくち
や。クリスチイネには少しも氣取られないやうにするの
だ。僕が又ピアノを弾いてゐるから君二人を呼んでくれ給
へ。

(テオドル不同意らしき表情をなしつつフリッツの云ふ
が儘にす)

ところで君、なんと云ふ積りだ。

テオドル。お前達の知つた事ではないと云ふさ。

フリッツ。(ピアノの前に坐し、振り返る。)それでは駄目だ
よ。

テオドル。そんなら友達が来たのだとか何とか出たらめを
云ふさ。

(フリッツ數音を弾す。)

さあ、こちらの用は済みました。どうぞ御歸人方のお出を
願ひます。

(この白と共に戸を開く。)

ミイチイ。もう好いの。歸つてしまつて。

クリスチイネ。(フリッツの側に馳せ寄る。)フリッツさん。
どなたが入らつしやつたの。

フリッツ。(ピアノを弾きつゝ。)そんなに人の事を聞きたが
るものぢやないよ。

クリスチイネ。そんな事を言はないで言つて聞かせて頂戴
な。

フリッツ。どうもお前さんには話しくいね。それにお前さ
んなんぞのまるで知らない人なのだよ。

クリスチイネ。(甘えて。)どうぞ。後生ですからほんとの事
を言つて頂戴な。

テオドル。此様子では君はいつ迄もうるさく付き纏つて糾問
せられさうだなあ。言つては行けないよ。言はない事にあ
の人に約束してゐるぢやないか。

ミイチイ。クリスチイネさん。およしよ。厭に物體ぶつて隠
してお出なのだから、隠させて置くが好いのよ。

テオドル。さつき半分踊つてよしたのだから、ミイチイと終
まで踊らなくちやあ。(曲馬の道化役の聲) さあ、樂長
さん頼むよ。ちよいとした手輕な所を。

(フリッツはピアノを弾く。テオドルとミイチイと踊る。
數節の後。)

ミイチイ。もう踊れないわ。

(ミイチイ長椅子に倒れ掛かる。テオドル、ミイチイに接
吻し、長椅子の背に腰を掛く。フリッツはピアノの前に
坐したる儘にてクリスチイネの両手を取り顔を見る。)

クリスチイネ。(夢の覺めたる如き態度。)なぜお弾きなさら
ないの。

フリッツ。(微笑む。)もう今夜は澤山だ。
クリスチエ。わたしもあなたのやうに弾けると好いと思ふわ。

フリッツ。たんと稽古をしてゐるかね。
クリスチエ。たんとは出来ませんわ。内では何かしら用があるのですもの。それに内のピアノと云つたら、それはひどいの。

フリッツ。己が一つ行つて弾いて見て遣りたいものだ。そればかりではない。お前さんの室が一度見たいよ。
クリスチエ。(微笑む。)あなたのお部屋のやうに綺麗ではないのよ。

フリッツ。それからまだ一つ己の望がある。それはお前が身の上話を委しくしてくれるのだ。極く委しくなくては行けない。お前の事と云つたら、己はほんの少ししきや知らないからなあ。

クリスチエ。そんなに話す程の事はありませんわ。それに秘密なんぞはないのですもの。外の方とどうのかうのと。フリッツ。今まで戀をした事はないのかね。

(クリスチエ黙りてフリッツの顔を見る。フリッツその手に接吻す。)
クリスチエ。わたしこれからだつて外の人と一しよにはならない積りでゐますの。

フリッツ。(殆どせつなげなる如き表情。)そんな事を云ふのぢやない。お前なんぞにそんな事が分かるものか。どうだい、お父うさんは澤山可哀がつてくれるかい。

クリスチエ。それは可哀がつてくれますわ。ほんとにわたし濟まないやうな氣がしますわ。何もかもお父うさんに打ち明けてゐた時の事を思ふと。

フリッツ。そんな事を氣にするものぢやないよ。誰だつてたまには内証事もするものだ。世間がさうしたものだからなあ。

クリスチエ。あなたがわたしを本當に可哀がつて下さるのだと、それがわたしにしっかりと分りさへすれば好いのです。さうだとなんにも心配はなくなつてしまふのです。

フリッツ。それが分からないかい。
クリスチエ。それはいつも今のやうにお話をして下さる事なら、それは。

フリッツ。おい。大層窮屈な坐りやうをしてゐるね。
クリスチエ。好いのですよ。わたしこれで結構。
(クリスチエ頭をピアノの上に乗せ。フリッツ立ち上がり、クリスチエの髪を撫づ。)わたし嬉しいわ。
(室内ひっそりしめる。)

テオドル。おいフリッツ君、葉巻はどこにあるかい。

(テオドル準備卓の側に立ちて、葉巻箱を捜す。フリッツその側に近づく。ミイチイ居眠す。フリッツ葉巻の箱をテオドルに渡す。)

フリッツ。お。まだコオファイがあつたのだつて。
(フリッツ茶碗二つに注ぐ。)

テオドル。おい、みんなコオファイを飲まないかい。
フリッツ。ミイチイさん。お前さんの注がうか。
テオドル。好いから寝かして置かうぢやないか。それに君も今夜はコオファイは飲まないが好いぜ。成るだけ早く床に遣入つて、しつかり寝なくちや。

(フリッツ相手の顔を見て苦笑す。)
兎に角現状は現状の通りだ。だが何も大層らしくしなくても好いし、又陰氣臭くしなくても好い。出来るだけ著實に遣つ付けるのだ。こんな場合にはそれが一番だ。

フリッツ。そんなら君今夜の内にもう一度レンスキイを連れて来てくれるかね。

テオドル。考へて見たがそれは愚だよ。あすの朝で澤山だ。フリッツ。併し僕はさうして貰ひたいのだが。

テオドル。そんならさうしよう。
フリッツ。君、女連を内へ送り届けてくれるかね。
テオドル。さうしよう。直ぐにさうしよう。おいミイチイ。起きるのだ。

ミイチイ。おや。コオファイを飲んでゐるのね。わたしにも一杯頂戴な。

テオドル。それ。

フリッツ。(クリスチエに。)草臥れたかい。
クリスチエ。そんなにして下さると、わたし嬉しくつてよ。

フリッツ。ひどく草臥れたかい。
クリスチエ。(微笑む。)お酒のせいですわ。それに少し頭痛もしてゐますの。

フリッツ。外へ出て風に當ると直るよ。
クリスチエ。もう歸るのでせうか。あなた送つて下さらなくつて。

フリッツ。濟まないが己はけふ内にゐなくてはならない。まだ少し用があるから。
クリスチエ。(再び醒覺して。)まあ、今時分からなんの用がおありなさいませうの。

フリッツ。(殆ど厳格なる調子。)又始まつた。そんな癖はよさなくては行けないよ。優しく。實は己はひどく、臥れてゐるのだ。テオドルも己もけふ二時間も田舎を歩き廻つたのだからな。

テオドル。ほんにけふは愉快だつた。近い内にみんなであつちの方へ出掛けようぜ。

ミイチイ。さうなさいね。二人とも軍服を着て行くのですよ。

テオドル。田舎へ散歩に行くのを面白がるだけ幾分か自然を解してゐるのだから、褒めて遣つても好いなあ。

クリスチイネ。今度はいつお目に掛かれるのでせう。

フリッツ。(精神経質に。)その時になれば言つて遣るよ。

クリスチイネ。(悲しげに。)そんならさやうなら。

(クリスチイネ掛かる。)

フリッツ。(クリスチイネの悲しげなる様子に氣づく。)そんなら又あした逢はうね。

クリスチイネ。(嬉しげに。)本當。

フリッツ。あの公園にしよう。こないだの所だ。さう。六時頃だよ。好いかい。

(クリスチイネ頷く。)

ミイチイ。(フリッツに。)あなた送つてくれて。

テオドル。見給へ。そんないな詞を使ふ事はミイチイ位上手な奴はない。

フリッツ。濟まないがけふは内にゐなくてはならないね。

ミイチイ。あなた氣樂ね。ほんとに内まで行く道の遠い事を思ふとうんざりするわ。

フリッツ。ああ。さうさう。ミイチイさん。好きな生菓子がまだそつくりあるぜ。お土産にして上げようか。

ミイチイ。(テオドルに。)貰つても好くつて。

(フリッツ生菓子を包む。)

クリスチイネ。まるで赤さんのやうね。

ミイチイ。フリッツに。)そんならそのお禮に明りを消して上げませうね。

(ミイチイ蠟燭を片端より一本づつ消す。最後に 事卓の上の蠟燭一本のみ燃え残る。)

クリスチイネ。あの窓を開けませうか。なんだかむつとするやうですから。

(クリスチイネ窓を開き、向ひの家を見る。)

フリッツ。さあ、己が明りを持つて送つて行くから皆お出で。

ミイチイ。もう廊下の明りは消えてゐるでせうか。

テオドル。知れた事よ。

クリスチイネ。まあ、廊下から来る風がせいせいして好い心持ですこと。

ミイチイ。春風だわ。

(フリッツ蠟燭を手を持ちて立ちゐる。ミイチイ戸口にほんとに御馳走様でしたわね。

テオドル。(女等を押しやるやうにして。)さあさあ行くのだから行くのだ。

(フリッツ皆々を送り出す。戸は開きたる儘になる。廊下にての話聲聞ゆ。續いて家の戸を開く音聞ゆ。)

ミイチイ。さやうなら。

テオドル。氣を付ける。そこには段があるぞ。

ミイチイ。お菓子有難うよ。

テオドル。そんな大きい聲をするなよ。餘所の人が目を覺さあ。

クリスチイネ。さやうなら。

テオドル。そんなら又。

(フリッツが外にて戸を閉ぢ錠を叩く音聞ゆ。フリッツが再び登場し、蠟燭を寫事卓の上に置く時、家の戸を開き、又閉づる音聞ゆ。フリッツ窓に往き往來を見下し挨拶す。)

クリスチイネ。(往來より。)さやうなら。

ミイチイ。(同じく往來より、元氣好く。)あばよ。

テオドル。(笑談に叱る。)こら。

(テオドルの何か言ふ聲、ミイチイの笑ふ聲聞え、足音次第に遠くなる。テオドル、ドツメルアアドレルの旋律を口笛にて吹く。その音次第に遠くなり聞えずなる。フリッツは猶數秒間窓より外を見て、さて窓の側の長椅子に身を倒す。幕。)

第二幕

クリスチイネの部屋。質素なれども清潔になじあり。

クリスチイネ外出せんとして衣服を更めゐる。カタリナ

外より扉を叩き、次いで登場。

カタリナ。クリスチイネさん、今晚は。

クリスチイネ。(鏡の前に立ちゐるが、振り返る。)おや。カタリナ。どこかお出掛なの。

クリスチイネ。なに、そんなに急ぐ事はなくつてよ。

カタリナ。内のがさう云ふのですが、レネル公園へわたし

共と一しよに晩の御飯を食べにいらつしやらない事。今晚

は公園に演奏があるのですつて。

クリスチイネ。まあ御親切様ね。ですが、わたしけふは歌目

ですの。また今度のことにして下さいな。好いでせう。お

おこりなすつては厭よ。

カタリナ。誰がおこるものですか。おこるわけがないぢやあ

りませんか。わたし共と一しよに行くよりか面白いことが

あるのでせう。

(クリスチイネ目の表情をなす。)

お父さんもう座へお出になりましたの。

クリスチイネ。いゝえ。まだこれから内へ歸つて来て出掛ま

すの。この頃はやつと七時半に開くのですからね。

カタリナ。さうさう。ほんとにわたし忘れっぽい事ね。そんならお父さんの歸つてお出のを待ち受けてみて今度の新しい狂言の切符を貰ひませう。この頃なら貰へさうなものですね。

クリスチエネ。貰へますとも。もうこの頃のやうに夕方の時候が好くなると、誰も芝居には遣入りませんからね。

カタリナ。そんな時もなくつては、私共には芝居は見られませぬのさ。どこかの座に近づきの人もあつて、こんな時に切符でも貰はなくつては。それはさうと、あなたお出掛なら私に構はないで下さいよ。それは内のはさぞ残念がるでせう。それに今一人の人も。

クリスチエネ。あの今一人の人とはどなたでございませぬの。

カタリナ。内のピンデルさんの甥です。分つてゐるぢやありませんか。あの人も、この頃では位置が出来て身が固まつたと云つて喜んでゐますの。

クリスチエネ。(冷淡に。)おや。それは好うございませぬ。

カタリナ。月給も中々取れるのですよ。それに人柄の好い男ぢやありませんか。あなたの事をいつも褒めてゐますよ。

クリスチエネ。そんならわたしは御免蒙つて出て参りますよ。どうぞ御ゆつくり。

カタリナ。ほんにあんな人の好い男たらありませんね。あなた

か。このキインは随分廣い町ですから、何も男と出逢ふのに、自分の内から一町も離れない所で出逢ふ事にしなくつて好いぢやありませんか。

クリスチエネ。だつてそんな事はどなたのお邪魔にもならないかと存じますが。

カタリナ。實はね、内のがわたしにさう云つた時、わたしは

聴だとはかり思つてゐましたの。内のが見付けたのですよ。わたしさう云ひましたの。それはお前さん人違へだらう。

あのクリスチエネさんに限つて、夕方になつてから人の目に付くやうな若い檀那方と散歩なんぞしなされる筈がない。もしひよつとしてそんな事をしなされるにしても、何も

この通を歩きなされるには及ぶまいとさう云ひましたの。すると内のがかう云ひますのさ。そんならお前自分で聞いて

見るが好い。何も不思議な事はないぢやないか。もう己なんぞの所へは疾うから顔も見せなくなつてしまつた。其代

りあのミイチエネさんと歩き廻つてゐるのだ。一體ミイチエネさんと云ふ奴がおとなしい娘の付き合はれる女かいと云

ひますのさ。ねえ、お前さん。男と云ふものは口が悪いものですからね。そんな風ですから、あのフランツにもそんな話をしたのですが、フランツは又ひどくおこつてしまひ

ましてね、己はあの娘に限つて、そんな事をしないのを知つてゐる。あの娘の事を彼此云へば己が相手だとさう云ひ

たの事なんぞ幾ら話して聞かせたつてまるきり聴だと思ふのです。

(クリスチエネ目の表情をなす。)

あゝした男があるものですよ。

クリスチエネ。さやうなら。カタリナさん。

カタリナ。さやうなら。(餘り毒々しくなき調子にて。)あんまり人を待たせるのも好くない事ですから、早く行つてお遣りなされるのが好いでせう。

クリスチエネ。まあ。あなたどう云ふ思召でそんな事を仰やるの。

カタリナ。なにね別にどうといふ事はありませんのさ。わたしだつてあなたのする事を無理だとは思ひませぬよ。若い時は二度は来ないもんですからね。

クリスチエネ。さやうなら。

カタリナ。クリスチエネさん。一寸お待ちなさいよ。わたしは何もあなたのしてお出の事を彼此云ふのではありませんが、お心易い中ですから、只少し氣を付けて上げようかと思ひますの。どうでせう、あんまりあらはに人に知れないやうに、氣を付けるやうになすつては。

クリスチエネ。どうもわたしは分かりませぬわ。それはなんの事を仰やるのでせう。

カタリナ。分からないのですつて。可笑しいぢやありません

ましたの。それからあなたが内の事をどんなに好くしてお出だとか、亡くなつたお婆さんをいつもどんなに大事にしてゐなすつたとか、不斷どんなに儉約にして、質素な暮らしをしてゐなされるとか、いろんな事を話しましたの。(間。)

どうでせう。わたし共と一しよに演奏を聞きにお出なさらないつて。

クリスチエネ。有難うはございますが。

(ワイリング登場。手に接骨木の枝を持ちゐる。)

ワイリング。やあ。ピンデルさんの奥さんぢやないか。どうです。

カタリナ。有難う。

ワイリング。リナさんはどうしました。それに御主人は。

カタリナ。お蔭でみんな達者です。

ワイリング。それは結構ですなあ。(クリスチエネに。)おやまだ内にゐるのかい。こんな好い天氣なのに。

クリスチエネ。今出掛けようと思つてゐた所ですわ。

ワイリング。それが好い。それが好い。ねえ奥さん。わたしは今あのリニエの公園を通つて歸つたのだが、丁度接骨木の花の眞つ盛りで、それは綺麗でしたよ。つい警察の目を偷んで、一折折つてしまひました。

(接骨木の枝をクリスチエネの手に渡す。)

クリスチエネ。まあ、綺麗です。お父さん有難うよ。

カタリナ。まあ、お巡りさんに目付からなくつてお爲合せね。

ワイリング。奥さんはそんな事を云ひますが、この一枚位折つたつて、綺麗な事も匂のする事も、折らない前とちつとも變つてはゐませんか、好いちやありませんか。

カタリナ。でもみんながそんな事を言つた日には。

ワイリング。それは困りますがね。

クリスチネ。そんならお父さま、ちよつと出て参りませう。

ワイリング。さうだな。二十分間待つてくれれば己の座へ行くのと一しよになるのだがなあ。

クリスチネ。ですけれど、わたしミイチイをさそふやうに、さう云つて置きましたから。

ワイリング。さうかい。その方が好いだらう。若い者は若い者同士が面白いものだ。そんなら行つてお出。

クリスチネ。(父に接吻す。さてカタリナに。) そんならカタリナさん、さやうなら。

カタリナ。この頃はひどくミイチイさんと中好しになつてお出のやうですね。

(クリスチネ退場。ワイリング優しき表情にて見送る。)

ワイリング。さうらしいのですよ。まあ、友達でも出来て、これまでのやうに内にばかりゐないやうになつたのが有難

カタリナ。さうでせうね。姿もあんなに好いのですから。

ワイリング。ところが、コオラスなんぞに這入つたつて、末の見込はありませんからね。

カタリナ。ほんに娘を持つた人と云ふものは心配の絶えないものですね。わたし共でも、あのリナがもう五六年しようものなら大きな女になるだらうと思ひますよ。

ワイリング。まあ、そこへお掛けになつて、御ゆつくり話してお出になつたらどうですね。

カタリナ。ええ。さう致してゐられないのですよ。もう内のが迎へに来る筈です。實はクリスチネさんも御一しよに

来てお貰ひ申さうと思つたのですが。

ワイリング。ははあ。娘をどこかへお連れになるのですか。

カタリナ。ええ。レネル公園に演奏がありますので、クリスチネさんの氣晴しに、御一しよに参らうかと存じましたの。少しは氣晴しもなさるが宜しいのですからね。

ワイリング。さうです。冬の間申叙しく暮したのですから、氣晴しをして貰はなくてはなりません。それがどうしてお供をしなかつたのでせう。

カタリナ。なぜですかねえ。内のビルデンさんの甥が、一しよに参ると申したからかも知れません。

ワイリング。成程。さうかもしれませぬよ。なんでもその甥

いと思つてゐますよ。そんな事でもないよ、あの子はまるで樂みと云ふものがないのですから。

カタリナ。それはさうですね。

ワイリング。どうも奥さんにこんな事を云ふのは變ですが、實にわたしはあの子が見てゐられないやうに思ふ事があるのですよ。稽古から歸つて来て見ると、その所に坐つてゐて裁縫をしてゐるのでせう。それから午飯を食つてしまふと、又その所へ腰を掛けてノオトを寫し始めるぢやありませんか。

カタリナ。それはどうせ金持の内の娘の方が樂をするには違ひありませんのさ。時にクリスチネさんは近頃唱歌はど

うなさいましたの。

ワイリング。さあ。どうも思はしくもないのですよ。成程室内演奏の時歌だけの聲はあります。節も親の耳には悪くはないやうに聞えます。だがあれで暮しを立てて行くと云ふ事はどうでせうか。

カタリナ。さうですかねえ。惜しい事でございますね。

ワイリング。そこでそれが自分にも分かつてゐるので、わたしも好い鹽梅だと思ふのです。まあ、自分で自分を買ひ被つて、跡になつてから落膽するやうな事だけはないでせう。それはわたしの出る座のコオラスの中へ入れる事なら、造作はありませんが。

カタリナ。それはどうも思はしくもないのですよ。成程室内演奏の時歌だけの聲はあります。節も親の耳には悪くはないやうに聞えます。だがあれで暮しを立てて行くと云ふ事はどうでせうか。

カタリナ。さうですかねえ。惜しい事でございますね。

ワイリング。そこでそれが自分にも分かつてゐるので、わたしも好い鹽梅だと思ふのです。まあ、自分で自分を買ひ被つて、跡になつてから落膽するやうな事だけはないでせう。それはわたしの出る座のコオラスの中へ入れる事なら、造作はありませんが。

カタリナ。それはどうも思はしくもないのですよ。成程室内演奏の時歌だけの聲はあります。節も親の耳には悪くはないやうに聞えます。だがあれで暮しを立てて行くと云ふ事はどうでせうか。

カタリナ。さうですかねえ。惜しい事でございますね。

ワイリング。そこでそれが自分にも分かつてゐるので、わたしも好い鹽梅だと思ふのです。まあ、自分で自分を買ひ被つて、跡になつてから落膽するやうな事だけはないでせう。それはわたしの出る座のコオラスの中へ入れる事なら、造作はありませんが。

カタリナ。それはどうも思はしくもないのですよ。成程室内演奏の時歌だけの聲はあります。節も親の耳には悪くはないやうに聞えます。だがあれで暮しを立てて行くと云ふ事はどうでせうか。

カタリナ。さうですかねえ。惜しい事でございますね。

ワイリング。そこでそれが自分にも分かつてゐるので、わたしも好い鹽梅だと思ふのです。まあ、自分で自分を買ひ被つて、跡になつてから落膽するやうな事だけはないでせう。それはわたしの出る座のコオラスの中へ入れる事なら、造作はありませんが。

カタリナ。それはどうも思はしくもないのですよ。成程室内演奏の時歌だけの聲はあります。節も親の耳には悪くはないやうに聞えます。だがあれで暮しを立てて行くと云ふ事はどうでせうか。

カタリナ。さうですかねえ。惜しい事でございますね。

ワイリング。そこでそれが自分にも分かつてゐるので、わたしも好い鹽梅だと思ふのです。まあ、自分で自分を買ひ被つて、跡になつてから落膽するやうな事だけはないでせう。それはわたしの出る座のコオラスの中へ入れる事なら、造作はありませんが。

カタリナ。それはどうも思はしくもないのですよ。成程室内演奏の時歌だけの聲はあります。節も親の耳には悪くはないやうに聞えます。だがあれで暮しを立てて行くと云ふ事はどうでせうか。

カタリナ。さうですかねえ。惜しい事でございますね。

ワイリング。そこでそれが自分にも分かつてゐるので、わたしも好い鹽梅だと思ふのです。まあ、自分で自分を買ひ被つて、跡になつてから落膽するやうな事だけはないでせう。それはわたしの出る座のコオラスの中へ入れる事なら、造作はありませんが。

カタリナ。それはどうも思はしくもないのですよ。成程室内演奏の時歌だけの聲はあります。節も親の耳には悪くはないやうに聞えます。だがあれで暮しを立てて行くと云ふ事はどうでせうか。

カタリナ。さうですかねえ。惜しい事でございますね。

ワイリング。そこでそれが自分にも分かつてゐるので、わたしも好い鹽梅だと思ふのです。まあ、自分で自分を買ひ被つて、跡になつてから落膽するやうな事だけはないでせう。それはわたしの出る座のコオラスの中へ入れる事なら、造作はありませんが。

カタリナ。それはどうも思はしくもないのですよ。成程室内演奏の時歌だけの聲はあります。節も親の耳には悪くはないやうに聞えます。だがあれで暮しを立てて行くと云ふ事はどうでせうか。

カタリナ。さうですかねえ。惜しい事でございますね。

くして暮してゐて、とうとう足袋職か何かが来て婿になつてくれたところで、それで好いと云ふものもあるまいぢやありませんか。

カタリナ。それは内のは足袋職はしてゐますが、あれでも人に不義理をした事のない堅い人ですから、わたしは結構だと思つてゐますよ。

ワイリンド。(宥むるやうに。) いや。これは恐れ入りました。何もあなたの事を言つたのぢやありませんよ。あなただつて若い時を無駄に過した方ぢやないのでせう。

カタリナ。そんな時の事は覚えてはゐませんでせう。

ワイリンド。そんな事を言ふものぢやありません。わたしにならどんな話をしてお聞かせなすつても大丈夫だ。もうあなたのやうな年配になれば、なんと云つても昔の面白かつた事を思ひ出して榮む外ないのでせうから。

カタリナ。そんな思ひ出すやうな事は、わたしにはありませんね。

ワイリンド。どうですか。

カタリナ。それは萬が一そんな、あなたの云ふやうな事があつたにしても、それがなんになりませう。跡に残るものは後悔ばかりですから。

ワイリンド。しかし、思ひ出す事のないやうな日を送つたら(聲色を勵まさずに、平聲なる調子にて。)きのふもけふも

あすも、幸福もなく、愛情もなく、たゞ世の中を何がなしに暮したら、その跡には何か好い物が残るでせうか。

カタリナ。あなた、そんな事を言ひますが、あなたの所にお出なすつたあのお姉さんなんぞはどうです。それ御覽なさい。あの方の事を言ひ出すと、あなたまだ悲しげなお顔をなさるぢやありませんか。

ワイリンド。それは實際姉の事を思ひ出すと、今でも悲しくなるのですよ。

カタリナ。その筈です。あなた方御きやうだいのやうに中の好い方つてありませんでした。好くわたしが人にさう言ひましたつけ。ほんにあのワイリンドさんのやうな弟を持つた人は爲合せだと。

(ワイリンド拒む科をなす。)

だつて本當ぢやありませんか。あなたはまだお年が若いのに、あのお姉さんの二親代りになつてお上げなすつたのですからね。

ワイリンド。まあ。それはそんなものです。

カタリナ。勿論さうしてお上げなすつた代りには、あなたのお心では又それが慰めにもおなりになつたでせう。己はあんな不爲合せな人の世話をしてゐるのだと云ふお心持は悪いお心持ではないでせうからね。

ワイリンド。さうですね。それは姉がまだ娘らしい様子を

てゐた頃は、丁度あなたの云はれる様に、わたしも自分に人に功德をしてゐるのだと思つて、えらがつてゐた事もありません。その内いつとなく姉も髪が白くなり、顔に皺が寄つて来て、とうとうお婆あさんになつたのです。その時わたしは自分のした事が、本當に分かつて来たのです。

カタリナ。まあ。

ワイリンド。そこであそこの部屋で、ランプをつけて、姉と向き合つてゐますと、姉がいつもの静かな微笑を顔に浮べてさも運命に安んじたやうな様子をして、恩を謝するやうにわたしの顔を見つてゐますのです。その時わたしは心の内で、その儘その床の上へ坐つてしまつて姉にあやまらなくつてはならないやうに思つたのです。實にわたしは濟まない事をした。なぜわたしは姉えさんを大切に、それと同時にあらゆる幸福を姉えさんの身の上から奪つたのだらう。

(間。)

カタリナ。それはさう仰やればそんな物かも知れませんが、あなたのやうな弟御があればこそ、年を取つてから後悔も何もなくてゐられたと云ふものではありませんか。さう云ふ身の上になられたら、それを有難いと思ふ女は、あなたのお姉えさんばかりではありませんよ。

(ミイサイ登場。)

ミイチイ。今晚は。お内はもう眞つ暗です事ね。なんにも見

えやしませんわ。おや。ピンデルさん所の奥さんですね。

お内の檀那様が下であなたを待つて入らつしやつてよ。クリスチエネさんはお内ではなくなつて。

ワイリンド。今しがた出て行きましたよ。

カタリナ。ミイチイさん。道で逢はなかつたの。お前さんと約束してお出だつたと云ふぢやないか。

ミイチイ。いゝえ。兎に角掛け違つて逢はずにしまつたのでせう。あなたは檀那様と演奏會へ入らつしやるのですつて

ね。ピンデルさんがさう仰やつたわ。

カタリナ。え。内のは音楽が大好きですの。それはさうと大層好い帽子です事ね。新しいのでせう。

ミイチイ。さうぢやありませんの。あなたお忘れなすつて。去年の春被つてゐたぢやありませんか。裝飾だけ新しくしたのですわ。

カタリナ。自分で裝飾をなすつたの。

ミイチイ。さうよ。

ワイリンド。大層上手だねえ。

カタリナ。それはその筈ですわ。わたしも好く忘れてしまふのだが、あなたは一年も裝飾品を拵へる店にお出でしたわね。

ミイチイ。どうかすると、たし又あんな風な店に這入らなく

てはならないかも知れませんの。お母さんがさうしろと云ふのですもの。お母さんが云ひ出すといやをうなしですからね。

カタリナ。お母さんもお母者でせうね。

ミイチイ。有難う。まあ達者でゐますの。少しばかり歯が痛い云つてゐますが、お醫者様の話ではレウマチスだから直ぐ直るのですつて。

ワイリング。うん。わたしはもうかうしてゐられないのだつた。

カタリナ。そんならわたしも御一しよに下へ降りて参りませう。

ミイチイ。わたしも御一しよに行きませうね。あ、ワイリングさん。あなた外套を着て入らつしやるが好いわ。けふなんぞは夜遅くなると、きつと寒いのよ。

ワイリング。さうですかねえ。

カタリナ。寒さうですね。一體あなたはもつと用心なさらなくてはいけませんわ。

(クリスチイネ登場)

ミイチイ。おや。クリスチイネさんがお歸りだわ。

カタリナ。もう散歩してお出なすつたの。

クリスチイネ。え。ミイチイさん今晚は。わたし頭痛がして。(腰を掛く。)

ワイリング。どうしたと。

カタリナ。きつと空気のせいですわ。

ワイリング。どうしたと云ふのだい。ミイチイさん。済みませんがその洋燈を點けて下さい。

(ミイチイ、ランプに火を點くる用意をなす)

クリスチイネ。あら、それはわたしがしてよ。

ワイリング。己は明りを點けてお前の顔を見なくては。

クリスチイネ。あら、お父様なんでもありやしませんわ。きつと外の空気のせいせう。

カタリナ。春先の時候が障る人は好くありますよ。

ワイリング。ねえ、ミイチイさん。あなたはクリスチイネのところゐて下さるでせうね。

ミイチイ。ゐますとも。

クリスチイネ。お父様。大した事ではないのですから。そんな事には及びませんわ。

ミイチイ。わたしの内なんぞでは、わたしが頭痛位したつて、お母さんがそんなに氣にしてはくれませんの。

ワイリング。(依然腰を掛けぬる娘に。)少しはよくなつたかい。

クリスチイネ。(椅子より立つ。)わたしもう働けてよ。(微笑。)

ワイリング。さうかい。それで大い様子が好くなつた。(カタリナに)

カタリナに。)もう笑ふ顔を見て安心しましたよ。そんなら己は行つて来るぞ。(クリスチイネに接吻す。)己の歸つて来る迄には頭痛を直してゐてくれろよ。

(ワイリング戸口に行き掛かる。)

カタリナ。(小聲にてクリスチイネに。)どうですな。あの方と喧嘩でもして来なすつたの。

(クリスチイネ拒む如き科をなす。)

ワイリング。(戸口にて、カタリナに。)そんなら奥さん。

ミイチイ。さやうなら。

(ワイリングがカタリナと退場。)

クリスチイネさん。なぜ頭痛がするのだから知つてゐて。それはきのふおいしい酒を戴いたせいよ。わたし自分がなんともないのが不思議だと思ふわ。だが随分面白かつたわねえ。

(クリスチイネ頷く。)

二人とも氣の利いた人達だわねえ。どこと云つて厭なところはないでせう。それにフリッツさんの部屋は立派だね。テオドルさんの所なんぞは。(詞を切る。)どんなだか知らないけれど、あんなではあるまいと思ふわ。まだひどく頭痛がするの。なぜなんとも云はないの。どうしたの。クリスチイネ。あの方入らつしやらなくつてよ。

ミイチイ。そんなら誰を働いて来なかつたのね。そんな目に

逢はせられるのはお前さんのせいよ。

クリスチイネ。まあ。なぜでせう。わたし何もしやしないぢやありませんか。

ミイチイ。それはお前さんがあんまり人を好くし過ぎるからだわ。向うが好い氣になつてしまふわ。それだもんだから人を馬鹿にした事をするやうになるの。男は皆さうだわ。

クリスチイネ。そんな事を。亂暴な事ばかり云つて。

ミイチイ。何が亂暴なのですか。わたし理窟のない事は言はなくつてよ。わたしもう疾うからお前さんのしてゐる事が氣に食はないの。どこかで待ち合せると、向うが遅く来るでせう。別れる時だつてお前さんを送つては来ないでせう。一しよに芝居に行つたつて、どこかの人を見付ける

と、その様敷へ行つてしまふでせう。それからけふはとうとうお前さんに待ちほけを食はしたのね。そんな事をせられてもお前さんは好い氣になつてゐて、おまけにこんな目

附をして(滑稽的に秋波を送る眞似をなす。)あの人を見るのなもの。

クリスチイネ。もうおよしよ。お前さんはわざとそんな意地

悪らしい事を云ふのだわ。お前さんだつてテオドルさんが

好きぢやないか。

ミイチイ。好きだつて。それは好きさ。だけれどテ

ドルさんにそんな勝手な事はさせないわ。どんな男にだつてこつ

ちが厭な氣持になるやうな事をさせて平氣でゐはしないわ。男と云ふものはそんなにして遣る程の値打のあるものぢやないからね。

クリスチエネ。まあ。お前さんだつてこれ迄ついでそんな事を言つた事はないぢやないか。

ミイチイ。それはさうだわ。これまでわたしお前さんに遠慮してゐたから打ち明けた話なんぞはしなかつたの。あんまりお前さんがきちんとして澄ましてゐるもんだからわたしはどんなに恐れ入つてゐたか知れないわ。だけどその時からわたしさう思つてゐたの。なんでもクリスチエネさんけまるで感じの無いやうにしてゐるが、一度どうかなるよ、きつと一しよ懸命になるだらうとさう思つてゐたの。なんでもお前さんのやうな人は最初のために眞剣になつて離れられなくしてしまふのだわ。それでも爲合せな事にはその初戀の時にわたしの様な好い友達がゐて智慧を貸して上げるから大丈夫さ。

クリスチエネ。まあ。そんな事を。

ミイチイ。だつてわたしを好い友達とは思はなかつて。かうしてわたしが付いてゐて「あの人もやつぱり外の男と同じ男だよ。男と云ふものはそいつのお蔭で只の一時間でも心配なんぞをして遣るには當らないのだよ」と云つて、氣を付けて遣るまいものなら、それこそお前さんなんぞはど

んな事を考へ出すか知れはしないわ。だからわたしはいつもさう云つてゐるのだわ。男の言ふ事はみんな嘘だつて。クリスチエネ。まあ。お前さん何を言つてお出なの。男がどうのからいつてわたし男と云ふものがどんなものだらうがそんな事はどうでも好いの。わたしあの方の外に男の事なんぞは知りたくなくつてよ。わたし生涯あの方でない男には構はない積りだから。

ミイチイ。おやおや。どうしたと云ふのだらう。お前さん何を考へてゐるの。そんならあの人はお前さんに。ふん。それはそんな事もないには限らないだらうがね。だけれど、さうするには最初からあんな事になつては駄目だわ。

クリスチエネ。もう好いからおよしと云へば。
ミイチイ。やれやれ。わたしにどうしろと云ふのだらうねえ。わたしのせいぢやないわ。そんな事なら初めから好く考へて掛らなくちや行けないわ。そんなわけならちよいと顔を見ても眞面目で掛かつて来るのだと分かる様な人の出て来るのをちつと待つてゐるより外ないわ。

クリスチエネ。ミイチイさん。どうぞもうそんな事は言はないで下さい。わたしけふはそんな事を言はれるとつらくつてならないから。

ミイチイ。(人を好くして。)まあ。お前さんは困りものだわねえ。

クリスチエネ。ねえ。どうぞわたしをけふは一人であつて頂戴な。おこつてはいやよ。

ミイチイ。なんでわたしがおこるものかね。もう行つてよ。わたしだつてお前さんの氣に障る事なんぞを云ふ積りではなかつたわ。

(ミイチイ立ちさらんさす。)

おや。フリッツさん。

(フリッツ登場。)

フリッツ。今晚は。

クリスチエネ。(喜び叫ぶ如く。)あら。フリッツさん。

(クリスチエネ立ちて迎へ、抱き附く。ミイチイ、こゝには自分の用事はないと云ふ表情にて、ひそかに室を出づ。)

フリッツ。(優しく女を振り放す。)まあ。ちよつと。

クリスチエネ。みんなでさう云ひますの。あなたはもうわたしを棄てておしまひなすつたのだと云ひますの。ねえ、あなたそんな事はなさらないでせう。まだなさらないでせう。まだ今直ぐには。

フリッツ。誰がそんな事を云ふのだね。どうしたと云ふのだ。(女をさする。)まあ。少し落ち着いてくれなくては困るね。實はこんなに出し抜けにこゝへ這入つて来てはお前さんがびつくりするだらうと思つてゐたのだがね。

クリスチエネ。いゝえ。あなたが傍にゐてさへ下されば。

フリッツ。好いよ好いよ。まあ氣を落ち着けておくれ。長くわたしを待つたのかい。

クリスチエネ。なぜ入らつしやらなかつたの。

フリッツ。ちよいと差支へがあつたのだ。それで遅れたのだ。それから公園へ来て見ると、お前さんがゐないから直ぐに内へ歸らうかと思つたよ。するとどうしたわけか、むちやくちやにお前さんに逢ひたくなつたのだ。この可哀らしい顔が見たくなつたのだ。

クリスチエネ。(嬉し氣に。)本當でせうか。

フリッツ。それから急にお前さんがどんな所に住まつてゐるか見たくなつたのだ。實際だよ。是非一度見て置かなくてはと思ふと我慢が出来なくなつてとうとうこの二階まで上がつて来てしまつた。來られて困りはしないのだね。

クリスチエネ。そんな事を。

フリッツ。誰にも見つかりはしなかつた。それに父うさんが座へ行つてゐるのは知つてゐたよ。

クリスチエネ。いゝえ。人がなると云はうと、わたくしそんな事は構ひませんわ。

フリッツ。こんな部屋にゐたのだね。(室内を見廻す。)これがお前さんの部屋なのだね。中々好いぢやないか。クリスチエネ。それでは丸つきり見えはしませんわ。

(クリスチイネ、ランプの笠を取らんぞす。)
フリッツ。およしよ。まぶしくつて行けない。その儘にして
お置き。こんな所だね。お前さんが好くわたしに話して聞
かせた窓はこれだね。こゝでいつも爲事をしてゐるのだね。
好い見晴しぢやないか。(微笑む) 随分人の内の屋根が澤
山見えるなあ。それにあの向うの眞つ黒に見えるのは、あ
れはなんだね。

クリスチイネ。あれがカアレンベルヒですわ。
フリッツ。さうだ。わたしの部屋よりこゝの方がよつば
ど好いぜ。

クリスチイネ。まあ。

フリッツ。わたしもかう云ふ高い所に住んで見たいと思ふ事
があるよ。こんなに澤山の家の屋根を見渡すのは面白いぢ
やないか。それにかう云ふ裏通りは静かで好いだらう。

クリスチイネ。でも晝間は随分さう／＼しうございますわ。
フリッツ。時々馬車なんぞの通る事もあるかね。

クリスチイネ。めつたにありませんわ。さう／＼しいのはあ
の向ひの錠前屋です。

フリッツ。成程。それは溜らないな。

(フリッツ坐す。)

クリスチイネ。でもいつもの事ですから慣れてしまひます
の。やかましい音も聞えなくなつてしまひますの。

フリッツ。(再び急に立ち上がる。) 一體わたしは初めてこの
部屋へ来たのだらうか。なんだか疾うから知つてゐる所の
やうでならない。詰りかう云ふ所に住んでゐるのだらうと
想像したのが、すつかり當つたのだ。

(フリッツ再び室内を見廻さんぞ。)

クリスチイネ。あら。御覽なざるものはありませんわ。

フリッツ。あの繪はなんだね。

クリスチイネ。およしなさいよ。

フリッツ。ところが、あいつが見たいのだ。

(フリッツ、ランプを取り上げて圖を照す。)

クリスチイネ。別離と再會ですわ。

フリッツ。うん。成程。別離と再會だ。

クリスチイネ。わたくしだつてあれが好い繪だとけ思ひませ
んの。あちらのお父う様のお部屋には、少しは好い繪が掛
かつてゐますわ。

フリッツ。こつちのけなんの繪だね。

クリスチイネ。あれは若い女が窓から外を見てゐる所です
わ。外は冬で雪が降つてゐますの。棄てられたる女と云ふ
題ですわ。

フリッツ。ふん。(ランプを卓の上に置く。)

ははあ。そこに

あるのがお前さんの書棚だね。

(小さき書棚の傍へ行き坐す。)

クリスチイネ。そんな所を御覽なすつては厭。

フリッツ。なぜ。好いぢやないか。やあ。シルレル。ハウ

フ。それからこれは會話辭書か。大變だ。

クリスチイネ。Gの部までしかありませんの。

フリッツ。(微笑む) さうかい。なんでも書いてあるから調

法な本だね。色々な畫があるから。それを見るのだらう。

クリスチイネ。え、それは見ますわ。

フリッツ。(その儘坐してゐる) それからあの燧爐の上にあ

る肖像は誰だね。

クリスチイネ。(得意らしく) シユウベルトぢやありません

か。

フリッツ。(立ち上る) さうだつて。

クリスチイネ。お父う様の大好きな人ですわ。お父う様も自

分で作曲をなすつた事がありますわ。本當に好い旋律があ

りますの。

フリッツ。もう今では作曲しないのかね。

クリスチイネ。もうしてゐませんの。

(間。)

フリッツ。(坐す) 實にこゝは居心の好い所だ。

クリスチイネ。本當にお氣に入りましたの。

フリッツ。本當だ。これはなんだね。

(卓の上なる、造花を挿したる花瓶を手に取る)

クリスチイネ。又何かお見付けなすつたわ。

フリッツ。おい。こんな物を挿して置くといふ事があるもの

か。五味を被つたやうに見えて行けないぢやないか。

クリスチイネ。だつて五味なんぞ付けて置きはしませんわ。

フリッツ。ところが造花と云ふものは皆五味を被つたやうに

見えるものだ。お前さんの部屋には新らしい匂のある本當

の花が生けてなくつては行けない。これからはわたしが。

(忽然感動して、詞を切る。)

クリスチイネ。どうなすつたの。なんと仰やるお積りでした

の。

フリッツ。なんでもない。

クリスチイネ。(立ち上がる。優しく) さう仰やいよ。

フリッツ。實はあしたからは新らしい花をよこさうと云ひ掛

けたのだ。

クリスチイネ。そしてそんな約束をするのはよさうとお思ひ

なすつたのでせう。その筈ですわね。あすはもうわたしの

事なんぞを思つては入らつしやらないでせうから。

(フリッツ拒むが如き科をなす。)

それはわたしがお側にゐないと、わたくしの事なんぞ思つ

て入らつしやらないからでせう。

フリッツ。そんな事があるのですか。

クリスチイネ。いゝえ。知つてゐますわ。どうもそんな感じ

がしますの。

フリッツ。飛んだ勘違ひだ。
クリスチエネ。だつてそれはあなたのせいよ。わたくしになんでも隠してばつかし入らつしやるのですもの。あなたのお身の上などはまるで話してお聞かせなさいぢやありませんか。一體あなた毎日毎日どんな事をして入らつしやるの。

フリッツ。そんな事を話すのは造作はないのだ。講義を聞きに行く。併しそれは毎日ではないよ。それからコオファイイ店へ行く。それから本を読む。どうかするとピアノを弾く。又誰かと無駄話をする事もある。人を訪ねる事もある。詰まらない事だけで、話甲斐がないのだ。そんな話は退屈ぢやないか。ところがわたしはもう行かなくては。

クリスチエネ。もうお歸りなさるの。
フリッツ。もうお前さんのお父うさんが歸る頃だらう。
クリスチエネ。いゝえ。まだ中々ですわ。もつと入らつしやいよ。一分間でも好いわ。もう少し入らつしやいよ。

フリッツ。實は少し。テオドルが待つてゐるし。少し話があつてね。

クリスチエネ。あの、けふ。
フリッツ。さうだよ。
クリスチエネ。あしただつて好いでせう。

フリッツ。實はわたしはあしたはキインにゐないかも知れないのだ。

クリスチエネ。まあ。あの、キインに入らつしやらないとは。

フリッツ。(女の心配する様子に氣附き、わざと落ち着きて晴やかに) なんにも不思議な事ではないぢやないか。ちよいと一日位旅行する事もある。それが二日になる事もあると云ふものだ。

クリスチエネ。どちらへ入らつしやるの。
フリッツ。どこと云つて極まつてゐないのだ。まあ、そんな變な顔をする事はおよしよ。實は田舎の二親の所へ行つて来ようかと思ふのだ。それでも氣になるかね。

クリスチエネ。その親御さん達の事もわたくしにはちつとも話してお聞かせなさいのね。

フリッツ。ほんとお前さんはまだ子供だね。なんでも人間は家族の事なんぞ忘れて、一人である時が愉快なものだ。さう云ふ心持はしないのかね。

クリスチエネ。いゝえ。一體あなたがまるで御自分のお身の上の事を話してお聞かせなさいのはひどいわ。なんでもあなたの事なら面白いのですもの。折々晩になつて一時間位御一しよにゐるだけでは、わたくしは物足らなくなつてなりませんもの。さう云ふ晩には別れてしまひますと、あな

たがどこへ入らつしやつて何をして入らつしやるのだから、まるで分らないのですもの。そして長い夜が来る。長い晝が来る。その晝が何時間もあるでせう。その間わたくしはあなたの事をまるで知らずにゐるでせう。わたくしはそれが悲しくて。

フリッツ。なぜそんなに悲しがるのだらう。
クリスチエネ。それはあなたが戀しくて、どうもあなたがこのキインに入らつしやらないやうな、どこか餘所に入らつしやるやうな心持がするのですもの。まるであなたと云ふものが消えておしまひになつて遠い遠い所へ行つておしまひになつたやうですもの。

フリッツ。(少しじれつたがる。) まあ大變だなあ。
クリスチエネ。だつて本當ですわ。

フリッツ。まあ。こつちへお出よ。(クリスチエネ側へ寄る) 兎に角お前さんだつて、わたしと同じやうに、たしかに分かつてゐるのは、たつた今、この瞬間に二人が可哀く思ひ合つてゐると云ふ事だけなのだ。(クリスチエネ何か云はうな事は言はないものだ。(獨語のやうに。)) 一體瞬間にだつてどうかすると永遠の影のさしてゐる事があるかも知れない。それが我々の理解する全體だ。我々の眞の所有だ。

フリッツ。(フリッツ女に接吻す。間。フリッツ立ち上がる。進り

出る如き語風にて。)

ああ。お前さんの部屋は實に好い所だ。實に好い。(窓に立ち寄る。) こんなに澤山の人家の間にある。それで遠く世界を離れてゐるやうな感じがする。なんとも云へない寂寥の感じがする。まるでわたしはお前さんと二人切で世界にゐるやうだ。(小聲にて。) 只二人で、誰の迫害をも受けずに。

クリスチエネ。只今のやうに仰やつて下さると、なんだか。フリッツ。お前さんはどう思ふのだ。

クリスチエネ。なんだかわたくしの夢のやうに思つてゐる願が叶つて、あなたが本當にわたくしを可哀く思つて下さるやうですわ。あの、あなたが始めてわたくしにキスをして下さつた時のこと、あの時の事をまだ覚えて入らつしやつて。

フリッツ。(感動して) 覚えてゐるとも。わたしは實際お前さんを愛してゐるのだ。(クリスチエネを抱き、放し。) 併しもう行かなくては。

クリスチエネ。あら。今のやうな事を仰やると、直ぐに跡で後悔して入らつしやるのでせう。わたくしあなたにいつまでも附纏つて、お邪魔をしようとは思ひませんわ。あなたの方で厭になつたら、いつ乗ておしまひなすつても好うございますの。あなたはわたくしにお約束なんぞをなすつ

た事はございませんし、わたくしも末をどうして戴かると願つた事はございませんですから。跡でわたくしがどうなりませうと、そんな事はどうでも好うございませう。兎に角あなたとかうしてゐる間だけ、わたくしは爲合せでしたから。それより外の願はわたくしにはございませぬ。ですがどうぞこれだけの事はお分りになつて下さいまし。わたくしはあなたより外に大切に思つた方はこれまで一人もございませぬ。これからも決してございませぬでせう。ですからいつでもお厭になりましたら。

フリッツ。(獨語のやうに。)ああ。そんな事を言ふものぢやない。あんまり美しくて。

(戸を叩く音。フリッツぎくりとす。)

テオドルぢやないか知ら。
クリスチエネ。(驚く。)あの方があなたのこちらへ入らつしやつたのを御存じでせうか。

(テオドル登場)

テオドル。今晚は。出し抜けに飛び込んで来たのだから亂暴な奴だと思ふでせうね。

クリスチエネ。あなた何か大事なお話があつてフリッツさんを尋ねていらつしやつたのでせう。

テオドル。さうです。随分方々を捜しましたよ。

フリッツ。(小聲にて。)なぜ君下で待つてゐてくれないの

だ。

クリスチエネ。何か内證の話がおりなされるのね。
テオドル。(わざと聲高く。)なぜ僕が下で待つてゐなかつたと云ふのかい。それは君がたしかに上にあるのだと知つてゐたら待つてゐたかも知れないよ。ゐるのだからゐないのか分りもしないのに下で二時間もぶら／＼してゐられるものか。

フリッツ。(側へ聞かすやうに。)そんなら君あした僕と一しよに旅行するのだね。

テオドル。(調子を合す。)さうだ。

フリッツ。さうなくてはならないね。

テオドル。兎に角僕は騙けて来たので、苦しくてならない。ちよつと御免を蒙つて一分間程掛けさせて貰はうかな。

クリスチエネ。どうぞ御遠慮なく。

(窓の所に行き何事かなしてゐる。)

フリッツ。(小聲にて。)何事があつたのか。あの女の事を何か聞き込みはしないかい。

テオドル。(小聲にてフリッツに。)いや。なに僕は只君の迎へに来たのだ。君のやうに輕はずみでは困るぢやないか。

なんだつてこんな所へ来て神経を興奮させるのだ。今時分はもう床に這入つて寝てゐなくちやあ行けないのだ。すつかり體を休めてゐなくちやあ。

(クリスチエネ再び二人の側へ来る。)

フリッツ。どうだい君。好い部屋ぢやないか。

テオドル。好いなあ。(クリスチエネに。)あなた朝から晩までこゝに居るのですか。居心の好ささうな所ですね。併し僕の趣味から云へば少し梯子が高過ぎますね。

フリッツ。僕は又この高い所から見晴すのが好いと思ふ。

テオドル。そこでクリスチエネさんにはお氣の毒ですが。僕はフリッツ君を連れて行かなくてはなりません。あしたは二人とも早く起きなくてはならないのですから。

クリスチエネ。そんなら本當にあすお立なされるの。

テオドル。なに、直きに歸つて來ますよ。

クリスチエネ。お手紙を下さるでせうね。

テオドル。だつてあすの内に歸つて來れば、手紙にも及ばないでせう。

クリスチエネ。いゝえ。どうもちよいとはお歸りなさらないやうに思はれますわ。

(フリッツぎくりとす。テオドルそれに氣附く。)

テオドル。そんなに手紙がほしいのですか。僕はそんなにセンチメンタルな方だとは思ひませんでした。さうだつた。きのふからは丁寧な詞は廢す筈だつた。そんなら少し長く別れてゐる積りで、そこでお別のキスでもするが好い。己はゐない積りで。

(フリッツとクリスチエネと接吻す。テオドル隠しより煙草入を出し紙巻を一本口に銜へ、又手を隠しに入れマツチを捜す。マツチなし。)

クリスチエネさん。マツチはありませんか。

クリスチエネ。えゝ。あまにありませんわ。

(單筒の上のマツチ立を指さす。)

テオドル。やあ。これにはもう一本もありませんよ。

クリスチエネ。そんなら出して參りませう。

(隣室に急ぎ入る。フリッツ跡を見送り。テオドルに。)

フリッツ。實にこんな場合には人間はどれだけ誠を御くか知れないものだなあ。

テオドル。どんな場合だと云ふのだい。

フリッツ。どうもなんだかこゝに僕の一生の幸福がありさうに思はれて來た。あんな可哀らしい。(詞を切る。)あゝ。併し何もかも偽りだ。

テオドル。馬鹿な。跡になつて見給へ。君は自分で自分を笑ふ時が來るのだ。

フリッツ。そんな時はもう來ないよ。

クリスチエネ。(マツチを持ちて登場。)さあ、こゝにありませんわ。

テオドル。有難う。そんならさ様なら。(フリッツに。)おい。どうしたのだい。

(フリッツ室内を見まはす。今一度この場の様子を見て、記憶し置かんとするもの、如し。)

フリッツ。どうもなんだかこの部屋に別れるのが。

クリスチエネ。あら好い加減な事を。
テオドル。(聲を聞まし。さあ、行くのだ行くのだ。クリスチエネさん。お休みなさい。)

フリッツ。そんならまた。
クリスチエネ。また入らつしやいな。

(テオドルとフリッツ退場。クリスチエネ胸迫りたる様子にて跡に残り、さて二人の開け放し置きて出でし戸口に行き、中音にて。)

フリッツさん。

フリッツ。(再び立戻り、クリスチエネを抱き合ふ。) そんならこれで。(幕。)

第三幕

(前と同じ部屋。正午頃。クリスチエネ一人窓の下に坐し壁物をなしてゐる。暫くして壁物を下に置く。カマリナの娘リナ、九歳登場)

リナ。クリスチエネさん今日は。

クリスチエネ。(心こゝにあらざる如く。) 好く来ましたね。何か用事なの。

リナ。あのお芝居の切符が戴けるなら戴いて来いとお母さんがさう云つたの。

クリスチエネ。だつてお前内のお父様がまだお歸りなされないのだから。リナさん待つてゐて。

リナ。いけないわ。そんなら御飯をたべてから又来てよ。クリスチエネ。そんならさうおし。

リナ。(行き掛り振り向く。) ああ、それからお母さんがさう云つたつけ。クリスチエネさんに宜しくつて。それからまだ頭痛がしますかつて。

クリスチエネ。有難う。もう直つてよ。
リナ。さやうなら。

クリスチエネ。さやうなら。

(リナ入り違へにミイチイ登場。)

リナ。(戸口にて。) ミイチイさん。今日は。

ミイチイ。おやおや。ちびが。

(リナ退場。ミイチイの來たるを見て、クリスチエネ起ちて出で迎ふ。)

クリスチエネ。お二人がお歸りになつたの。

ミイチイ。どうしてわたしにそんな事が分かると思つてゐるの。

クリスチエネ。ではお手紙は來ないの。なんにも分らないの。

ミイチイ。何が分かるものかね。

クリスチエネ。お前さんにもなんにも言つて來なくつて。

ミイチイ。わたしとあの人の間になんの手紙で言つて遣つたり言つてよこしたりする事があるものかね。

クリスチエネ。もうお立ちになつたのはをとつひだわね。

ミイチイ。さうよ。そんなに久しい事ではないわ。これんばかりの事がどうしたと云ふのだらう。ほんとに氣の知れない人だ事。まあ、その顔はどうしたの。まるで目を泣き腫らしてゐるぢやないか。お父さんが歸つて見ると、どうかしてゐるのが分つてしまふわ。

クリスチエネ。(さつぱりさ。) お父様はみんな知つてゐなすつてよ。

ミイチイ。(殆ど驚き呆れたる様子。) おや。どうしたと云ふの。

クリスチエネ。わたしみんな話してしまつたの。

ミイチイ。ぢやあお前さん。又恐ろしく氣の利いた事をしたのね。まあ、爲方がないわ。どうせ何もかも顔に出してゐる人なのだから。そんなら向うが誰だと云ふ事まで言つてしまつたの。

クリスチエネ。さう言つてよ。

ミイチイ。おこられたの。

(クリスチエネ首を振る。)

そんならなんと云つたの。

クリスチエネ。なんとも云はずに、いつものやうにそつと出て行つておしまひなすつてよ。

ミイチイ。それにしてもやつぱりそんな話をしたのは馬鹿だわ。今に分かつてよ。お父さんがなぜなんとも云はなかつたか分かつてゐて。きつとフリッツさんが結婚を申込むのだと思つて、なんとも云はなかつたのだわ。

クリスチエネ。なぜお前さんそんな事を言ふの。

ミイチイ。わたしどう思つてゐるか分かつて。

クリスチエネ。分らないわ。どう思つてゐて。

ミイチイ。わたしあの人達が旅行するのなんのと云つたのは嘘だと思ふわ。

クリスチエネ。まあ。

ミイチイ。どうかするとどこへも行つたのではないわ。

クリスチエネ。いゝえ。どこかへ入らつしやつた事はたしかなのよ。わたし知つてゐるの。實はゆうべフリッツさんの家まで行つて見たら窓に葎が下りてゐたわ。あそこには入らつしやらないわ。

ミイチイ。それはさうかも知れなくつてよ。どこかへ行つた事は行つたかも知れないわ。それにしてももう歸つては來ないのね。兎に角わたし達の所へ歸つては來ないのね。

クリスチエネ。(心配らしく。) まあ。

ミイチイ。だつてそれはあり内の事だわ。
 クリスチイネ。まあ。好くお前さんそんな事が平気で言つて
 ゐられるのね。
 ミイチイ。だつてけふさうなつてもあしたなつても、半年先
 になつても詰まり同じ事だわ。
 クリスチイネ。お前さんそんな事を言つたつて、それは分か
 らないのだから。あのフリッツさんと云ふ方を、お前さん好
 く知らないのだから。あの方はお前さんの思つてゐるやう
 な方ではないわ。こなひだこの部屋にお出なすつた時、わ
 たしにはそれが分かつたの。あの方は何かに冷淡なやうな
 風にして入らつしやつても、本當はわたしの事を思つてゐ
 て下さるに違ひないの。(ミイチイが何か答へんとするそ
 の詞を察したる如く。)え、え、それはどうせ末永く思つ
 て下さると云ふわけには行かないわ。だけれどそんなに直
 ぐよしてはおしまひなさいわ。
 ミイチイ。さうさね。それはわたしはフリッツさんをそんな
 に好くも知らなくつてよ。
 クリスチイネ。わたしきつと歸つて入らつしやると思ふわ。
 テオドルさんだつてさうだわ。
 (ミイチイ歸ることも歸らざることも勝手にするが好しと云
 ふ表情をなす。)
 あの、それからわたしお前さんに是非頼まなくてはならな

い事があつてよ。
 ミイチイ。まあ、そんなにのほせたやうになつてゐては困る
 わ。その頼むと云ふのはどんな事なの。
 クリスチイネ。あの、お前さん後生だからテオドルさんの内
 まで行つて見て頂戴な。お内はあんなに近いのだから、お
 前さんつい通り掛つたやうな風をして、あの方が入らしや
 るかどうか見て頂戴な。もし入らつしやらなかつたら、あ
 の内の人にいつお歸になるか聞いて見て頂戴な。
 ミイチイ。厭だわ。わたし男の跡を追つ掛け廻るやうな眞似
 はしたくないわ。
 クリスチイネ。だつてテオドルさんに分らないやうにだつ
 て出来るわ。お内まで行かなくつたつて、途中で出つくは
 すやうにも出来るわ。今丁度一時でせう。いつもあの方が
 食事に入らつしやる頃だわ。
 ミイチイ。だつてお前さん可笑いぢやないか。そんなに思ふ
 なら自分でフリッツさんの内の前まで行つて見るが好い
 わ。
 クリスチイネ。だつてわたしにはそれが出来ないのだから。
 それにあの方はそんな事をするのが大嫌ひだわ。それから
 わたしどうもあの方はまだ歸つて入らつしやらないやうに
 思ふの。そしてテオドルさんが歸つてゐて、フリッツさん
 の歸る時を知つてゐなざるやうに思ふの。ねえ。ミイチイ

さん。後生だから見て来て頂戴よ。
 ミイチイ。ほんとにどうかすると赤ん坊のやうな事を言つて
 困らせる人だね。
 クリスチイネ。どうぞ後生だから見て来て頂戴よ。造作もな
 い事ぢやないか。
 ミイチイ。まあ、お前さんがそんなに言ふ事だから、わたし
 爲方がないから、行つて見るわ。だがどうも役に立ちさう
 な氣はしないのね。どうせみんなまだ歸つてゐないのだ
 わ。
 クリスチイネ。あの分かつたら直ぐ来て頂戴よ。好くつて。
 ミイチイ。それは来てよ。お母さんが御飯を食べずに少し待
 つてゐてさへくれ、ば好いのだから。
 クリスチイネ。有難よ。お前さんやつぱり好い人だわね。
 ミイチイ。知れた事だわ。行つて来るまでおとなしくして待
 つてゐるのだよ。分かつて。そんなら行つて来てよ。
 クリスチイネ。有難よ。
 (ミイチイ退場。クリスチイネ暫一人になり部屋を片付
 け、雜物を疊みなどす。それより窓に行き外を見る。暫
 くしてワイリング登場。クリスチイネはそれに氣付か
 ず。ワイリングは強く興奮しゐる様子にて窓に立ちたる
 娘を、心配氣に目守りゐる。)
 ワイリング。(獨言)まだなんにも知らないのだ。

(ワイリング戸口に立ち留まり、室内へ進み入りかぬる様
 子。クリスチイネ振り返り、父を認め、驚く。父わざと
 らしく微笑み、室内に進み入る。)
 クリスチイネや。
 (この詞を娘を呼び寄する如き調子にて言ふ。クリスチイ
 ネ父の前に跪き取り纏らんとする如き様子にて父の方へ
 近寄る。ワイリング遮り留む。)
 そこでお前どう思つてゐるのだい。
 (決心して。)
 まあ爲方がないからお互に諦めるのだなあ。
 (クリスチイネ顔を上げ。)
 お互にといふのは、己も諦めるから、お前も諦めなくては
 ならないと云ふのだよ。
 クリスチイネ。お父うさん。あなたわたくしのけささう云つ
 た事がお分りにならなかつたのではないでせうか。
 ワイリング。さうぢやないよ。兎に角己がどう思つてゐると
 いふ事をお前に言つて聞かせたつて好いぢやないか。好い
 子だから己の言ふ事を聞いてくれ。
 クリスチイネ。分らないわ。お父うさんはどう思ふと仰や
 るの。
 ワイリング。まあ、こつちへ来い。そこで落ち着いて己の言
 ふ事を聞くのだよ。けさお前の話して聞かせたときも、お

れはちつとして聞いてやつたのだからお前もおとなしくして聞くのだよ。兎に角お互に。

クリステイネ。お父うさん。そんな風に仰やつては厭。お父うさんがけさ聞いた事を考へて御覧になつた上で、どうしてもわたくしの事が悪くつて、勘忍が出来ないとお思ひなさるのなら、ついわたくしを逐ひ出して下されば好うございませぬ。何もそんな事を仰やつて。

ワイリンド。まあ、落ち着いて聞いてみるのだよ。聞いてしまつた上でどうにでもしようと思へばなるぢやないか。お前はまたこんなに年が若いのだからな。一體(ためらひつ

ばない。まあ。人生と云ふものがどんな美しいものか考へて見るが好い。お前の前途にはまだ若い時代がたつぷりある。いろ／＼の幸福がある。面白い事嬉しい事がどの位あるか知れない。己なんぞを見る。もうこの世にこれと云ふ當は無い。それでも己は人生の美しさを知つてゐる。まだ己も嬉しいと思ふ事に出逢ふ事が幾らもありさうだ。これでもまだお前と一しよに暮す月日もあらう。その生活をどんなにも面白くする事が出来よう。お前と己とで面白くするのだな。又時候も好くなるから、お前は歌の稽古を始めるが好い。それから休暇になつたら二人でどこか郊外へ行く。朝早く行つて晩までゐるのだな。澤山面白い事がある。兎に角最初の幸福が破壊せられてしまつたと云つて、何もかも投げ棄てるには及ばない。それもこつちばかり幸福だと思つたものが破壊せられたのなら、猶更だからな。

クリステイネ。(心配らしく)なぜ幸福が破壊せられたと仰やるの。

ワイリンド。一體あれが本當の幸福だつたとお思ひかい。それにお前はけさになつてやつと己に話したつげが己がそれまで気が付かずにあつたと思ふのかい。己はもう疾づくに知つてゐた。だからお前が己にいつ打ち明けようと思ふのさへ、己には好く分かつてゐた。なに、あれはお前の幸福で

はなかつたのだ。これまでだつてさうだ。己はお前の目附を見てゐる。本當の幸福が来たのなら、その目にいつも涙が出てゐた筈がない。それからその頬つべたが、そんなに蒼くなつてしまふ筈がない。そんなになつたのはお前の夫にする程の値打のない人をお前が思つてゐたからだ。

クリステイネ。まあ、どうしてそんな事を仰やるの。お父うさん、何か御承知なのね。何か聞いてお歸りなすつたのね。

ワイリンド。なに、なんにも聞いて来たのぢやない。だがお前が自分でどんな人だといふ事を話して聞かせたぢやないか。そんな年の行かない男に何が分かるものか。どんな幸福が手に入つたか先方では夢にも知らずにゐたのだ。眞人間と謎の人間とがその男には分からないのだ。お前の心からの愛情も分からないのだ。お前はそれが分かつてゐたと思ふのかい。

クリステイネ。(次第に心配らしく)あら、お父うさんはあの方に、お父うさんはあの方の所へ入らつしやつたのね。ワイリンド。なにを言つてゐるのだい。その人は旅行したと云ふのぢやないか。だがな、これでも己は馬鹿ではない。これでも己は目明の積りだ。なあ、好い子だから忘れておしまひ。お前の幸福はそんな所にはなかつたのだ。どこかまるで方角の違つた所にあるのだ。なに、お前程の立派な

娘が幸福を得ずにしまふと云ふ事があるものか。お前がどんな女だと云ふ事は好く呑み込んでくれる男がどこかにゐない筈がない。

(クリステイネ單筒の前に駆け寄り帽子を取り出さんさす。)

どうするのだ。

クリステイネ。放して下さい。行かなくつては。

ワイリンド。どこへ行くのだ。

クリステイネ。あの方の所へ。

ワイリンド。どうしたと云ふのだい。

クリステイネ。あなた何か隠して入らつしやるのだから。放して。

ワイリンド。(娘を抱き止む)こりや。しつかりしろ。あの男は内にゐないのだ。事によつたら旅行先から當分歸つて来ないかも知れないのだ。まあ、落ち着いてこゝにゐろ。あそこへ行つてなんになるものか。行きたくや、あすの朝でも今夜でも、己が一しよに連れて行く。兎に角、そんな風をしてそれで表へ出られるものか。どんな風をしてゐるかお前は分かつてゐないのだらう。

クリステイネ。そんならお父うさん、一しよに行つて下さいませぬか。

ワイリンド。きつと一しよに行つて遣る。まあ、今だけは氣

を落ち着けてくれなくては困る。なんでもない事になんといふ騒ぎをするのだ。お前の様子をはたで見ると、場合が場合でない事なら笑つて遣つても好い位だぜ。まあ、親の手許に落ち着いてゐると云ふのだから、そんなに逃げ支度をしなくても好いぢやないか。

クリスチエネ。あの、お父さん、あなたの聞いて入らつしやつた事を早くわたくしに言つて聞かせて下さいまし。

ワイリング。(次第に不安になる) なにを己が聞いてくるものか。己は別に何も考へてゐやしない。只お前が可哀い。

お前が己のたつた一人の子だ。お前が己の傍にゐてくれなくつてはならん。お前がこれまでも己の傍を離れずゐてくれればよかつたと思ふだけだ。

クリスチエネ。仰やらないなら、どうぞ放して。

(クリスチエネ父の手を振り放し、戸口の戸を開く。その時戸口にミイチイ現る。クリスチエネはミイチイに衝き當りさうにするゆゑ、ミイチイ軽き叫聲を發す。)

ミイチイ。どうしたと云ふのだよ。わたしびつくりしてしまつたわ。

(クリスチエネ跡へ引く。その時ミイチイの背後よりテオドルの入り來たるを認む。テオドル戸口に立ち留まる。黒の服を着てゐる。)

クリスチエネ。おや。どうして。

あなたが言ひ當てましたのですから。

クリスチエネ。いゝえ。わたくしにはまだなんにも分かつてはをりません。何事があつたのか分かりません。あなたはわたくしをいたはつて委しい事をお話にならないのでせう。一體どうしてこんな事になつたのです。テオドルさん。

(父に)

そんならお父様言つて聞かせて下さいまし。

(ミイチイに)

ミイチイさん。お前さんも知つてゐるでせう。

テオドル。實は意外の出来事です。

クリスチエネ。どうなさいましたの。

テオドル。弾に中つて死んだのです。

クリスチエネ。あの、弾に中つてとは。

テオドル。決闘して撃たれたのです。

クリスチエネ。(叫ぶ) おゝ。

(クリスチエネ倒れんぞす。ワイリング支へ留め、テオドルにこの場を外せと合圖す。クリスチエネそれに心付きテオドルの臂を取る。)

どうぞお歸りなさらないうで、わたくしは何もかも言つて聞かせて戴きたいのですから、もうからなれば何一つわたくしに隠してお置きなされるわけには参りません。

(誰も答ふるものなし。クリスチエネはテオドルの顔を見んぞす。テオドルはクリスチエネの目を避けんぞす。)

フリッツさんはどこに入らつしやいますの。

(心配に堪へざる様子。誰も答ふるものなし。誰の顔にも答に窮したる如き悲しげなる表情あり。)

どこに入らつしやいますの。

(テオドルに。)

あなたどうぞさう云つて聞かせて下さいまし。

(テオドル答へんぞして躊躇す。クリスチエネ目を見開きてテオドルの顔を見、次にあたりの人々の表情を理解し、次第に事の真相を悟る表情ありて、忽ち恐ろしき叫聲を發す。)

それではフリッツさんは。

(テオドル頷く。クリスチエネ額を叩へ、何故にかくなりしか解しかぬる様子にてテオドルに進み近づき、テオドルの臂を握り、物狂ほしげに。)

フリッツさんはお亡くなりなすつたのですね。

(この詞を誰に問ふさもなく獨言の如く言ふ。)

ワイリング。クリスチエネや。

クリスチエネ。(父を遮り留め、テオドルに。) どうぞなんとか返事をなすつて下さいまし。

テオドル。そこでこの上どんな事を話せば好いのですか。クリスチエネ。なぜ決闘をなすつたのですか。

テオドル。さうです。理由はよく知らないのですが。

クリスチエネ。相手は誰です。フリッツさんを殺したのは誰です。よもやそれも御存じないと仰やいますまいね。さあどうぞそれを。

テオドル。いや。要するにあなたなんぞの知らない人です。

クリスチエネ。知らなくつてもよろこびます。誰だかさう云つて下さいまし。

ミイチイ。およしよ。

クリスチエネ。(ミイチイに。) そんならお前さん言つて聞かせて下さい。

(父に。)

そんならお父様、さう云つて下さいまし。

(誰も答ふるものなし。クリスチエネ駆け出さんぞす。ワイリング引留む。)

いゝえ。わたくしはどうかにかいたしてフリッツさんを誰が殺したのか。どう云ふわけで殺したのか聞かなくてはなりません。

テオドル。なに。實は詰まらない理由なのです。

クリスチエネ。そんな事を。あなたは何か隠して入らつしやいますのですね。なぜ、なぜあなたは。

テオドル。まあ、さう云つたつて、困りますなあ。

(クリスチイネはテオドルの詞を連り留めんとする如くテオドルの前に進み寄り、何事も言はず、テオドルの顔を見て、さて突然叫ぶ。)

クリスチイネ。女の事でございませぬ。

テオドル。いや。

クリスチイネ。さうです。きつとさうです。女の事に違ひありません。

(ミイチイの方に向く。)

あの奥さんの事で決闘をなすつたのね。あのフリッツさんが愛してゐなすつた餘所の奥さんの事で決闘をなすつたのね。して見るとフリッツさんを殺したのはあの奥さんの御亭主なのね。ああ、さうして見ると一體わたしはどうしたと云ふのだらう。フリッツさんの方から見れば、わたしはなになのだらう。

(テオドルに。)

テオドルさん、なんにもあの方がわたくしに残して置いては下さらなかつたのですか。なんにも書いてお置きになつた物はなかつたのですか。なんにも言傳はなかつたのですか。お亡くなりになつた跡にわたくしに宛てた手紙も紙切れもなかつたのですか。

(テオドル首を振る。)

事をお思ひ出しになつて、その一々の物に別れをお惜しみなすつたのでせう。それをあなたにお話しなすつて、その中でわたくしの事も仰やつたのでせうね。

テオドル。(感動して。) いや、あの男もあなたを可哀く思つてゐたに違ひないのです。

クリスチイネ。さうでございませうか。可哀く思つて下さいましたでせうか。まあ、詰まりお慰みになつたのですね。そして外の女の爲にお命をお棄てなすつたのですね。それにわたくしはどうでせう。わたくしはあの方を神様のやうに思つてみました。それがあの方にはお分りにならなかつたのでせうか。わたくしはあの方に捧げられる限りの物を捧げてみました。わたくしはあの方の爲めにならいつでも死なうと思つてみました。わたくしの爲めには、あの方の外には神様も天國もないのです。それがあの方にはお分りにならなかつたのでせうか。あの方は笑顔をしてわたくしに別れてこの部屋を出てお出になりました。そして外の女の爲めに御自分を撃ち殺させておしまひなさいましたのです。お父う様。ああ。お父う様。なんと云ふ事でございませう。

ワイリンド。可哀さうに。(娘の側へ寄る。)

テオドル。(ミイチイに。) おい。お前が少し氣を利かしてくれば己はこんなつらい目に逢はなくても済んだのだぜ。

それにあの晩でございませぬ。あなたはこの部屋へお友達のお迎へに入らつしやつたでせう。あの時もう分かつてゐたのでございませぬ。フリッツさんはもうあれ切りわたくしに逢はないと云ふ事を知つて入らつしやつたのですね。

ああ。あんなにしてわたくしに別れて、外の女の爲めに自分を殺させにお出なすつたのですね。まあ、なんと云ふ事でせう。どう考へてもそんな事があらうとは思はれないのです。テオドルさん、一體わたくしがあの方の事をどう思つてゐるのか、あの方は御承知ではなかつたのでせうか。

テオドル。それは知つてゐたのです。愈々といふ日の朝、僕が一しよに馬車に乗つて約束の場所へ行つた時、途中であ

なたの事も言ひましたよ。
クリスチイネ。わたくしの事を仰やつたのですね。あのわたくしの事も。そしてその外にはどんなお話があつたのでせう。いろ／＼の人の事やいろ／＼の物の事をお話しなすつたのでせうね。その人だの物だのとわたくしとの間には何の差別もないやうに思つて入らつしやつたのでせうか。ああ。わたくしの事も言つて下すつた。御自分のお父う様の事やお母あ様の事や、お友達のお父う様、住まつてお出になつたお部屋の事や、今の時候が春だと云ふ事や、この土地の事や、總てあの方のこれまでの生活に屬してゐた種々の物

(ミイチイ不服らしくテオドルを見る)
随分己はこれで頭を痛めてゐるのだ。この二三日と云ふものは。

クリスチイネ。(忽ち決心したる様子。) あのテオドルさんどうぞわたくしをお連れなすつて下さいまし。わたくしはあの方のお亡くなりになつたお顔を一度も見ずには置かれませぬ。是非一度お顔を見て置きたいのでございませぬ。どうぞわたくしをお連れなすつて。

テオドル。(拒む科にてためらひつゝ。) いや、どうもそれは。

クリスチイネ。なぜ行けないのでございませぬ。その位の事をお断りなさらないでも宜しいではございませぬか。もう一度あの方に逢はせて下すつても宜しいではございませぬか。

テオドル。もう駄目です。

クリスチイネ。あの、駄目とは。お亡くなりになつたお顔が見たいと申すのに、なぜ駄目だと仰やるのでせう。どうも。(分からは様子。)

テオドル。實はけさ埋葬してしまつたのです。

クリスチイネ。(非常に驚きたる表情。) あの埋葬したと仰やいますか。まあ、それまでになつてゐるのにわたくしは夢にも知らなかつたのでございませぬ。人があの方を撃ち殺

して、棺桶の中に入れてどこかへ擔いで行つて地の底へ埋めてしまつたのですね。それにわたくしは一目お顔を見る事も出来ません。それではもうお亡くなりになつてから二日も立つてゐるのですね。なぜあなたはわたくしに知らせに来ては下さらなかつたのです。

テオドル。(甚しく感動す。)いや、實に済みませんでした。併しこの二日の間にどれだけの事があつたかあなたは知らないから爲方がないのです。フリッツの両親に知らせる役も僕が引き受けたのです。それにいろいろな事を考へなくてはならなかつたのです。それに頭も悪くしてゐますし。

クリスチネ。でもあなたが。テオドル。それに葬式もこつそりしてしまつたのです。近親の者と友人だけで。

クリスチネ。あの近親のお方々と。ああ。さうでございませうとも。ほんにあの方の方から見ればわたくしがなんでせう。

マイチイ。それはどうせお前さん行かれはしなかつたのだわ。

クリスチネ。ほんにわたくしがなんでせう。御親類でもなしお友達でもなしあなたなんぞとは違ひますから。

ワイリング。好いよ好いよ。もう諦めて己の方へ来るが好い。(娘を抱き、テオドルに)もう宜しうございませうか

道ぐらゐわたくしにも分かりませう。

ワイリング。それはよせ。

マイチイ。(同時に)それはおよしよ。

クリスチネ。わたくし却つてその方が好うございますの。

どうぞ一人で遣りなすつて。

ワイリング。それはよせ。

マイチイ。およしよ。親類の人でも行つて祈禱でもしてゐると悪いから。

クリスチネ。(目は空を見て、獨言のやうに)わたくしは御祈禱なんぞはしませんわ。

(クリスチネ突然駆け出づ。一同驚きて詞無く動かず

にゐる。)

ワイリング。失禮ですがどうぞ早く追つ掛けてお出なすつて。

(テオドル、續いてマイチイ追ひ掛け行く。)

どうも己はもう行かない。

(戸口の所よりやうやう窓へ行く。)

一體どうする積りで行つたのだらう。

(窓の外に、空を見る。)

どうもあれはもう歸つては來ないのだな。

(聲を立て、泣き、床の上に倒る。暮。)

ら、どうぞお構ひなくお歸りなすつて下さい。娘はわたくしに委せて置きたすつて下さい。

テオドル。いや。實にどうも。(泣聲になる。)こんな事になつてゐるとは僕は夢にも知らなかつたのです。

クリスチネ。まあ、夢にも御存じなかつたのですか。あのわたくしがフリッツさんを愛してゐると云ふ事を。

(ワイリング娘を抱き締む。テオドル空を睨みて立ちゐる。マイチイはクリスチネの側に寄る。クリスチネ父の手を拂ふ。)

この上のお願ひには、せめてわたくしをあの方のお墓へ連れて行つて下さいませう。

ワイリング。いや、それは行けない。

マイチイ。およしよ。

テオドル。さうです。もう少し時が立つたら、あすでも好いのです。兎に角あなたがもう少し落ち着かなくては。

クリスチネ。あの、あしたわたくしが落ち着いてからと仰

やるのです。一日立てば落ち着いて、一月立てば諦めて、半年も立つたなら又世の中を面白可笑しく暮して行くと仰やるのでせうね。(異様に笑ふ。)さういたしたら、戀し

い人の身代りも出來るとお思ひなされるのでせうね。

ワイリング。おい。こら。

クリスチネ。そんなら立つてとは申しませぬ。お墓に行く

耶蘇降誕祭の買入 (シユニツツレル)

人物

アナトオル。ガブリエエレ。

時

クリスマスの夕。午後六時。雪ちら／＼ふる。

場所

キインの町。

男。奥さん。奥さん。

女。え。おやおや、あなたですか。

男。さ様です。先刻からあなたを追つかけてゐるのです。

(問。)あなたがその荷物を持つてお歩きになるのを、餘所目に見てゐる事はわたくしには出来ません。(問。)どうぞその包んだ物をわたくしに持たせてくださいまし。
女。いゝえ。どういたしまして。それには及びません。(問)

わたくしは此位なものを持つて歩くのは平氣です。

男。偶々わたくしが氣のきいたまねをいたさうと思ふのですから、そんなにむづかしく仰やらないで、私を氣のきいた男にしてくださいませぬか。

女。はいはい。そんならこれでも一つお願ひ申しませう。

男。何です。これんばかり。これでは持つたも持たないも同じことではございませぬか。そちらの方もくださいまし。

それも、それも。

女。もう好いでせう。あなたは無暗に御親切な方ですねえ。

男。奥さんのやうな方に親切ができれば、われわれほどの位愉快だか知れませぬ。

女。さうでございませうよ。何でもあなたの御親切と云ふのは、往來でばかりお見えなさるのでせう。(問。)そして雪の降る時に限つて。

男。えゝ。そして日が暮れてみて。(問。)偶々クリスマスの晩でと云ふやうなわけでせうかね。

女。何にいたせ、あなたにお目にかゝるのはひどく珍らしい

のですから。

男。これは恐入りました。あんまりお宅へ御無沙汰をいたしたもんですから、さうおつしやつてもいたしかたがございませぬ。

女。まあお察しの好い事。わたくしもそんな風な事を思つて申上げたのです。

男。奥さん。この頃は私は何方へもあがらないのですからいたしかたがございませぬ。御主人は御健康でいらつしやいますか。おちひさいのはみんな御無事ですか。

女。そんな事はお尋ねなさらぬ方が好いでせう。(問。)やどが健康でも病氣でも、うちの子供がどういたしても、實は何とも思つてはいらつしやらないのでせうから。

男。あなたのやうに人の腹の底迄看透すと云ふやうな方に會つてはたまりませぬ。何だか氣味がわるいやうですね。

女。だれの心でもわかると云ふのはございませぬが、あなたの心はわたくしちやんとわかつてゐますわ。

男。ところが私の方でわかつておもらひ申したい程はおわかりになつてゐないので。

女。餘計なことを云ふのはおよしなさい。およしなさらぬと。

男。奥さん。それは私にはよされませぬね。
女。そんならその包を返して下さいませ。

男。慥るのではありませんよ。(問。)慥るのではありませんよ。(問。)もうあんなことは申しませぬから。

(兩人はしばらく無言にて並び行く。)

女。何かちつとは仰やつてもよろこびますわ。

男。さあ。何を云つたら好いでせう。(問。)何分貴方の御批評がきびしいのだから。

女。そんなら何か話しておきかせなさいな。餘程久しくお目にかゝらないのですから、お聞かせなすつてよろしい事がございませう。(問。)一體この頃は何をしていますのやうのです。

男。いつもの通り何もいたさずにゐるのです。

女。なんにもあそばさないのでですか。

男。それではあなたの爲に惜むべきことだといふものですね。

女。併し貴女の爲にはどうでも好いのでせう。平氣なのでせう。

男。わたくしがそんなに冷淡だとあなたに思はれる理由があるのせうか。

女。全體何故わたくしはこんな意情者になつてゐるのでせう。(問。)誰のせいだせう。
男。其の包を返して下さいよ。

男。私は貴方のせいだといつたのではございませんよ。(問) 唯誰のせいだらうと虚空にむいて云つたのでさあ。
女。あなたは毎日こんな風に散歩をしていらつしやるのですか。

男。こんな風に散歩をするかなんて。散歩といふものが恐ろしく馬鹿げたものゝやうにおつしやいますね。何か人のする事に散歩より好い事があるのでせうか。(問) 實に散歩といふ言葉は好い言葉です。何か目的もなんにもない様な意味に聞えて愉快な言葉です。(問) 併し今日のところではこの言葉は私のいたしてゐることにははまりませんね。何故といふのに私も頗る働いてゐるのです。(問) 丁度奥さんと同じやうに。

女。どうしてですか。

男。私もクリスマススの買入れにでかけたのです。

女。まあ、あなたが。

男。ところが何を買つて好いかわからないのです。(問) 町中歩いて硝子の中に物の飾つてある店があると一軒一軒立止つて見るのが、もう何週間だか知れないのです。(問) 私の見るところでは、商人といふ者は趣味もなんにもわからないもので、又なんにも新しい物を發明する事ができないのです。
女。發明なんといふことは買方の方でいたさなければならぬ

男。はてな、そいつは困りますね。

女。御婦人でせう。

男。成程。貴方が人の腹の底迄おみすかしになる方だといふことは先刻申しあげた筈ですね。

女。ところで、どんな御婦人でせう。(問) ほんたうの貴婦人ですか。

男。さあ。さうなつてくると貴婦人といふものゝ概念から論ぜねばならぬといふ始末になります。若し貴婦人といふのは上流社會の婦人だと御解釋になると、この場合にはあたりませんなあ。

女。それでは中流社會ですか。下等社會ですか。

男。よろしい。先づ下等社會だといつて置きましょう。

女。わたくしもそんなことかと存じてゐました。

男。皮肉をおつしやりつこなしです。

女。大抵どんな女と御交際になるといふことは察しがつきますわ。(問) さうですね。瘠ぎすで、頭の毛はブロンドなのでせう。

男。ブロンドです。

女。それ御覽なさい。いつでもあなたはそんな風ななごに御關係なさるでせう。(問) いつでもですわ。

男。奥さん。それは私のせいではございませんよ。

女。又そんなことを。(問) 併しいつも流儀をお換なさらな

いのです。あなたなんぞのやうに用のない人は、御自分で考へて御覽なすつて何か發明なすつたら好いでせう。(問) 秋頃から注文してお置になれば間違なしに出來てゐるのでせうに。

男。それは私のがらにないことなのです。(問) 秋頃からクリスマスにやる物を考へようと云ふには、今年のクリスマスに誰に物をやるのだといふことが極まつてゐなくてはならないのでせう。(問) ところが、それが私には知れないのです。そしてもうクリスマスの木に明りをつける迄に二時間しきやなくなつたのです。そして何を買つてよろしいか、てんであたりがつかないのです。

女。それではわたくしが智慧をかしておあげ申しませうか。

男。奥さん。實に貴方は私の爲には天使のやうな方です。

併しこの包は取戻すのではありませんよ。

女。え、え、え。持たせてあげますとも。

男。しめた。私の爲に天使だといふことは申しあげてもよろしいのですね。これは難有い。天使だ。天使だ。

女。よして下さいよ。

男。はいはい。もう決して申しません。

女。さて、智慧をおかし申すとなると、あなたの物をおやりになるさきか、どう云ふところだか見當がつかなくつては駄目ですね。

いのは結構かと存じます。(問) あなたが屹度通戰運勝をなさる戰場を去つておしまひなさるは不利益でせうから。

男。どうもいたしかたがございません。(問) 私を可哀がつてくれる者はあの社會にしきやないのですから。

女。へえ。あなたをお可哀がり申します。(問) そしてあなたのお心がわかつての上でせうか。

男。とんでもないことです。(問) 併し私は上流社會の方には心を知つていただくだけです。可哀がつてもらふには下等社會にでも出かかなくちやあ爲様がないのです。奥さんの御存じの通り。

女。そんなことを何でわたくしが存じてゐるもんですか。また、そんなことを承知致したくもございません。(問) まあいらつしやい。丁度此店あたりがよろしいでせう。何か此店でああなたの一件に好いやうなものを見立てて上げませうよ。

男。どうも相すみませんやうなわけ。

女。どう致しまして。まあ御覽なさい。此匂の變つた香水の三種入れてあるのなんぞはどうぞでせう。それとも此シヤボンを六つ入れたのがよろしいかも知れませんか。パチュリイにシツブルにジョッキイクラブなんぞがはひつてゐますよ。これなんぞは丁度よささうではございませんか。

男。随分貴方はお人がわるうございませぬ。

女。お待ちなさいよ。これはどうせう。この襟止には賈物のダイヤモンドが六つはひつてゐます。六つですよ。まあ光る事。それとも矢張りあやしい彫刻のついでゐる此腕輪の方が宜しいでせうか。一つは崑崙奴の顔なのです。どうです。これなんぞは奇抜で好いでせう。

男。奥さん。貴方は私を可哀がつてくれる娘がどんな娘だかおわかりになつておいでなさいませぬ。

女。おや。おや。こゝに好い物がある。まあずつと此方へよつて御覧なさいよ。この帽子が好いでせう。二年程前に新形だと云つてひどくもてはやされた帽子なのです。この鳥の羽がしなつてきれいでございませぬか。ヘルナルス邊ではこれを被つたら目にたつて好いのでせう。

男。ヘルナルスには何の縁故もないのです。よし又ヘルナルスだといたしましても、貴方の思召す程趣味が低うはないかも知れませぬ。

女。さうやかましくつては困りますね。ぢやあんなのが好いのですか。少しあなたの方の御注文をおきかせなさらなくつては駄目ですわ。

男。そんな無理なことを仰やつたつていけません。わたくしが何か申したら、貴方は屹度高くとまつていやにお笑なさるんでせう。

すつたのです。それだけ承ればよろしいのです。

男。よろしい。承知しました。(問)併し豫めお断り申しておきますが、くだらない話ですからお聞きになるのが退屈でせうよ。

女。なに。きつと面白いだらうと存じますわ。わたくしも何時かさう云ふ社會の事を聞いてみたいと存じてゐたのでございませぬ。(問)一體まあどんなぐあひな所なのでせう。わたくしには全くわかりませぬのです。

男。それはお話し申したつておわかりにならないでせう。女。何故ですか。

男。つまり貴方なんぞは自分と同等な社會の外の者は一切突つくるめて馬鹿にしきつていらつしやるとみえます。(問)そして私なんぞは其お考を頗る不當だと考へますのです。女。さう仰やつたつてああ云ふ社會の事はわたくしは全く知らないのですからいたしかたがございませぬ。(問)それですから謹んで承らうと申してゐるのではございませぬか。

男。兎に角まあ云つてみると、何か貴方の御享けなさる筈の物をあの社會の者が横取りを致すといふやうなほんやりしたお感じがあるのでせう。そこで隠然敵國のやうになつてゐるのでせう。

女。お氣の毒様ですが、わたくしは何でも自分で持つてゐな

女。どういたしました。わたくしに教へてくだされば好いのですわ。あなたの一件は大人しいのですか。それとも別品がつてゐるのですか。(問)丈の高いのですか低いのですか。(問)はでな色が好きなのですか。

男。私はとんだことをしたかと思ふのです。貴方に願はなければよかつたのはございませぬか。(問)つまりあなたにはひやかしてばかりおいでなさいませぬから。

女。いゝえ。さういふわけではございませぬ。そんなら黙つて聞いてあげますから、さあ話しておきかせください。

男。どうも話しくいのですが。

女。なに、おかまひなさることがございませぬですか。一體何時頃からのお馴染ですか。

男。まあよしませうよ。

女。いゝえ。さう容易くは通しませんよ。(問)いつからお心安くおんなすつたのです。

男。随分前からです。

女。こんな風に問答をしてゐてははてしなございませぬ。わたくしに一々問はせないで、あなたの方で續けて話してくださいませぬ。

男。續けて話さうと申したつて、そんなに話すやうなことはないのです。

女。兎に角どう云ふ場所で何時頃どうして御近附におなりな

いと思ふものを誰にでも横取りなんぞをせられはいたしました。男。ところがたとひ貴方御自分にはもつてゐようと思召さなくつても、それをよその者が取るのはお嫌ひなのでせう。女。おやおや。

男。奥さん。そのお考が本當の女性的なお考なのです。併し女性的なお考である以上は、そのお考は高尚で優美で深遠なお考に違ないでせうよ。女。ま、諷刺のお上手なお方ですこと。何處でさういふ事を御修行なすつたのでせう。

男。この修行ですか。(問)その由来をいつてお聞かせ申しませう。私も初は正直で誰をも信用してゐたものでございませぬ。(問)皮肉なことなんぞはつひぞ申したことはございませぬ。そしてたとひ人に手癖を負せられましてもおつと痛さをこらへてゐたものでございませぬ。

女。そんなにセンチメンタルにおなりなすつては厭です。男。同じ手癖を負ひましても、いやと云はれる筈の時はずきりいやと云はれたのなら、たとひその言葉がどんなに慕はしい唇から出ましたにいたしましても、我慢もできるといふものでございませぬ。(問)併し、目では幾度か事によつたらといふやうな様子を見せた事があり、口元では幾度かさうしてもわるくはないといふやうな微笑を見せたことが

あり、聲の調子では幾度か末にはきつとといふ様な響を聞かせた事があつて、そして最後にいやと申されては。

女。わたくしどもはこいつしよに買物を致す筈でございましてせう。

男。さういふ時のいやといふ一言の爲には、男子は癡^{カマ}狂^{キヤウ}にもなり皮肉家にもなりませんよ。

女。あなたは女のことを話しておきかせなさる筈ではなかつたのでせうか。

男。好うございませう。是非ともお聞きなさいといふわけなら。

女。是非伺ひたいのでございませう。どういふ風におちかづきにおんななさいました。

男。どういふ風と申したつて、大抵人が近附になる場合は知れてゐるではございませうか。往來で出合ふとか、舞踏の場でものをいふとか、電車の中でおちあふとか、傘をもあひにさしますとか。

女。そんなボツシブルな場合をお尋ね申すのではございませう。具體的にどうして御近附におなりなすつたかお聞き申したいのです。買物をいたすのだつて、或る具體的な場合で買ふのでせう。

男。そんなに具體的具體的と仰やるけれど、あんな社會に個性のあるものなんぞはないのです。(問。)いや私の見ると

女。わたくしはその娘に缺けてゐる點を承らうといふのではございませう。

男。併しまあ云つてみると、春の夜のやうな柔かい優しきをもつてゐるのです。昔話にあるやうな障物に捉られてゐる王女のやうな品をもつてゐるのです。戀愛といふものを解する女の心をもつてゐるのです。

女。さういふ心はあの社會にはざらにあるといふではございませうか。

男。申したつてお分りになりませう。貴方なんぞはお嬢さんでいらつしやる時に端^{ハタ}のものがお聞かせ申さねばならぬことをかくしだてをいたして、奥様におなりになるとおかくし申さねばならぬことをお聞かせ申すのですから、貴方は虚心平氣で他の社會のことを御觀察なさることはできなくなつておいでなさるのです。

女。だつてわたくしは先刻からあなたに教へて戴かうと申してゐるのではございませうか。其障物にとられてゐる王女のやうなと仰やるのを、まあほんたうだと信用いたしてあげませう。そこでその王女の住んでゐる不思議な花園のやうすでも話しておきかせなさいませう。

男。勿論立派なお座敷なんぞにはすまつてゐませう。しつとりとした垂絹が懸つてゐるやうな所ではございませう。隅

ころでは貴方方のやうな上流社會にも個性のある婦人なんぞがあらうとは思はれませう。一體女といふものはみんなタイプですからね。

女。だんだん激烈になつてきますね。

男。いゝえ。決して貴方を侮辱なんか致さうといふのではございませう。(問。)私だつてタイプに過ぎないのでせうか。

女。そしてあなたはどんなタイプなのでせう。

男。輕率なる沈鬱家とでもいふのでせうか。

女。そんならわたしなんぞは。

男。貴方ですか。それは非常に簡単に申されますよ。交際家なのでせう。

女。さうですか。そして貴方の一件は。

男。あいつですか。さうさ。たゞの好い娘といふのです。

女。好い娘。好いのですね。そしてわたくしなんぞはたゞの交際家です。

男。たゞの交際家と簡単に申すのがわるければ、お人のわるい交際家でいらつしやるのです。

女。ようございませうから、そんならちつとその好い娘のことを話しておきかせなさいよ。

男。まあ、たいして美人といふ方ではございませう。(問。)様子もよくはございませう。(問。)才氣などもございませ

女。わたくしはそこにないものを伺はうと申すのではございませうよ。

男。よろしい。まあ小さい薄暗い室だと思召せばよろしいのです。ごく小さいのです。壁はペンキで塗つてあるのです。(問。)そしてお負にあかる過ぎるのです。(問。)あち

こちに下等な銅板畫の古けたのに何か字の書いてあるのが消えかゝつてゐるやうなのが懸けてあります。(問。)ランプは天井から吊るしてあつて火屋にはかさがかゝつてゐます。(問。)夕方に窓から見ますと、次第に夕闇に包まれる家の屋根や煙突が見渡されます。(問。)そして春がきますと、むかひの庭に花が咲いて匂が風に送られてはひるので

女。まあ。クリスマスから花の咲く五月のこと迄お考へなさるのですから結構ですわね。

男。えゝ。(問。)あつちの方にゐる時は、ちよつと好い心持の致すこともございませうよ。

女。もう澤山承りました。あまり遅くなりませうから、何か買ふことゝ致しませう。ことによつたらペンキ塗の壁に懸け

の方に美しい御厨子があつたり、種々な裝飾品がならべてあつたり、つやけしの天棚でものが張つてあつたりはいたしません。暮れかゝる午過ぎのあわただしい仄暗さを客に見せるやうな所にあるのではございませう。

ますやうな物でも。

男。いゝえ。其壁には補はねばならないやうな缺點はないのです。

女。それは女の爲にはないでせうよ。併しあなたが行つていらつしやるのですから、あなたの御覽になるやうなものと申すのです。

男。私の見るやうな。

女。その壁の上に波斯あたりの垂絹でも。

男。いやはや。

女。赤み掛かつた線のガラスをはつた丸い吊燈籠なんぞはどうかでございませう。

男。いやはや。

女。新しい花をお活けになる花瓶なんぞも一つ二つあつても好いでせう。

男。まあお待ちなさい。私は女に何か持つて行つてやらうと申した筈でしたが。

女。さうさう。つい考へちがへてしまひました。(間。)早くきめなくつてはいけませんね。(間。)もう、貴方の買つていらつしやるのを待つてゐるでせうね。

男。待つてゐますとも。

女。さうですか。あなたがいらつしやるるとどんな風にお待ちうけをいたして御挨拶をいたしますか。

男。されば、まあ普通の挨拶です。

女。梯子をおあがりになると、あなたのお足音だといふことを聞きわけるでせうね。

男。えゝ。とき／＼さういふことも御座いますよ。

女。そして戸口に立つてゐますか。

男。えゝ。折々立つてゐますよ。

女。そしてあなたの首に両手を掛けて接吻をいたすのでせう。そして何と申しますか。

男。まあ大抵そんな時に申すやうなことを申すので。

女。たとへばどんなことですか。ちよつて云つて御覽なさいよ。

男。どうもちよつと口に出しませんなあ。

女。そんなら昨日は何と申しました。

男。格別なことも申しませんでした。女の聲で云ふのを聞かなくつちやあ、私が繰り返してもばかりしく聞えてしまひさうです。

女。その女の聲なんぞはわたくしが想像で補ひますから言葉だけちよつと云つて御覽なさいよ。

男。「おまへさんが歸つてきて、わたしはほんとに嬉しいわ。」

女。「おまへさんが歸つて。」それから何でしたつねえ。

男。「おまへさんが歸つてきて、わたしはほんとに嬉しいわ。」

女。成程さう聞いてみますと好い言葉ですわ。

男。えゝ。そして心からです。

女。そしてその女は何時も獨りであるのですね。(間。)そしてあなたがいらつしやるると差向ひでたれも邪魔をいたすものなんぞはないのですね。

男。さうです。全くの獨りで両親もないのです。よくある伯母さんなんぞといふものもないのです。

女。そしてその女の爲にはあなたの外になんにもないのですね。

男。かも知れないのです。今晚も。

(暫時無言。)

女。まあ。お話を伺つてゐて遅くなりましたこと。(間。)御覽なさい。往來がだん／＼寂しくなつてきますわ。

男。ほんとにさうです。大變に貴方をおひきとめ申しました。(間。)もうとつくにお歸りなさらなくつてはならなかつたのでせう。

女。さうですとも、さうですとも。さぞわたくしのうちでは待ちかねてゐるでございませう。(間。)ところが例の品はどういたしませう。

男。なにようございませう。(間。)何か私が獨りでみつげませう。

女。あなたお一人ではおみつげあそばすかどうだかあてにはなりません。(間。)それにわたくしもこの女の爲に何か探

してやりたいと、一旦思ひついたものですから。

男。それでは却つて。

女。わたくしはあなたがその土産物をもつて行つて、お遣になる所を側で見てもたうございませう。ほんとにその好い娘と好い娘のある小い部屋とが見たくつてなりませんわ。その娘なんぞはどれだけ幸福なのだか自分では知らずにいるのでございませう。

(男無言。)

女。そんなら持つていただいたその包を頂戴いたしませう。

(間。)あまりおそくなりませうから。

男。ほんにさうです。さあそんならこれを。

女。あれ。彼方から辻馬車がまゐりますでせう。憚りさまですがあの御者をお呼びなすつてくださいますね。

男。急にたいへんお急ぎになりますね。

女。何卒およびなすつて。

(アナトオル馬車をよぶ。)

女。有難うございました。そして例の品はどういたしませうね。

(御者車をよむ。アナトオルミカガリエレは立止まり、アナトオルは夫人の爲に馬車の扉を開かんとす。)

女。お待ちなさいよ。わたくしがその女に遣りたいものがございますから。

男。奥さん。貴方がおやりなさいますと。
女。さあ。どれに致しませう。(間。)え。此花にいたしま
せう。ついこの花をやりませう。別に何と云ふ意味もない
のです。あなたがよろしいやうに仰やつてくださればよい
のでございます。

男。奥さん。實に貴方はやさしい方ですね。

女。あ。まだ申すことがございました。その花を女におわた
しなされる時、あなたにとりついでいたときたい口上がござ
いました。

男。何なりとも。

女。屹度おつしやつてくださいませよ。

男。間違なく傳へます。何も貴方がたのお言葉だつて取りつ
いでやられないわけではないのですから。

女。(馬車の扉を開いて。)そんならかう云つていたときませ
う。

男。え。

女。「この花束は、お前と同じやうに私を可哀がつてくれた
かも知れないのであつたが、それを打ち明ける勇氣がお前
程になかつた或貴夫人が、お前にやつてくれろといつたの
だ。」

男。奥さん。

(女は車に乗る。車は軋々として去る。町は殆ど人影な

くなる。男は暫時立止りて、車の町の角を曲り去る迄見送
り、又暫時立止りて、オケットより時計を出して見、
急ぎ去る。)

僧房夢

(ハウプトマン)

第一場

僧院の陰氣なる天井高き間。壁を窪ませたる處に、古代
の製作の寢臺あり。暗色の帷を垂れたり。大なる燵。
(壁に造り込みたるカミン) 据付けあり。高き窓を開き
あり。夕昏。騎士一人馬より下りたる様子にて入り來
る。僕、外套、旅行用の毛布、天上(馬具の名)を持ち
て従ひ來る。

騎士。野宿をせねばならぬかと思つた。それに比べて見れば
先づ結構な處ぢや。

僕。左様でござりまする。
騎士。部屋は小さいが寢床は好さうな。暖爐まで備へてあ
る。

僕。然しお馬を受取て村へ曳いて參つた男は、鞍を此方へ
入れる時、手傳うて貰ひましたら、指で十字架の眞似をし
て申しますには、何だかこのお寺は夜になると油断の出
來ぬ處ぢやと申しました。

騎士。は、恐ろしいか。併し化物にも肉も血もある奴が居
る。用心の爲かうして短銃を寢床の傍に置かう。(間。)

僕。この寢床は兎に角餘ほど風變りぢや。

騎士。一寸見た處が寢床よりは寢棺に似てをるな。この窓
懸を開けい。この炭のやうに眞黒な布の奥に屈んで居るよ
りは、顔へ月が差した方が増じや。葡萄酒はまだあるか
い。

僕。明日はワルシヤワに着きませう。それまで飲用だけは
ござります。後はワルシヤワでお買入なさらねばなりませ
ない。

騎士。此處は元塔の土臺になつて居た間らしいな。壁が圓
く出來てをる。

僕。先刻の男が申しましたが、左様ださうでござりまする。
何でもこの塔がお寺になる前からあつて、其の塔の周圍に
ぐるりと坊さんの居る處が立つたのださうでござります
る。

騎士。(食物を脇へ押遣る。)もう澤山だ。彼方へ遣つて呉れい。その盃と瓶だけは置けよ。(間。)もう貴様は寝ろ。そして明日は日が出たら起して呉れい。(間。)やれ、早く國へ歸りたいものぢやのう。(間。)好く體を休めて呉れい。(僕立ち去る。騎士は圓卓に腕を突きなる。窓より斜に月の光愈々亮に差入る。その時老僧一人薪一束を脇挟み戸口に現はる。)

僧。(徐なる聲にて。)御免なされい。(緩爐の前に進み寄り、薪を下し、太き木と細き木とを撰分け爐の中に積む。)

騎士。遅うなつて誰か来たやうぢや。は、あ、あなたは坊様ぢやのう。

僧。(優しき聲にて。)寺の同宿でござりまする。

騎士。左様かな。爐の火はどうでも宜しいのぢや。御覽の通り窓を明けて月を見てをりまする。火も入らぬ位ぢや。

僧。いや、此邊は夜が更けると冷て参りまする。

騎士。何と言はれたか。(僧無言。騎士不思議相に首を振る。僧立ちて去らんとする。)もしもし御同宿。序ながら物が承はつて置き申したい。此處はセンドマイルの管轄でござりませうな。

僧。左様でござりまする。

騎士。好い土地ぢやな。何處を見ても森の木立が生々と繁つて居て、丘がある。谷がある。そして草花が一ぱいに咲いて居る。鳥も實入の好きやうな處ぢや。わしなぞも此様な土地に小さい家でも建て住みたい。勿論この國の者でなうてはだめぢや。(間。)御同宿お寒さうに見えるが。

僧。いえ、何ういたしまして。(間。)左様なればお休みなさりませ。

騎士。まあ、お待ちなされい。葡萄酒でも一杯参らぬか。これは西班牙の強い酒で飲むと體が温まるのぢや。まあ、一杯上げ。(僧首を振る。)遠慮は御無用ぢや。わしの大切な盃がこゝにある。戀人の呉れた記念品ぢや。この純金の盃で一杯献じたい、是非一杯。

僧。左様に仰せられれば、御辭退申すも失禮であらう。(盃を受取り替むる程飲む。これは難有うござりました。(間。))お休みなされい。

騎士。まあ、お待ちなされい。御同宿、わしはお前様がいかう氣に入つた。今少し承はりたい事もある。わしはこの土地は不案内ぢやが、一體この立派なお寺は誰が建てましたか。

僧。(眼を輝して騎士の顔をみつゝ見る。)それを貴道にお尋ねかな。

騎士。いや、唯御同宿は御存じの事と心得てお尋ねしたのでや。お前様は御存じでござらうが。

僧。お前様は御存じでござらうが。

僧。お前様は御存じでござらうが。

騎士。いや、存じてをればお尋ねはせぬ。

僧。評判の有る寺ぢや。それゆゑ疾に御承知の事と存じ申し

騎士。ふむ、お前様は變つた坊様ぢや。どうぞ知らぬ事ゆゑ教へて下されい。まだ瓶の中には好い酒が澤山ある。御一しよに呑まう程に緩りお話なされい。斯様な立派な寺を建てた大檀那の爲に、御一しよに盃を上げようではござらぬか。

僧。有辭うござりまする。

騎士。わしが其施主の爲に盃を上げるといふは斯ういふ譯ぢや。一體寺を建てるなどといふ事は、わしなぞは思ひも寄らぬ事ぢや。わしは馬に乗つて戦をする人間ぢや。併しな。斯うして此處に居心好く座つてゐるのも、好い施主があつて斯様なお寺を建て、置いて呉れたからぢやと思へば、それが有難いのぢや。

僧。あなたは獨逸のお方でござるの。

騎士。お察しの通ぢや。

僧。お見受け申す處、氣の面白い方と存じまする。どうぞ何時もお達者で此の世を心易うお過ごしなされい。

騎士。いや、わしも何時も斯様に氣を面白く世を渡つたものでもござらん。まあ、その椅子をもつと此方へ寄せて腰でも掛けられい。わしも或時は此世が面白うなうて苦虫を噛

第二場

いて兩方を此手に持つのぢや。お前様はその代りに十字架をお持ちなさるのぢや。

僧。(身を顛はせ囁く如く。) わしは十字架を持つのぢや。

騎士。御同宿、お前様はお顛ひなさる。御病氣かな。

僧。いえ、左様ではござらぬ。(間。)一寸此方へ參つて御覽なされい。(間。)あの、彼處の霧の中にあるものを御覽なされい。

騎士。城の崩れた蹟ぢやな。あれは誰の城でござつたかな。

僧。あれがシユタルシエンスキイ伯爵の城で、こゝら邊の實の好い土地は皆な伯爵の領分であつたのでござりまする。

騎士。それが何ういたしたのぢや。

僧。あなたはワルシヤワへお出でなさると承はるが、彼方へお出でになつたら、ヨハン・ソビエスキイ殿の一家にお尋ねなされい。伯爵の事をみな存じてをる。伯爵もお前様と同じやうに鋼と女子とが好きであつた。それが今は十字架を持つ身の上に成り申した。(間。)お休みなされい。

(遙に夕の勤めの歌聞ゆ。)

騎士。もうお歸りかな。

僧。夕の勤めに參るのでござる。(間。)死したる者の爲に。

(僧立ち去る。歌の聲の中に騎士は着のみ着のまゝにて寢床に倒る。騎士の眠ると共に舞臺暗くなる。舞臺再び明るなる時、騎士にも見物にも次の場の事夢に見ゆ。)

天井高く快活に美しき座敷に日光一ぱいに差し込んでゐる。

シユタルシエンスキイ伯爵、立派なる服装にて二歳に足らぬ娘を抱きある。伯爵の母マリイナ(立派なる老夫人)手爲事を持ちて窓の下に坐しある。乳母付きなる。

伯母上。

母。なんぢやな。

伯。わたくしは仕合者でござりまする。

母。お前さへ仕合せなら、わしも矢張仕合せぢやわいの。

伯。これが仕合せでなかつたら、世の中で誰が仕合せでござりませう。(間。)こりやエルガア。

乳母。エルガア様、お聞きなされませ。お父様がお呼びなされます。お父様がお呼びなされば御返辭をなさらねば可

けませぬ。

伯。お前は構ふな。何か一所懸命になつてしてをる。己はそれを見てゐるのぢや。己が斯うして此の子の烏羽色に光つてゐる髪の毛を撫つてやると、(子の頭を撫づ。)好い心持と見えていつでもちつとして撫られてゐる。エルガア、さうであらうがなう。

娘。お父、お父。

乳母。お父様と仰やいます。

伯。父様と云ひをるか。可哀いやつぢやのう。己の子ぢや。

うむ、己の子ぢや。お前のお母様は何處にをるか。

乳母。奥様はお晝の御膳にお出でにならうと申すので、御召替へを遊ばして入らつしやいます。

伯。母上、お聞きなされませ。わたくしの爲に身仕舞を致して呉れるのでござりまする。(娘を乳母に渡す。)さあ、抱いてやれ。

娘。(乳母に抱かれ、)お父、お父。

伯。わたくしがあの子に妻と同じ名を附けたのは宜しいではござりませぬか。髪の毛が眞黒で眼の碧い處が妻にそっくりでござりまする。(間。)乳母彼方へ連れて行け。

(乳母娘を連れて去る。)

伯。(暫くして。)母上。

母。伯。

伯。わたくしは仕合者でござりまする。

母。お前が仕合せなら、わしも仕合せぢやわいの。

伯。あなたも、わたくしが御一しよに寂しく人にも付合はずにゐた時分には、わたくしが此様に仕合せな者にならうとは思召さんだでござりませう。

母。ほんにわしも、さうお前が満足して日を暮すやうにならうとは思はなんだ。どうぞ何日までも斯ういふ工合なら宜しいが。

伯。何かお氣に掛るやうな事でもござりまするか。

母。いゝや。然し時といふものは變つて行くものぢや。仕合せのない内はどうぞ仕合せになりたいといふ希望がある。希望といふものは好いものぢや。さてその仕合せが手に入つて見ると、又無くなりはずまいかといふ心配がないでもない。

伯。は、さういふやうに御心配なされたり、深く物に立ち入つてお考へになるのは、わたくし共の家の血統にあるのでござりまする。それとは違つて妻の血統は氣輕な方ゆゑそこがわたくしに氣に入つてをりまする。(間。)母上いつ

も左様に縫取の粹の上に伏さつて計りお出でなさらずに、些と廻りのものや外のものに氣を付けて御覽なされませ。外は春景色になつてをりまする。庭の薔薇の花を取つて參つて食卓の上に生けさせませう。そして穴倉から一番古い分の葡萄酒でも出させませう。(間。)エルガアがお酌をいたしますから。

母。(感動したる様子。)ほんにお前は婦を可哀がるなう。

伯。左様でござりまする。然し母上はお詞で左様に仰やつても、わたくしの心の中はまだ十分にはお分りになりません。二十年の長い間、わたくしは日の光も洩れぬ牢屋の中で微の生えた麵包をでも噛つてをるやうな心持でござりました。何故か知れませぬが、わたくしには世の中がさうい

ふ風に思はれました。それゆゑ世間の者が、花が咲いたの樹々の葉が緑になつたの、鳥の穀物が黄金色に熟したのと申したり、鳥の聲を喜の聲に聞きましたり、蒼空の色を笑うてをるやうに見ましたり致しまするのが、わたくしには分りませなんだ。わたくしは唯奴隷が主人の爲事をしてゐるやうに感じて日を暮してをりました。それが今は心持が晴々と致して参りました。それはエルガアのお蔭でござりまする。

(伯爵夫人エルガア、早足に出て来る。)

夫人。旦那様。

伯。エルガアか。

夫人。今日は馬で狩に参らうではござりませぬか。

伯。好い、狩に参らう。然し穀物が丁度育ちかゝつてをるのぢやから、鳥の上は乗られぬなう。

夫人。鳥の上も垣や溝のある處も構はずに駆けさせねば面白うござりませぬ。おや、御覽遊ばせ。(蝶一つ飛び來りて夫人の胸に止る。)

伯。は、春が來てお前の胸に止つた。

夫人。蝶々でござりまする。(伯、蝶を捉へて捨り潰す。)これは何となさりまする。

伯。どうもせぬ。あそこは蝶のゐる處ではない。己の大事な場所ぢや。

夫人。まあ馬鹿らしいではござりませぬか。伯。エルガア。

(二人抱き合ひて接吻す。)

母。(縫取の袴より眼を離し)おや、また接吻をおしちやの。

伯。はい、接吻を致しまするとも。(問。夫人に)お前は己を愛してゐるかや。

夫人。はい、只今はおいとしく存じまする。

伯。只今計りでは可けぬわ。いつまでも愛してくりやるか。夫人。いつまでもと仰やりまするか。いつかはわたくしも厭になつてしまひまする。(問)併し只今はまだ生きてをりまする。(問)まあ、お放しなされて下さりませ。

伯。まあ、最う少しの間ぢつとしてお出で。(問)まあ何といふ可哀い目であらう。

夫人。そのやうに強くお抱き遊ばすと息が詰ります。伯。それは飛んだ事を致した。まあ可哀い手ぢやなう。

夫人。お放しなさりませ。

伯。お前の兄弟達が参る筈ぢや。もう知つておりやるか。夫人。グリシユカアとデミトリイとでござりまするか。

伯。二人ともぢや。

夫人。どう致して参るのでござりまするか。何の用事でござりまするか。

母。神様にお祈をするには、さういふやうにはせぬものぢや。

伯。斯ういふやうに致す外に致しやうはないではござりませぬか。葡萄酒の泡が立つ。エルガアが笑ふ。これより外に天にも地にも樂園はござりませぬ。

母。そのやうな事は言はぬものぢや。恐多い。

伯。エルガアをかうして抱へて居て神を演すといふ事がござりませるか。この女子の姿で神は自身の徳を現はしてをられます。神の淨い限りの姿形が、この女子の體として現はれたのぢやというても宜しうござりませう。神に假令どれだけの力があつて、萬物をそれ〴〵變つた形に造られると致しましたも、この姿を造られたのは、神も思ひがけなく造られたのではござりませぬか。上手な植木屋が育てる種々な木の果物にも、これ程立派に、これ程柔に、これ程甘い木の實が生る事がござりませうか。わたくしがこの女子を神として拜みましても不思議はござりませぬ。(夫人に)どうして神がお前程の女子をわしに賜つたかと思ふと不思議な位ぢや。

夫人。さう思つてお出でなさるなら、このわたくしを大事にして、人手に渡さぬやうに用心して下さいませ。

伯。(暫く思案してきつぱりさ)誓うて人に指もささせぬ。(ザミトリイとグリシユカアの兄弟活潑に入來る。)

伯。心配を致すな。

夫人。心配は致しませぬ。併しいつも参つてお金を借りて行くのが厭でござりまする。

伯。此度はまさか左様でもあるまい。

夫人。どうぞ又お金の事を申しましたら、一文も貸してお遣り遊ばしまするな。もう決して貸しては遣らぬとわたくしにお誓ひなされて下さりませ。

伯。いやお前の兄弟でさへなければそれ處ではない。己にも考があるのぢやが。

夫人。お母様、どうぞ旦那様も彼等にお金をお遣はさらぬやうに仰やつて下さりませ。

母。伴、其方も氣を付けて若い人達が悪い事に遣はぬやうにせねばなるまいぞや。併し婦御、お前様の爲には兄弟の事ぢやから、さう冷淡にはなされぬが好い。

夫人。ほんに詰らぬ事で折角の面白い日を憂なしに致しまする。

伯。何でも其方の氣の済むやうに致さうよ。

夫人。必ず、一文もお遣り遊ばすな。

伯。大丈夫ぢや、遣りはせぬ。然し兄弟達が來電一しよに御膳を食べる時はどうぞ機嫌を好うして居てくれい。愉快に今日は食べよう。丁度咲いた桃の花を摘んで來させて、葡萄酒の中へ入れて、お祈を捧げて飲まう。

兄。やれ／＼、漸々の事で参りました。
伯。これは／＼兄弟の人達、よう来られました。
弟。(伯の母の手に接吻す。)お後室様、御機嫌宜しう。
夫人。お前達を屋敷の者が入口で見たのかや。
兄。(伯の母の手に接吻したをばる。)いゝえ、わたし共は庭の方から参りました。古い望樓の傍の石垣に開けてある潜門を通りました。

伯。馬を何處に置かれたのぢや。
弟。あの邊をうろついて居た用人のチモスカ爺が受取つて呉れました。
夫人。どうしてまあ、チモスカは望樓の近所なぞをうろつてをるのでござりませう。

伯。わしも知らぬ。
弟。然もわたくし共兄弟が入つて参ると吃驚いたした様子でござりました。

母。あの男は決してさう臆病なものではない。お前方を見て吃驚いたしたなら、それは主人の爲を思うての心使ひからであらう。お前方が貴族の中の不平等に付合つて國王ヨハン・ソビエスキイ様を滅さうとしてゐると噂をするものがあるのを、チモスカも聞いてゐるゆゑ、王様には自分も昔御奉公をした事もあり、その王様がもしや伴の身をお疑ひなさるやうな事があつてはならぬと、心配をしてゐるので

た事と見えまする。

兄。それに違ひござりませぬ。

伯。兎に角引き籠つて樂に暮してゐるといふのは、人柄に似合しい事で結構ぢや。近い中に夜でも好いから馬で屋敷まで参れば好い。

兄。どうも引込思案の男でござりまするから。

伯。そんならわしがさういうたと云ふが好い。些と他から奮發するやうに致してやる方が好からう。

母。(苦々しく思ふ様子。)ほんに奮發いたされたら宜しうござりませう。日外も會つた時、様子を見ますと、小さくなつて壁の傍にばかり寄つてをるといふやうな風に見えましたわいの。

夫人。えゝ、あれは女子のやうな人でござりまする。あのやうな男を屋敷へお呼びなさらずとも宜しからうと存じまする。

伯。さういふものではない。優しい質の男ぢやから、却てわし共なんぞより深い考へがあるかも知れぬ。呼んで来てこの家の爐にあたらせたても好いではないか。

兄。亡つたお父様は、あの男を随分度々非度い目にお合せなさりました。

弟。そして大抵いつも蔑んだやうな調子でお扱ひなさりました。

あらう。

伯。左様な事かも知れませぬ。兎角正直な老人といふものは、入らぬ心配を致すものでござりまする。

弟。(笑ふ。)正直も好いが、がさつなには困ります。

夫人。正直なやらどうやら知れたものではないわいの。何はともあれ、お前達はさうしてゐるに、冠り物や何かを片付けて、寛いだが好いではないか。(問。)この頃は従弟はどうしてをられるかや。

兄。オギンスキイでござりまするか。至極達者でござりまする。

弟。達者な計りではない。わたくし共よりは樂に暮してをりまする。亡なつたお父様が後見ぢやといふので、義理立をしてなにかの財産をあの男の爲に取つて置いておやりなされたのを、あの男は節儉して滅さぬやうにしてをります。餘り人付合は致しませぬが、暮しは豊でござりまする。

伯。それは何よりの事ぢや。お前方はそれ／＼考があつて貴族通と氣脈を通じてをられるのぢやが、オギンスキイが引き入れられたのは、人柄に似合ぬ事ぢや。あの男は豪傑風の男ではないからなう。

母。豪傑では無論ござりませぬ。
弟。お前方が爲なさるゆゑ付いて致さねばならぬやうに思ふ

夫人。(假借せざる様子。)さういやるが、お父様のお扱ひなさり方は、あの男相當であつたわいの。

母。婦女、わしを彼處へ連れて行つて下され。

夫人。(親切氣に。)はい／＼、何處までともわたくしがお伴を致しまする。

(伯の母はエルガアに扶けられて退場す。)

伯。酒ぢや。(問。)お前方は咽が乾いてゐるであらう。

兄。馬の脊に三時間をりました。その上その乗り様というたら。

伯。はゝ、お前方は世渡りも荒いから馬の乗り様も荒からうなう。

弟。世の中を大人しく緩々と暮してゐるがものにはござりませぬ。

伯。さうでないて。

兄。あなたはさう仰やる。然しわたくしは考が違ひまする。

弟。わたくしも違ひまする。

兄。わたくしの感じでは、わたくし共は皆背中に槍を付けられてをりまして、その槍の穂先の抜けずにあるのを、そのまま背負うて走り廻つてをるやうでござりまする。

弟。それぢや、その穂先の肉を刺す痛さをほかさうと思ふ計りに酒も飲み、悪い事も致すのでござりまする。

伯。氣の毒な人達ぢやなう。

兄。そしてあなたは、何ともないと思召してお出でなさりますか。

伯。わしに何かあるものか。
兄。槍の穂先のさゝつてを毒のある創はあなたのお背中にはござりませぬか。

伯。(僕、葡萄酒の瓶を盃を取出で、盃に酒を注ぐ。)
(盃を擧ぐ。)さあお前方も飲まれい。(問。)わしは背中に創なぞはない。成程わしも一頃は背中に創でもあるやうに感じた事がないでもないが、わしはお前達とは違つて、その時酒を飲んだり賭事をしたりする代りに戦争に行つて死ぬる機会を求めたものぢや。そして戦争の無い時には丁度オギンスキイのやうに引込んでつたものぢや。併し今から思へばそれは馬鹿な事であつた。今のわしの背中には創もなければ槍の穂先もない。(盃を打合す。)世の中には幸福といふものがある。

弟。幸福といふものが眞にござりませうか。
伯。あるともく。
兄。何處に幸福がござりませう。
伯。女子といふものがその幸福ぢや。
(兄弟聲高に笑ふ。)

伯。お前達は何が可笑しうて笑ふのぢや。
兄。あなたが左様な事を仰せられるゆゑ。

不仕合な時でござりました。

弟。實に不仕合な時であつた。

伯。成程、親子の爲には不仕合な時であつたらう。わしの爲にはさうではない。

弟。ほんに思へば、お父様をあれ程の非運に陥れた奴輩が憎うてならぬ。

兄。憎い奴等がお父様やエルガアを乞食にしてしまつたのぢや。

伯。ほんに乞食というても好いやうな姿で、わしの跡から附いて来て合力を頼んだのであつた。ぢやがその事は言ひたうない。(問。)さてあれに連れられて行つて見ると。

兄。おゝ、病苦に寝たお父様が、馬の鞍を枕にして、薬の中に身を横たへて落ぶれながらも武士らしく、一命の盡きるのを待つてお出でなされた處へ、あなたがお出でになつたのでござりまする。

伯。處がわしが目には只あれ計りが見えたのぢや。覺束なげに蠟燭の火が燃えてをつた。併しわしが目には、あれ計りが見えた。(問。)あの時から今日まで、長い年月の間、わしが目には只あれ計りが見えるのぢや。(次第にうつさりさなる。)謂はゞわしが眼と世界の萬物との間に、あれの姿があつて遮つてゐるとでもいふものか、いや、あれが世界の萬物ぢや。(問。)わしが目に見えるのはあれ計り

伯。わしが言ふ事が違ふと思はれるのか。
弟。(笑ふ。)どうもわたくしには違ふやうに思はれまする。わたくしの心持では女子といふものは下らなくなつてしまひました。

伯。どういふ女子でも下らぬといふのか。
兄。随分色々な女子にも出會ひましたが、どれも下らぬやうに思はれまする。

伯。成程、事に依つたらさうかも知れん。(問。)併しあらゆる女子が下らぬものでも、たつた一人の例外がある。

兄。その例外とは。
伯。わしの女房ぢや。

弟。(暫く黙してゐて。)ほんにあなたは世間の夫といふ夫の中で不思議な方でござりまする。三年の間も夫婦になつてゐて、あなたのやうに考へるものは世間に二人とはござりませぬ。
伯。それは左様かも知れぬが、わしは飽くまでさう信じてゐる。

兄。そして少しもお厭にはなりませぬか。
伯。厭る處ではない。まあ聞いて呉れい。丁度今から四年前の事であつた。雨の降る晩にワルシヤワの街を歩いてゐると、ふいとあの女子に逢つた。

兄。あゝ、亡くなつたお父様の爲にも、エルガアの爲にも、

ぢや。

兄。(少しくたげたひつゝ狡猾しく。)わたくしは、あなたに些と申したい事がござりまする。

伯。何でも好いから言ふが好い。

兄。これまでもわたくし共二人が爲に色々御盡力はなさりましたか。

伯。いや、これといふ事は何も致してはをらぬ

弟。どう致しまして、容易ならぬお世話になつてをりまする。どうもこれまでの御恩が返されさうにも思はれませぬのに、又御恩を蒙らねばならぬといふのは、心苦しい次第ではござりまするが、何をいふにも我等二人は奮闘の最中

でござりまする。我等貴族の自由と榮譽とを恢復しようといふ計りでなく、國民の爲をも思つて働いてをるのでござりまする。

伯。わしはさうは思つてをらぬ。
弟。それはあなたのお考で、わたくし共もさういふ筈はないなぞとは申しませぬ。あなたは幸福にお暮しなさるが好い。わたくし共は家も領地もないものでござりまする。敵はわたくし共に一日の安心をも與へて呉れぬのでござりまする。たつた一夜枕を高く休まうと致しまするにも、金銭

が入りまする。
伯。どれ程入ると言はれるのぢや。

兄。千兩程ござりましたら。
伯。好い、承知した。併し人に言うては成りませぬぞ。

(用人登場)

伯。チモスカか。何ぞ用か。

用人。何かお話中の御様子でござりまする。御都合次第で又申上げる事に致ませう。

伯。いや、差支ないから今聞かう。(兄弟に。)許して呉れられい。わしは領地の事務を熱心に取賄なうてをるのぢや。田地から收れる穀物ばかりでも車百輛を越してゐる。百姓も五百人以上使うてをる。

兄。いや、あなたが御自身で御經營なさるのには實に模範的ぢやとわたくし共もお噂を致すのでござりまする。

伯。そこで、チモスカ、何の用ぢや。(兄弟に。)見て呉れられい。この爺は實にわしが片腕ぢや。この爺を通してわしは世日田地や山林や百姓のをる部落などを見廻るのぢや。弟。成程、諺にも主人の目は牛を肥すと申しまする。

兄。併し下部を養せさせるとも云ふて。

伯。それはさうかも知れぬ。兎に角人間は或る義務を果すといふと心持が好いのぢや。爲事をした後で食卓についた心持は別段ぢや。そしてエルガアの笑ふ聲を聞くのぢや。弟。さう仰やれば、エルガアは少し笑ひ過ぎる程でござりまするな。(兄に。)兄貴、あれの處へ行かうではないか。

伯。お乗せなさるのも結構でござりまする。併し。(これつたき様子。)そこで何が結構でないといふのぢや。

用人。併し殿様が、デミトリイ様やグリシユカア様と餘りお心易くなさりまするのには。

伯。この一年が間は滅多に参りはせぬではないか。

用人。どうもあの方々のお蔭で、殿様の御身の上や御領地に、何事かあるやうな事が出来はせぬかと心配でなりませぬ。

伯。こりや、爺、其方は年を取つてゐて相變らず正直に致してをる男ぢやから、わしは其方を咎めうとは思はぬ。其方が氣の濟むやうに何事も隠さずに云うても聞かしてやる。あの兄弟達は手んでに勝手な事を致すが好いのぢや。わしは何もあの兄弟達の心立や品行を保護してゐるのではない。わしは飽くまで國王に忠義を立て、この田島を耕す積りぢや。そこで其方が心配ぢやといふのはどうした訣ぢや。

用人。いえ、あの方々が餘りしげくお出になりますので、伯、誰がしげく來るといふのぢや。

用人。あの兄弟でござりまする。(間。)村の百姓共が皆承知いたしてをりまする。

伯。いや、兄弟共は九ヶ月程前に來て、その後來たのは

(二人、伯に會釋して退場す。)
伯。爺い、何を口の中で言うてをるのぢや。はつきりと言へ。

用人。殿様、どうも業が煮えてなりませぬ。

伯。あの業のやうな色の頭をした小者めがお馬車の轡を折つてしまひました。

伯。そんなら新しいのを誂へるか好い。(間。)それ許りか。

用人。どうも業が煮えまする。

伯。ふむ。(間。)まだ何かあるのか。

用人。はい、まだござりまする。

伯。積み込んである小麥でも蒸れたのか。

用人。左様な事ではござりませぬ。

伯。さて、其方の口の中から話を引き出すには、釘拔でも持つて行かねばならぬのか。(間。)この間の暴風雨に酷い損害でもあつたのか。

用人。左様ではござりませぬ。

伯。鳩の鳥屋へ馳でも付いたのか。

用人。どうも業が煮えまする。殿様の昔のやうに暗い處に坐つて顔を曇めてお出でなさるやうな事の無うなつたのは結構でござりまする。お美しい奥様の入らつしやつたのも結構でござりまする。又殿様がお膝の上に可哀らしいお姫様

今日が始めてぢや。

用人。百姓共の申すのは、そのお訶とはいから相違いたしてをりまする。

伯。それは馬鹿者共が何か心得違ひを致してをるのであらう。

用人。百姓ばかりではござりませぬ。(間。)殿様。この爺もこの目で確と認めた事がござりまする。

伯。其方はどういふ事を見たといふのぢや。

用人。秘密の使者がお屋敷へ毎夜通うて参るのを。

伯。(驚き訝がる様子。)なに、秘密の使が夜毎に來るとは、それは又何處から來て何處へ参ると申すのぢや。

用人。あの潜門を通りまする。

伯。あの奥庭の望樓の脇の潜門か。

用人。今日御兄弟の家がおはいりになりましたあの御門でござりまする。

伯。左様か。あの潜門と望樓とは確か鍵があつた筈ぢやが、誰が鍵を所持してをるか。

用人。奥様がお持なされてお出なさりまする。

伯。何と申す。以ての外のことぢや。よいわ。わしは考がある。よいから其方は行け。

(用人丁寧に禮をして退場す)

夫人。(舞臺の奥より。)旦那様は何をしてお出でなさります

る。早う此方へお出なさりませ。(伯は茫然として立ちあ
る。そこへ夫人出て来る。)あのやうに呼びましたのに、
あなたには聞えませぬか。

伯。(夢の覺めたる如く。)お前はわしを呼んだのか。

夫人。まあ、どう遊ばしたのでござりまする。夢をでも見て
お出遊ばしたやうに

伯。(苦し氣に溜息す。)苦しい夢を見てをつた。

夫人。何と仰やりまする。苦しい夢とはどのやうな夢を御覽
なされましたか。

伯。まあ、此方へ寄れ。(夫人を引寄す。夫人接吻す。)己の
顔をよう見い。

夫人。(伯の顔をうつさ見る。)何でござりまする。

伯。(夫人の顔をうつさ見る。)何でもない。

夫人。何を思つてお出でなさるのやら。

伯。(安心したる様子。)何でもない、何でもない。

(夫人の額に接吻す。道具變る。)

第三場

寢室。夫人化粧臺にて何かなしなる。眠りたる子を抱け
る乳母傍にゐる。午後十一時頃。

夫人。乳母や。お前はその子をそつと抱いてあちらへお出。
此宵もお前は隣の部屋に寝すにあちらの黄色い部屋の

方に寝るが好い。ドルトカが子供を寝せる挿籠をあちらへ
持つて参るであらう。わたしは酷く草臥てゐるのぢや。隣
の間で子供に泣かれてはよう休まれぬから。

乳母。奥様。さう御心配遊ばすには及びませぬ。わたしはお
姫様の御様子をよく存じてをりまする。ようお休遊ばす晩
と、夜中にお泣き遊ばす晩とは前から分つてをりまする。
此宵などは夜の明けるまで隣などをお立なさる事はござり
ませぬ。

夫人。それでも好いから、わたしのいふ通りにしや。

乳母。はい、それは仰やるまでもござりませぬ。何でも
お主様の仰やる事はお聞申さねばなりません。おや、

お目覺と見えまする。おや、好いお子ぢや。まあ大き
いお目をお開なさりました。さあ、お母様のお化粧を遊ば
すのを御覽なさりませ。お乳の上に美しい星が輝いてをり
まする。お耳朶には赤い寶石が光つてをりまする。

夫人。(鏡を見入りたるが、心付きたる様子。)乳母はまだ
ゐるのかや。早うその子を連れてお出。

(乳母、子供を抱きて退場す。)

夫人。(小聲に唄ふ。)

わしや空を飛ぶ荒鳥ぢや。
しらふの鷹ぢや。

照る日の下を飛んで行く。

遙に下を見おろせば
土に翼の影がさす。

影も一じよに飛んで行く。

そこへ来たのは誰ぢや。ドルトカではないかや。

(侍女ドルトカ登場)

侍女。はい、わたくしでござりまする。

夫人。伯爵はお馬でお出になつたかや。

侍女。左様でござりまする。とうにお出ましになりました。

夫人。お言付けなさるのを傍で聞いてをりましたら、大相
御用が溜つてお出なさるので、今宵は町で御泊になる筈ぢ
やと申す事でござりました。

夫人。馬に乗つて遠くへ行くのに、わたしに暇乞もせぬとい
ふのは。(氣輕に。)さういふお心ならそれでも好い。

侍女。好くお休になるやうに申上いと、用人にお申付なさる
のを聞ましてござりまする。

夫人。あのチモスカ爺にか。

侍女。左様でござりまする。

夫人。ほんに戀の使に似合しいものをお使なさる。

侍女。ほんに老耄れて危なかしいお使者でござりまする。

夫人。耳に寶石を下げたが、工合は好いかや。

侍女。大相赤い美しい石ではござりまするが、奥様にはお唇
といふ美しいものがござりまするから、その寶石は無く

も宜しからうと存じまする。

夫人。お前は洒落た事をいふ女子ぢやなう。(問。)お前は詩
でも作るかや。

侍女。いゝえ。よしや作りましても直なものは出来ませぬ。

夫人。オギンスキイ様のやうにお立派な作は出来ませぬ。

夫人。どうしてお前はオギンスキイ様が詩人ぢやといふ事を
知つてゐるか。

侍女。奥様はたつたこの間、オギンスキイ様のおよこしにな
つた詩を讀んでお聞せ遊ばしたではござりませぬか。

夫人。どの分の詩であつたかなう。

侍女。確か鷹の事が唄うてあつたやうに存じまする。

夫人。あれはほんとに好う出来てをつたなう。(問。)おや、
何か聞えたではないかや。

侍女。いゝえ、何にも聞えは致しませぬ。奥様には何か聞え
ましたのでござりまするか。

夫人。藩門を開ける音がしたやうに思ふたが。

侍女。いゝえ。藩門なら些とも音は致しませぬ。わたくしが
自分で鐵のほそに油をさして置きました。

夫人。お母様はもうお休になつたかや。

侍女。はい、お休になりました。

夫人。お母様はお人の好い方で、お静な方ぢや。何もお氣に
かゝる事などはないやうな。わたしの母様などは、あんな

ではなかつた。併しほんに／＼美しい方であつた。
侍女。奥様と同じやうにお美しうござりましたか。
夫人。何のわたしどころの事ではない。百里も先に住むものでも、お母様の美人ぢやといふ事を知らぬものはなかつたわいの。(問。)それについてほんに恐ろしい事があつた。その頃家にわたしをより肩に乗せて呉れる家來があつた。象のやうな骨組の大男であつたが氣立は優しうて小鳥か何かのやうであつた。(問。)その家來がの、或日の朝、お母様のお部屋の戸の外で首を縊つて死んでをつたわいの。
侍女。まあ、馬鹿な男ではござりませぬか。及びもない事を。

夫人。お前なぞも斯ういふ事があるかや。
侍女。どういふ事でござりまするか。
夫人。日が暮れてから、前の晩に見た夢がふいと思ひ出される事があるかや。晝の中は丸で忘れてゐて、ふいとそれが浮んで來るといふやうな事が。
侍女。さう申せば奥様は、昨晚夢を御覽遊ばして聲をお立なさりました。若しお夢の中で怖く思召した事を覚えてお出なさりは致しませぬか。
夫人。いや、そのやうな事は覚えてゐぬ。
侍女。ほんに恐ろしい鋭いお聲でござりました。奥様のお聲とは思はれぬほど。

邊は皆ひつそりと寢靜まつてをります。お逢ひ遊ばすのは今宵が初ではござりませぬに、たつた先程まで時の經つのもどかしう思召すのが、餘所目にもよう知れてをりました。お心が届いて殿様はワルシヤリへ泊掛にお出掛になる。このやうな好い首尾はござりませぬ。何を御心配遊ばしまするか。
夫人。何とわたしは云うたかや。
侍女。お待受申して、その儘お歸し申せと仰やりました。
夫人。ほんに急がれるだけ急いで行つて。
侍女。お引返し遊ばすやうに申すのでござりまするか。
夫人。何のいの。(問。)こりや。
侍女。何と仰やりまする。
夫人。蹄の音が聞えた。

侍女。誰やら駈足であちらへ參つたやうでござりまする。大方用人でござりませう。先刻家來や女中に酒を持つて行つて遣はしました時、用人の馬に鞍が置いて既に繋いであるのを見て參りました。
夫人。其方はあの用人をどう思つてゐるかや。
侍女。油斷のならぬ男でござりまする。然し老巻れて耳は聞えず、目は見えず、齒さへ抜けてをりますから、何に手出しが出来ませう。
夫人。(可笑しがる様子なりしが、俄に驚きて。)やゝ、あの

夫人。ほんに夢はいやなものぢや。ちつとも夢を見ぬやうにしたい。わたしは夢によう何か分らぬ眞黒いものを見る事がある。それから燈火の點いてをるのを見る。それから人の死骸を見る事がある。死んだものを夢に見るといふ事は誰にもようある事と思はれる。

侍女。えゝ／＼、さういふのは仕合な夢ぢやと申しまする。
夫人。今宵は大相月が好いなう。餘り外が明る過ぎる。これは丸で晝のやうな。
侍女。それでも栗の木に葉がござりまするから、蔭の處がござりまする。冬の中は何處までも見透されて工合が悪うござりました。
夫人。栗の木に葉が出来たばかりぢやない。何の木にも葉が繁つて花が咲いた。まあ、あの接骨木の花のよう白ふ事わいの。えゝわたしとした事が。

侍女。奥様。何と仰やりまする。
夫人。ほんにどうしてあの人か、このやうに戀しいやら。
侍女。御尤でござりまする。
夫人。(俄に忙はしく。)いや／＼、今宵は來て貰ひたうない。お前は早う行つてお待受け申して直にお返し申してくりや。
侍女。まあ、途方もない。何をと思出し遊ばしましたやら。がた／＼顛へてお出遊ばす。何が恐ろしいと思召すやら。四

燈火は。
侍女。ほんにまあ、何日もない、あの翠樓から燈火がさしてをりまする。
夫人。早うその毛革の上着を取つてくりや。
侍女。あれまで行つて御覽遊ばすお積でござりまするか。
夫人。行かいで何とせう。
侍女。燈火などをお點遊ばさいでも好いものを。
(オヤンスキイ登場。)

夫人。どちらからおはいりなりました。
從弟。落門が開いてをつた。
侍女。わたくしが開けて置きました。
從弟。(侍女に。)それ褒美ぢや。
(侍女に金を遣る。侍女退場。オヤンスキイ、エルガアの二人待籠れたる如く抱き合ふ。)
夫人。どうしてこのやうに遅うお出なりました。
從弟。何といふ事はない。寂しい畠の間や森の中を何處ともなく倘俚うてゐた。ぢやが心はいつもお前の傍に。
夫人。それが何のわたしの用に立たう。あなたが傍に入らつしやらねば、矢張傍に入らつしやらぬといふものぢや。假令お心がわたしの傍に來てゐると仰やつても、矢張傍には入らつしやらぬのぢや。
從弟。そんなら己と一しよに逃げれば好いのぢや。なぜ己の

言ふ事を聞かずに、いつ迄もこの屋敷にをるのぢや。

夫人。何の詰らぬ。いつも同じやうな事ばかり。

從弟。(熱心に接吻して詞に力を入る。)なぜいつまでも此處にゐて己に付ては來ぬのぢや。

夫人。何行へ連れてお出なさります。

從弟。お前も知つてゐる通り、己は代官ラシエツクの死んだ時、些許り財産が手に入った。あれを持つて二人で餘所の國へ逃げて行けば、どうにかならうといふものぢや。

夫人。そしてわたしが襦袢や靴足袋の洗濯をするやうにならねばならぬのでござりまするか。

從弟。己がお前の爲に働く。夜などは寝ぬでも好い。夜晝共に働くのぢや。

夫人。(掌にて從弟の口を塞ぐ。)いえ、そのやうな事はだめでござります。

從弟。そんなら己が可哀うはないのか。(夫人は只意味なき微笑を帯びて首を振る。)兎に角このやうな境界を離れねばならぬといふのぢや。

夫人。またそんな事を。

從弟。いや、所詮この儘には過されぬ。己のいふ事を聞かぬのは矢張己が可哀うなうて伯爵が可哀いのぢや。伯爵はお前の夫に相違ない。よい、そんならそれでよい。夫人。伯爵は大嫌でござります。

從弟。そんなら己をも嫌ふのぢや。人の噂にいふのを聞けば、己の來てをらぬ間、この屋敷にはお前の笑ひ聲が絶えぬさうぢや。お前は笑うて踊つてをるさうな。踊が好き、宴會が好きで厭るといふ事は無いさうな。(間。)こりや泣くには及ばぬ。

(從弟は夫人の目に接吻す。)

夫人。折角待ちに待つてゐるのに、無理ばかりを仰やります。(間。)それはさうと近い中に伯爵があなたをこの屋敷へ御案内がしたいと云うてをられましたか、もうお聞なされましたか。

從弟。いや、まだ聞かぬ。

夫人。伯爵に呼ばれたら屋敷へお出なさりますか。

從弟。(確りさ。)伯爵が招けば屹度來る。

夫人。確に案内をせられるさうでござります。(間。)今日も兄弟共が參りましたか。

從弟。また金を引き出しに來たのか。

夫人。それはどうか存じませぬ。併しいつかあなたの仰やつた通り、兄弟共の企は成功する筈が無い。それに品行もよらないから、なんにもお遣なざるなと伯爵に申しましたら、好い、もう一錢も遣りはせぬとわたしには申されました。(心にて笑ふ如く。)ほんに兄弟共は可笑しい奴等でござります。

從弟。何が。

夫人。あなたの事を言うてをりました。

從弟。己の事をどういうた。

夫人。大層お氣の毒な方ぢやというてをりました。

從弟。何の詰らぬ。

夫人。あれらのいふのを聞いてゐると、あなたは丸で銅葉に離れた羊のやうで、兄弟共は獅子で、もあるやうに聞えませぬ。

從弟。己は確に獅子ではない。

夫人。全であれら二人で何日もあなたに絲を付けて繰つて、もゐるやうに聞えます。

從弟。伯爵は兄弟のいふ事を信じてゐる様子であつたか。

夫人。(笑ふ)伯爵はあなたをお氣の毒に思つてお客にしよと云れるのでござります。

從弟。好い、それならそれで己は來る。

夫人。いゝえ、お出なさらぬのが宜しうござります。

從弟。なぜ。

夫人。(常惑の様子。)もしお出でなさりますと、わたしは愈々墮落せねばなりません。

(侍女駆け來る。)

侍女。早うお逃なさりませ。オギンスキイ様。皆で庭中を探してをります。

從弟。誰か。

侍女。皆が望樓でお點になつた燈火を見たと思えます。

(從弟は身を跳らして窓の外を覗ふ。)

夫人。潜門をお閉め。

(侍女馳せ去る。夫人急ぎて窓の外を覗ひ、次いで戸口に駆け寄る。忽ち外にて侍女の叫ぶ聲聞ゆ。伯爵、叫ぶ侍女を引きずりて入來る。)

伯。白狀せぬか。

侍女。何を白狀いたせと仰やります。

伯。白狀せい。賣女め。偽を申すと命がないぞ。

夫人。(突然劇しき調子にて。)どうなさります。ドルトカが何を致しました。

伯。何をしたか、其をわしは問うてをるのぢや。賣女め。白狀せぬか。男は何處にをる。何者ぢや。(外に向き。)チモスカ。はいれ、びく、する事はない。わしがいれ

といふのぢや、男は何者ぢや。潜門からはいるのを、其方と一しよにわしが見た。其方も一しよに見たではないか。

夫人。はあ。二言めには用人々々と仰やります。用人は家來や下女を監督いたせば宜しいのでござります。奥向の事は用人の知るところではござりませぬ。それともあなたは用人に、腰を見張る片手間に、女房の番をおさせなさるのでござりますか。

伯。こりや、エルガア。
 夫人。何と仰やりますか。
 伯。其方は丸で別な人間のやうになつたなう。
 夫人。お母様はお休になつてお出なさる。雖もよう眠つてを
 る。そこへあなたがお出になつてわけもない事にお騒な
 されて、屋敷中のものをお騒がせなさりますのは、どうい
 ふわけでございますか。
 伯。わしは屋敷に賣女を隠匿うては置きたうない。わしは屋
 敷に國王に仇をするものを隠匿うては置きたうない。わし
 の盾は曇のない鋼の盾ぢや。わしの家は潔白な家ぢや。盜
 人の隠家でもなければ、怪しいものゝをるべき處でもな
 い。賣女め。白状いたせ。申さぬなら出て失い(用人に)
 犬をけしかけて追ひ出してしまへ。
 夫人。(猛烈に。)ドルトカはわたくしの召使でござります
 る。あなたもよもや、わたくしの同意を得ずにお出なさ
 らうとは仰やりますまい。
 伯。何、わしが何を致してならぬといふのか。
 夫人。わたくしの女中をあなたがお出しなさりは致しますま
 い。
 伯。いや、さうは参らぬ。わしが出す。
 夫人。いえ、さうは致させませぬ。たつてお出しなさる
 なら、わたくしをも一しよにお出しなさりませい。(間。)

假令どれ程落ぶれてもあなたの御家來の辱をば受けませ
 ぬ。さあ、この用人をわたくしの居間から外へ追ひ出して
 戴きませう。
 伯。こりや、エルガア。
 夫人。いえ、わたくしは聞きませぬ。
 伯。こりや、お前は丸で夢中になつてをる。
 夫人。この上わたくしの氣が狂ふやうになさりまするか。
 (侍女に。)ドルトカ。さあ、此方へお出。(伯の手より侍
 女を引離す。)こゝへおはいり。
 (夫人は泣く侍女を奥に連れ込む。)
 夫人。落ち附きたる様子にて確りさ。ドルトカはわたくし
 の召使でござりまする。爲置をいたして宜しければわたく
 しに致します。 (間。) この上わたくしに仰やる事がござ
 りまするなら、せめて夜の明けるまでお待ちなさるが宜しう
 ござりまする。疲れ果てたわたくしの體を少し休ませて下
 さりませ。
 (侍女の跡より奥に入る。戸を閉づる音。)
 用人。(物思に沈みぬる伯に。)殿様、殿様。(間。)もうお休
 なさりませぬか。
 (道具變る。)

第四場

(伯爵居城の食堂。日の出の直ぐ前。伯は並べる高き窓
 の一つの前なる胸附の椅子に腰掛け、前晚の儘の服裝に
 て物を案じぬ。家來二人椅子に掛けたる伯に氣付かず
 して掃除に取り掛かる。
 第一の家來。ゆうべは一體何事があつたのだい。
 第二の家來。己はよう寝てをつたから何にも知らぬわい。
 第一の家來。何でも殿様がお騒なすつて、御用人は夜通し
 駆け廻つてゐなすつたのだ。
 第二の家來。(伯を見付けて。)しつ。あれはどうだ。
 第一の家來。ほんになう。
 第二の家來。殿様だぜ。
 伯。(家來共の來るに氣附く。)そち達は何を致すのぢや。
 第一の家來。はい。お座敷のお掃除を致しまして、朝のお食
 事を遊ばすやうに、テエブルの用意を致すのでござります
 る。
 伯。宜しい。左様致せ。(間。)こりや。
 第一の家來。はい。
 伯。用人に來るやうに言へ。
 (第一の家來退場す。伯は再び物思に沈みぬる。用人來
 用入。(危ぶみつ、歩み近づく。)殿様。お呼びなりました
 か。)

伯。(心こゝにあらざる如く用人を見て。)うむ。
 用人。御家來がお召になつたやうに申しましたが。
 伯。うむ。用人ぢやつたな。(間。)チモスカ。まあ此方へ來
 い。(用人の手を取る。)何かそちに言はうと思つた。お
 お、さうぢや。わしはワルシヤワへ行かねばならぬ。
 用人。承知いたしました。革毛に鞍を置かせませう。
 伯。うむ。(間。)こりや、チモスカ。
 用人。はい。
 伯。醫者を呼んで呉れまいか。
 用人。御氣分でもお悪うござりまするか。
 伯。左様ぢやて。どうも不慮のやうでない。寒氣が致す。毛
 革の外套を出して呉れい。
 用人。殿様。お休になつては如何でござりませう。
 伯。(家來に毛革の外套を引掛けさせつ。)ワルシヤワへ行
 かねばならぬ。
 用人。(小聲にて、家來等に。)爐に火をおこせ。御座敷が暖
 かになるやうに。殿様が寒いと仰やる。急いで致せ。そし
 て早くサモワル(茶器)を持つて來て殿様に熱いお茶を上
 げい。
 伯。さうぢや。茶を持つて來い。あゝ、毛革を着たので好い
 心持に成つた。(間。)どうしてわしはこゝにをるのぢや。
 ゆふべは丸で寝なんだか知らぬ。

用人。はい。お休にはなりませんのでござりまする。
伯。どうしてわしは寝なんだか知らぬ。(稍長き間。)よいよ
い、行け。

(用人退場す。伯は立上り、何か物を案ずる様子にて、
座敷の中をあちこち歩きある。家來サモッルを持ち來
り、茶を注ぎて出す。伯飲む)

伯。(飲み終りて。)母上をお起し申して此方へお出になるや
うに申上げて呉れい。

第一の家來。御後室様は唯今丁度お寺からお歸になつて此方
へお出なさりまする。

(後室マリイナ登場。)

伯。(悲さらしく氣輕に。)母上、お早うござりまする。

母。倅は其處にゐやつたか。

伯。はい。まあ此處へ来て腰をお掛なさりませ。そして御一
しよに茶でも飲みませう。(家來に。)こりや燈火を持つて
來い。どうも暗うて可かぬ。これで好い。母上あなたとわ
たくしが斯様に差向で茶を飲みまするのは、餘程久し振
でござりまする。

母。ほんに久し振ぢや。併しそれはわしの爲ではない。毎朝
わしはお寺へ行く。それに其方は遅う寝て遅う起きるの
で、とう／＼顔を合せずにしまふのぢや。決してわしの爲
ではない。

伯。それは承知いたしてをりまする。

母。斯うなつたのは大抵お前の爲ぢや。(間。)お前はどうか
ら顔色が悪いやうぢや。どうか致しはせぬかや。

伯。いえ／＼。どうも致してはをりませぬ。(間。)一體かや
うに御一しよに茶を飲みまするのは何年振でござりませう
か。

母。二年近くなるやうぢやなう。

伯。梯子といふものは昇つて參つて又降りて參る事が出来る
やうに存じまする。母上、左様ではござりませぬか。

母。それは昇つたら降りて來られる筈ぢや。何故そのやうな
事を問ふのぢやぞえ。

伯。いえ。そのあたりまへの梯子の外に、昇つて行つたばつ
かりで降りて來られぬ梯子があるやうに存じまするので、
左様申したのでござりまする。その梯子をわたくしは昇り
昇つて、地面が見えぬほど高い處へ參りました。又地の
上へ戻らうと存じますれば、體が碎けてしまはうかと思はれ
まする。

母。何故そのやうな事を思ふのぢや。人の運命は皆神様のお
手の中にあるではないか。

伯。何故かとお尋ねなさいますが、わたくしが昇る時踏んで
昇つた梯子のさんは象牙の板でござりました。さて降りよ
うと存じて下の方を見ますれば、梯子のさんが燒鐵になつ

てをりまする。

母。その様な梯子の上なら落ちるより外はあるまい。

伯。仰せの通りでござりまする。落ちて身は碎けねばなりま
すまい。

母。ぢやが、その不思議な梯子は何の譬ぢや。

伯。(溜息を吐く。)わたくしは昔に戻つて、昔の通りにこの
世を暮して行く事が出來さうにござりませぬ。下の方を見
ますればどうも降りて行つて生きてゐられさうでござりま
せぬ。

母。(暫く黙す。)ほんにお前は今日に限つて不思議な事を言
うてをるなう。(間。)まあ此方へ來やれ。どのやうな氣に
掛る事があるか知らぬが、わしはたつてそれを聞かうとは
云はぬ。假令氣掛りなことがあつても、神様を便りに致し
て餘り力を落さぬが好い。あれ見やれ、領分の畠の上に朝
日が昇つて照つてゐる。穀物の苗の上には小鳥共が聲を合
せて神と春とを稱へてゐる。この晴々とした景色を見て此と
氣を晴すやうにするが好い。(間。)それとも此方は病氣に
なつたのではないのかや。

伯。成程、母上の仰やる通り、小鳥共は神を稱へ春を稱へて
をりまする。然しわたくしの耳にはその喜の聲が嘲笑ふや
うに聞えてなりませぬ。(間。)どう考へて見ましても、こ
の世に生長らへてゐられようとは思はれませぬ。

母。それは何といふ事ぢや。

伯。いえ。母上、春は來たと申しましたが、誰の目にもその
春が必ず見えるといふものではござりませぬ。中には春が
見えずと思つてゐて、實は本當の春を見た事のないものも
ござりまする。この心持を母上のお分りになるやうに申上
げる事は出來ませぬ。これが人生の秘密でござりませう
か。ほんにわたくしの申す事は、何かこた／＼致してお分
りになりませぬ。あゝ、思へば神の恵みを受けるものは
眞に僅でござりまする。本當の春といふものを身に覺えた
ものでなうては、春の不思議は分りませぬ。その分るも
のでなうては、神の笑聲を聞く事は出來ませぬ。(この時
エルガア夫人の聲高く朗に笑ふ聲、隣の部屋より聞ゆ。伯
は忽ち面色を變じて立上り、手にて胸を押す。)母上、わ
たくしは。

母。倅、其方は何か病氣があるやうな。熱でも致すやうぢ
や。又はこれから熱が出るかも知れぬ。早う醫者を呼んで
見て貰ふが好い。

伯。いえ／＼、わたくしの容體は醫者の力の及ぶところでは
ござりませぬ。まあ、御心配なさらずにゐて下さりませ。
(間。)唯今笑ひましたのは、あれはエルガアの聲ではござ
りませぬか。(間。)ほんに母上、世の中は先程わたくしが
申上げた通りでござりまする。如何にとも致しやうはござ

りませぬ。母上もごふしやう遊ばして下さらねばなりませぬ。

(夫人、さし愉快なる様子にて入来る。)

夫人。旦那様はもうお目覚でござりまするか。

母。依は氣分が勝れぬやうな。

夫人。なに、御氣分がお悪いと仰やりますか。まあ、わたくしにお任せなさいませ。つひわたくしが直して上げる事が出来るかも知れませぬ。一體病氣などといふものは、忌はしい厭なものでござります。病人。まあ、口で言うても厭ではござりませぬか。(夫人は伯の膝に腰掛け、伯に接吻す。)

伯。こりや、エルガア。

(伯は煩悶に堪へざる如く、暫くして喉泣の聲を出す。)

夫人。お、これは又何とした事でござります。英雄のシユタルシユンスキイ伯爵ではござりませぬか。英雄が泣きまするか。大丈夫が何事も無いのに涙を流して宜しいものでござりますか。あの熱い鹽つばい涙なんぞを。(間。)

伯。お、これは又何とした事でござります。英雄のシユタルシユンスキイ伯爵ではござりませぬか。英雄が泣きまするか。大丈夫が何事も無いのに涙を流して宜しいものでござりますか。あの熱い鹽つばい涙なんぞを。(間。)

(母領きて退場す。)

夫人。(立ち上りて伯に向ひて立つ。)

伯。わしはどれだけお前が可哀いのやら分らぬ。

夫人。これが巴里の一番新しい流行ぢやと申す事でござりまする。

伯。(再び夫人を抱く。)

夫人。(少しじれつた氣に。)

伯。(猶抱きある。)

夫人。(強ひて伯の手より身を離す。)

伯。(假令如何なる寶石で拵へた瓶があらうとも、これより貴い瓶はまたあるまい。)

夫人。(侍女ドルトカ、少しおご／＼して入来る。)

伯。(食卓の上に立て、別に小束一つ手に持ちある。)

夫人。(それで良い。花瓶は此處に置きや。)

侍女。(伯の前に跪き、手に接吻す。)

いは男ではござりませぬ。伯は覺えず熱情を以て夫ハの身を抱く。)

伯。お、大分御氣分がお直りになつたやうでござります。さあ、わたくしの體をしっかりと抱遊ばせ。

伯。(様子變りて。)

夫人。水といふものが人を若くするものでござります。若く致して美しく致します。わたくしはたつた今、湖水へ入つて泳いで参りました。旦那様も左様遊ばしませ。湖水の水で心の中の病氣を洗ひ流して御覽なさいませ。

伯。母上。まあ落着いて此處にお出でなさいませ。わたくしはもうさつぱりと快くなつたやうでござります。

母。そちらへ快くなれば、わしの氣も晴々する。然しわしは今から孫の處に行かねばならぬ。あの子は毎朝目が覺めて直ぐわしの顔を見る事になつてゐる。今日も行つて顔を見せてやらねばならぬ。

伯。どうぞ小さいエルガアに、父の代りに接吻をおやりなされて下さりませ。

伯。(蓋の花束を受く。)

伯。好い。立て。

伯。(用人来る。)

夫人。(夫人の耳朶を撮みて引く。)

伯。(夫人に向ひて領き、さて用人と二人残り、暫く座敷の中をあちこち歩み、立ち止り、不機嫌らしく、用人に向ひて) 何でまだ立つてをるのぢや。

伯。それは餘計な心配をして、わしにえらい迷惑を掛けたぞや。

さりませ。

伯。(夫人退場す。)

夫人。(夫人に向ひて領き、さて用人と二人残り、暫く座敷の中をあちこち歩み、立ち止り、不機嫌らしく、用人に向ひて) 何でまだ立つてをるのぢや。

伯。それは餘計な心配をして、わしにえらい迷惑を掛けたぞや。

伯。(夫人退場す。)

夫人。(夫人に向ひて領き、さて用人と二人残り、暫く座敷の中をあちこち歩み、立ち止り、不機嫌らしく、用人に向ひて) 何でまだ立つてをるのぢや。

伯。それは餘計な心配をして、わしにえらい迷惑を掛けたぞや。

伯。(夫人退場す。)

夫人。(夫人に向ひて領き、さて用人と二人残り、暫く座敷の中をあちこち歩み、立ち止り、不機嫌らしく、用人に向ひて) 何でまだ立つてをるのぢや。

伯。それは餘計な心配をして、わしにえらい迷惑を掛けたぞや。

伯。(夫人退場す。)

夫人。(夫人に向ひて領き、さて用人と二人残り、暫く座敷の中をあちこち歩み、立ち止り、不機嫌らしく、用人に向ひて) 何でまだ立つてをるのぢや。

伯。それは餘計な心配をして、わしにえらい迷惑を掛けたぞや。

伯。(夫人退場す。)

用人。どうぞ御存分になされて下さりませ。
伯。ほんにそちには儘に罰するだけの直打がある。そちの爲
にわしは馬鹿のやうに見られるわい。一城の主が下部や女
子供の色事を評いて荒立てゝ好いものか。

用人。いえ、左様な事は勿論遊ばしてはなりません。
伯。何んとさうであらうが。そちが悪い考で致したのでない
事はわしもよう知つてをる。ちやが、これから後あのやう
な馬鹿氣た目になしを逢はしてはならぬぞよ。わしの言ふ
事を確と聞いたか。

用人。儘に承りましてござりまする。(問。)あの今日は燕麥
を蒔きましては如何でござりませう。
伯。そちが宜しいと思ふなら蒔くが好い。

(用人退場。乳母、小キエルガアを抱きて来る。)

伯。さあ、此方へ參れ。
乳母。お母様をお探し申すのでござりまする。

伯。父でも宜しい筈ぢや。(娘を抱き取る。)手に持つてをる
のは何ぢや。

娘。お父、お父。
乳母。お父と仰やりまするのは、お父様と申す事でござりま
する。

伯。乳母は知つてをらう。手に持つてをるのは何ぢや。
乳母。それは奥様のお飾の小さい箱でござりまする。先程から

返しお遊ばせと申しても、お握り遊ばしておいでなさりま
す。

(母登場)

伯。母上御覽なさりませ。エルガアが、このやうな美しい玩
具を持つてをりまする。

母。何處へ行つたかと思つたら、此處に參つてをつたか。
伯。エルガアは好い物を持つてをりまする。さあ抱いておや
りなさりませ。(娘を母の手に渡す。)

母。まあ、祝言のときの飾のやうな物を持つてをる。
伯。(一寸機嫌を損じた様子。)いえ、この娘は大きうなり
まして男には遣はしたうござりませぬ。

(娘、握りぬたる小箱を取落す。)

母。乳母、あれを拾うてやりや。

伯。(晴々々)祝言のときの飾が壊れた。(小箱を拾ひ上げ、
中を覗き、指にて探りぬたるが忽ち何物を見出して引き
出す。)これは何ぢや。

母。何か中に入れてあつたかや。

伯。(面色真蒼になる。)いえ、何もござりませぬ。
母。そちは又どうかしやつたか。

(母、孫を乳母に渡す。乳母抱きて去らんぞす。
伯。乳母待て。其處でその子をこちらへ向けて抱いて立つて
をれ。

(伯は掌に隠し持ちたる小キ肖像と娘の顔を見比べる。)

母。伴は何を致すのぢや。
伯。母上、まあこちらにお出なされてこれを御覽なさりま
せ。(問。)母上はこの肖像を御承知でござりませう。

母。いや、わしは知らぬ。
伯。この肖像の男が誰ぢやといふ事がお分りになりませぬ
か。

母。いや、どうも見知らぬ人のやうな。
伯。まあ、見比べて御覽なさりませ。

母。何と見比べるのぢや。
伯。小キエルガアの眼と、この男の眼とを比べて御覽なさり
ませ。そしてこの眉毛を、この髪の毛を、この顔を、この
口を。この口を。あなたはこの男を御存じではござりませ
ぬか。

母。いや知らぬ男のやうな。待つてくりや。成程、おゝ、殊
に寄つたら、こりやオギンスキイの肖像ではないかや。

伯。(容顔全く變じ、口も吃る。)勿論。(問。)え、何の。
あゝ。御心配下さりまするな。もう氣分は直りました。

勿論この肖像はオギンスキイでござりまする。今こそわたく
くしも、あの卑怯者のオギンスキイをよう見抜いてしまひ
ました。はゝ、穢はしい瘦犬めが。あ、あ、苦しい。息が

塞る。醫者を、醫者を。

母。まあ、
伯。(強ひて自ら押ふる様子。)まあ、母上、此處へお掛けな
さりませ。そしてどうぞわたくしに話してお聞かせなされて
下さりませ。わたくしよりも母上がよう御存じの筈でござ
りまする。あのラシエックの代官をばあなたの方がよう知
つてお出でなさいました。オギンスキイとはどういふ間柄
でござりましたか。そして妻は。妻が何で又このオギンス
キイの肖像を持つてをるのでござりませう。

母。まあ、氣を落着けてくりや。孫を抱いて乳母があそこに
見てをるぞよ。

伯。はゝ。あの子がわたくしに何の縁がござりませう。さつ
さと何處ぞへ連れて行け。(乳母、娘を抱きて退場す。)母
上、どうぞわたくしの體を何處ぞへ縛り付けて下さりま
せ。それでないわたくしはあの娘を殺してしまふかも知
れませぬ。

母。そちはまあ、どうぞ致したのぢや。
伯。(冷酷なる調子にて顫ひつゝ)ほんにわたくしは又熱が
出ましたと見えまする。併しもう餘程よろしうなりまし
た。どうぞ、母上、もう少し此處にお出でなされて下さり
ませ。わたくしはこの胸の中の闇をどうか致して晴らさ
ねばなりません。どうぞもう少しオギンスキイが事を言う

て聞せて下さりませ。
母。何を話せば好いのやら。そちも大抵知つてをる事ではないか。オギンスキイは代官の内に一しよに住んでゐた。そこで婦女も一しよに育てられたのぢや。その外の事はわしも知らぬ。

伯。(立上りて鈴の繩を引く。)その他の事は御存じはござりませぬか。(間)わたくしはそれだけでは満足が出来ませぬ。かうなる上は何もかも聞き糺さねばなりません。(用人登場)わしは今からワルシヤワへ行かねばならぬ。先程申付けた通りぢや。(用人退場。母に)母上。御機嫌よろしう。

(伯は早足にて退場。母は首を振りつゝ、伯の跡を見送る。この時夫人は散歩に出る支度にて登場す)

夫人。さあ、わたくしは支度が出来ました。(間)旦那様はどちらへお出なさりました。

母。ワルシヤワへ行くと云うて今出て行つたばかりぢや。夫人。(訝し氣に)何で又。

(道具變る。)

第五場

城内の別の座敷。夕。老夫人マリイナ燈火の許にて縫取をなほしめる。エルガア夫人緩かに間の中を歩みゆる。

夫人。もうお立になつてから三日になるのに、ワルシヤワで何をしてお出遊ばすやら、わたくしには分りませぬ。

母。それはわしにも分らぬわいの。

夫人。それに何の爲めに用人をお連なりましたやら。

母。用人のをらぬにもほんに困る。百姓達が參つて仕事の事を種々問ふのに何と返辭をしてよいやら、わし共には分らぬゆゑ。

夫人。それに何といふ退屈な事でもござりませう。お母様はわたくしの退屈になる癖は御承知でござりませう。わたくしが思ひまするに、退屈といふものは大い厭な事で、眠むさうな目を致して、口から唾を出してをるやうに存じまする。

母。わしなどは退屈といふ事は知らぬわいの。

夫人。それが又わたくしには分りませぬ。

母。それは、婦女はわしなぞのやうな暮しを致した事がないからぢや。わしが父親は非道い殿しい方であつた。それでわしは小さい時からせねばならぬ事をした計りで、したいと思ふ事をした事はつひぞない。夜具に詰める鳥の羽が風に飛んでも、取つて来いと言はれ、ば三重の垣をも越さねばならぬ。さういふわけでいつとも知らぬ間に日は暮れてしまつた。婦女なぞは内につてしたいと思ふ事が出来たのぢや。そして何をしたいとも思はぬ事が多いので、退屈と

いふものが出て来るのぢや。

夫人。それでも人間といふものが、何で又何か致さうと思はねばならぬのでござりませう。

母。人間はせねばならぬ事をすべきものぢや。

夫人。それがどうもわたくしには分りませぬ。わたくしは度々高い山へ登つた事がござりまする。何に誘はれて登つたやら。空に近う、日に近う、神に近うとも思つたのでござりませう。然し登らうと思ひませなんだら、わたくしはいつまでも山の下にゐた事でもござりませう。山なぞへは登らねばならぬから登るのではござりませぬ。退屈といふものがわたくしを鞭打つたばかりでござりまする。

母。ラシエツク家の人は、わし共とは生れ付が違ふ。氣が輕うて、我慢が強うて、どのやうな危い事でも構はずにするといふ氣性ぢや。(間)それで何もないやうになつてしまつたのぢや。

夫人。そして又取り返しました。

母。それは婦女位なものであらう。

夫人。勿論取り返したのはわたくしでござりまする。

母。そして又それを無くしはしやるまいか。

夫人。それは何とも申されませぬ。登つたり下つたり致すので、又迂回つて參りまするので、道も面白うござりまする。平な土地に眞直な一本路がついてをりましたら歩かれ

たものではござりませぬ。退屈といふ事は鶴の體のやうに捻ぢ向く事が出来ませぬ。又坂を登つたり下つたり致す事も出来兼ねます。

母。(心配氣に縫取の棒より顔を上ぐ)婦女なぞは靜かに樂しく暮さうといふ考はないのかや。

夫人。さういふ心持は眞に少なうござりまする。

母。婦女の言ふやうな世の渡り方は絶えず危険を冒してゐるといふものぢや。

夫人。え、それが面白いのでござりまする。それでこそ生甲斐がござりまする。走つて歩く傍を死が並んで歩きました、その姿が目に見えるのでござりまする。さう致して次第に深く生活の眞中へ墮け込むのでござりまする。寒うなつたり暑うなつたり、身の毛が竦立たり、嬉しかつたり致すのでござりまする。

母。そんな事を言ふものではない。死といふものゝ事をそのやうに言ふ人が何處にありませう。

夫人。死といふものは、あなたなぞの思召すより餘程わたくしとは心易うなつてをりまする。あなたなぞは、死といふと直ぐに心持を悪くなさりまするが、わたくしはそれほどには思ひませぬ。ワルシヤワの木賃宿のやうな内でお父様が御病氣で死にかゝつてお出でなされた時、食べるものも無くなり、お金が無くなつてしまつて、わたくしは死を呼

び寄せる事に致しました。その時から死といふものゝ顔を感じてをります。お母様。その時死がわたくしに何を教へましたかあてゝ御覽なさりませ。死はわたくしに笑ふ事を教へました。世の中にありとあらゆる人の眞面目に思ふ事を笑うてしまふやうに死がわたくしを教育いたしました。間。然しそんな事はどうでも宜しうござります。今はまだ生きてゐて結構でござります。間。兎に角、伯爵が早うお歸りになれば好い。

母。チモスカが参つたさうな。

（用人入り来る。）
用人。（老夫人に。）御座居様、御機嫌よろしう。

母。旦那様はどうかされたのぢや。

用人。わたくしに先へ歸つて、あなた様に申上げて置くやうにと云ふ事でもござりました。

母。それけ又何の用事であるのぢや。大相お前は息を切らしてゐるやうな。まあ落着いて話すが好い。

用人。殿様と御一しよにお客様がお出になるのでござります。そのお客様は咽もお乾きなさらう。お腹も空いてお出にならう。それゆゑ食卓の用意を致してお置なさるやうにあなた様に申上げいと仰りました。

母。まあ、何の事かと思つて吃驚した。そのやうな事ならば仕合せぢや。

夫人。お客とは誰の事でござりませう。

母。それは其方に聞いて見たい位ぢや。倅はそのやうな事を前以てわたしに話す人ではない。誰にもせよ機嫌の好い人であれば、些と来て呉れるが好い。さう致したらわたし共も氣を晴す事であらう。

（用人退場。）

母。馬車が来たやうな。倅がお客を連れて参つたのであらう。どうも倅の足音のやうな。

夫人。（顔色變る。）あの、あなた様には伯爵ぢやといふ事が足音でお分りになりますか。

母。そのやうな事よりお前はお出迎ひを致すが好い。わたしは此處に待つてゐるから。

夫人。いえ、お母様、あなたがお出なさりませ。

（老夫人は伯爵を出迎へに立つ。反對の側より侍女ドルトカ忙がし氣に駆け来る。）

侍女。（さも嬉しうに。）奥様、どなたがお出なされたか、あてゝ御覽なさりませ。只今殿様と御一しよに梯子をお上りなさるのをどなたぢやと思召します。

夫人。まあ静にしや。わたしは知つてゐるわいの。

伯。（まだ梯子を昇る處にて聲のみ聞ゆ。）エルガア、其處にお出か。

夫人。（侍女に。）早うあちらへお出。お前の此處にゐるのを

殿様が御覽なさると悪い。

（侍女退場。伯爵登場。）

伯。（神経高ぶり、酒氣を帯びて様子變りなる。）どうぢや、奥。

夫人。まあ、大相遅いお歸りでござります。

伯。お、思つたより遅うなつたが、小言をいふまいぞや。

その代りには好いお土産を持つて来た。

夫人。お土産とは何でござります。

伯。何かあてゝ見やれ。

夫人。この間お願ひ申した絹の下着でござりませうか。

伯。それは言ふまでもない事ぢや。一番直の高いのを撰出して買つて来た。下の馬車の中にある。ぢやが、それ計りではない。もう一度あてゝ見やれ。

夫人。その外には、近頃何も申上げた事はござりませぬ。どうも何やら分りませぬ。

伯。オギンスキイに來て買つたのぢや。

夫人。（伯の詞を信ぜざる如く粧ひ笑ひ、伯の頬を擦る。）馬鹿氣た事を仰やります。

伯。（様子を見つ、）嬉しうはないのか。

夫人。何を嬉しがれば宜しいのでござります。オギンスキイが來られるのを嬉しがれといふのでござりまするか。

伯。さうぢや、オギンスキイの事ぢや。

夫人。從弟の事なら、いつかも申上げたではござりませぬか。もし御笑談でなうて、從弟が本當に参りました上は致し方がござりませぬ。参れば参つても宜しうござります。わたくしが何と致しませう。

伯。おい、オギンスキイ、此方へ入られるが好い。さう遠慮して隅の方に立つてゐる事はない。

（オギンスキイ登場。）

從弟。いつわたくしが隅の方に立つてなんぞをりましたか。あなたは御笑談ばかり仰やります。間。これは奥様御機嫌よろしう。

伯。許して呉れられない。悪い事をいうた。わしはさういふ心持でいうたのではない。この城の建物は大部分時代が舊い。殊にその梯子段の上の壁などはいつも薄濡りに濡つてをって、鹹なぞが生えてをる。それゆゑ其處に立つてをられたら、お前のその立派な新しい上着が汚れうかと思つたのぢや。間。まあ此處へ來て腰でも掛けられるが好い。これからはわしの友達で、わしのお客ぢや。夫人に。奥。どうぢや。わしが出たあとで寂しうはなかつたか。わしの歸るのが待遠ではなかつたか。從兄に。かういふわけぢや。妻はわしを手放すのが大嫌ひぢや。丁度子供が小鳥の足に糸を付けて置いて、ちよいと飛ばして直ぐに引き戻すやうに、わしが半道も先の田舎を見廻りに出ると直ぐに寂

しがつて待ち焦れるのぢや。(夫人に。)エルガア、その通りであらうかの。

夫人。馬鹿な事計り仰やります。

伯。さうかい。わしは馬鹿な事を言ふかい。さうかも知れぬ

てや。なう、オギンスキイ、二人でワルシヤワで大分飲ん

だからなう。その代り心易うなつたから好いではないか。

夫人。成程。大分御機嫌が宜しいやうに見えます。もう今

晩はお酒はお止めなさりませ。

伯。なぜ飲んで悪いのぢや。

夫人。上がると宜しうないのが、わたくしには分つてをりま

する。

伯。(右の手にて夫人の腰を抱き、從弟に。)どうぢや。好い

女子ぢやないか。

夫人。お放しなさりませ。

伯。この口を見て呉れ。可哀らしい口ではないか。丁度乳が

呑みたいといふ赤子の口のやうな。

夫人。お放しなさいと申すでござりませぬか。

伯。本當の赤子の口のやうぢや。まだ乳の氣を離れぬのぢ

や。ぢやが危険な口ぢや。この口の隅の方でびく／＼と引

き吊る處を見て呉れい。まあオオランドと露西亞とはさて

置き、廣い亞細亞大陸の、野も山も町も探して歩いても、

このやうな口はあるまい。このやうな人を迷はせるやうな

口はあるまい。

夫人。お放しなさいといふのに。(從弟に。)どうぞ勘辨し

て下さりませ。(又伯に。)あなたは酔うてお出でなさりま

する。)

(夫人退場)

從弟。あなたは奥さんを非道うお扱ひなさりますな。

伯。御覽の通ぢや。

從弟。もう少し優しうお扱なされては如何でござりませう。

伯。いゝや。鞭で打つてやつても好い筈ぢや。

從弟。ふむ。(問。)何でわしは又此處へ連れて來られたか知

らぬ。(問。)いや。お前様の事は、人の種々噂するのを聞

いてをりました。エルガアが兄弟達も種々話して聞せまし

た。その話で見るとお前様は眞面目な方ぢやといふ事でご

ざりましたが。

伯。さうか。そんならお前の事をわしがどう思うてをるぢや

らうか。一體お前は何ぢや。(問。)お前の事はわしはちつ

とも知らぬのぢや。

從弟。まあお止めなさい。伯爵、一體此處まで跟いて參ら

ねば好かつた。わしが此處へ參つて何をしよう。わしも人

付合の好い方ではない。それをお前様が何のわけで無理に

此處まで引き出して來られたのぢや。これでお暇を致しま

せう。

伯。いや。わしはお前を歸さぬのぢや。

從弟。止めて置いて何となさる。

伯。友達にするのぢや。

從弟。それは偽ぢや。

伯。わしの言ふ事を信せぬとなら致し方がない。(問。)然し

まあ腰でも掛けて、この酒を一杯飲んで貰ひたい。好い酒

ぢや。わしが悪かつた。許して呉れられい。無作法な事を

致したのは悪かつたから此處で謝罪する。まあ一杯飲んで

勘辨して貰はう。

從弟。何も勘辨するのせぬのと云ふやうな筋はござりませ

ぬ。

伯。それで好い。そこで一つ聞きたい事がある。まあ飲みな

がら話して貰はう。お前様は妻を子供の時から知つてをら

れたのぢやの。

從弟。知つてをりました。

伯。幼馴染で一しよに遊んだ事もあるのぢやの。

從弟。一しよに遊んだ事がござりまする。

伯。妻は子供心にお前様を好いてをつたのぢやの。

從弟。左様かも知れませぬ。

伯。お前様も又妻を好いてをつたのぢやの。

從弟。いえ。餘り優しい娘ではなかつたので、格別好でもご

ざりませなんだ。

伯。そんならエルガアが嫌であつたと云はれるのか。

從弟。まあ、嫌ひな方であつたのでござりまする。

伯。美しうはなかつたか。

從弟。いえ、美しいとも思ひませなんだ。

伯。オギンスキイ、お前は嘘突ぢやなう。

(從弟立上る)

伯。まあ、腰を掛けてゐなさい。

從弟。その位伺へば宜しいかと思ひまする。

伯。お前様が何と云はれても、エルガアは美しいのぢや。ど

うか美しいと云ふて貰はう。

從弟。この上何も申したうもござりませぬ。

伯。うむ。お前は殺してやつても好い奴ぢや。(問。)併しお

前がそのやうに嘘を言はぬと、お前は接吻してやつても好

いやうな可哀い男ぢや。さあ、握手しよう。さあ手を出さ

れぬか。

從弟。何の爲に。

伯。わしはお前様を嘘突ぢやと言つた。その段は悪かつた。

許して呉れられい。

從弟。わたくしばかりではない。此方様も同じ事で、どうも

斯うしてをると、御一しよに嘘の突合を致してをるやうで

ござりまする。

伯。それならお前様は、さういふ今、嘘を言うてをられるの

か。

從弟。(冷淡に。)今いうてをる事が嘘ぢやと申したのでござりませぬ。

伯。氣を付けられない。(間。)いや。少しはわしをも氣の毒ぢやと思つて呉れられい。

伯は机の上に頭を押付け溜息を吐く。

從弟。(立ち上り極めて冷酷に。)人に氣の毒に思はれるのが何になりませう。氣の毒に思はれるといふ事は百倍の苦痛でござりまする。其苦痛をわたくしは覚えましてのぢや。もし神が失敗した者を氣の毒と思つて憐れ垂れるといふなら、それは人を救ふ慈悲の神ではござりませぬ。氣の毒に思へなぞとは云はぬものでござりまする。

伯。(氣を取直し、しつかりと。)成程、氣の毒に思つて貰はうとは云ふまい。

(夫人盛装して入来る。)

夫人。(氣輕に。)どうでござりまする。もうお酒が醒めましたか。

伯。うむ。どうやら醒めたらしい。まあ来て一しよに話して呉りやれ。

夫人。宜しうござりまする。食卓のお支度がもう出来ましたから、程なく申上げに參るでござりませう。そのお酒は何のお酒でござりまする。

伯。飲んで見やれ。

夫人。(從弟に。)久しうお目にかゝりませなんだが、如何なされてござりまするか。

伯。(油断なく切込む。)一體いつから會はぬのぢや。

夫人。(從弟に。)いつからであつたか且那樣に言つてお聞かせなさいませ。

從弟。わたくしは日といふものは數へません。夜が明けては日が暮れる。わたくしは唯冷淡に何とも思つてをりませぬ。

夫人。まあ、非道い事でござりますね。小さい時に一しよに遊んだ友達がちつとも懐しうはないのでござりまするか。まだあの遊んだ時の事を覚えておいでなさる筈ではござりませぬか。駈けくらをしてもわたしが勝つ。飛び上つてもわたしが一番高い處へ飛び上る。軍ごつこをすればわたしが俄鬼大将でござりました。どの男の子も一人としてわたしの言ふ事を聞かぬものはござりませなんだ。ほんにあの時、の事を思へば面白うござりました。

從弟。(心持悪き様子。)もうそのやうな話は止めて下さりませ。わたくしは面白うも可笑しうもござりませぬ。

伯。なに、構ふものか。わしも面白うはない。奥がちとら二人前面白がつて呉れれば好いぢや。(間。)わしは妙な

夢を見たからそれを話して聞かせう。美しい女子がをつた。うむ。さうであつた。その女子が眞寐で夜通し踊るのぢや。踊るは踊るは。わしの目の前で踊つて踊つていつまでも止めぬ。わしは見えてゐるのが厭苦かつた。(間。)これからぢや。氣を付けて聞いて呉りやれ。何の上でその女子が踊つたのか。空には月が石灰のやうな白い色に照つてゐる。その石灰の様な氣味の悪い白けた月が廣い廣い、方々に岩のある土地を照してゐる。その岩のある土地は丁度暴れてゐる海の波が俄に氷つて塊つたやうであつた。何にも生えてはをらぬ。木もない。草もない。言つて見ると、山も谷も、人の骨や骸骨で築き上げてあるやうであつた。女子は、その上を踊り廻るのぢや。

夫人。まあ、變な夢ではござりませぬか。もうその話はお止めなさいませ。氣味が悪うござりまする。

從弟。併しその夢のお話はまだ先がありさうでござりまするな。

伯。先があると思ふなら、お前さま後を續けて見られるが好い。

從弟。それは御無理でござりまする。

夫人。旦那様が續けて見いと仰やるのぢや。好いから後を話して御覽なさいませ。

從弟。そんなら言つて見ようか。わたくしも成程骸骨の上を

踊り廻る女子を見ました。好い女子でござりました。

伯。さうぢや。丁度エルガアのやうな好い女子であつた。

從弟。好い女子で、そして裸でござりました。

伯。裸で、その體はエルガアのやうな體であつた。

從弟。中にも不思議なのは、女子の目でござりました。時々空の月をも暗ますやうな光を放ちます。時としてはまた死を、暗をその目から漲らせます。言ふに言はれぬ目でござりました。

伯。丁度エルガアの目のやうであつた。

夫人。もう大抵にしてお止めなさいませ。

從弟。わたくしの夢に見た女子のその美しい目で一目見ますると、山にも谷にも忽ちに草木が茂つて參ります。小川がちよろ／＼流れ出します。白樺の木の花が匂ひ出します。

伯。さうぢや、さうぢや。

從弟。それからどうか致すと、その目が人の心臓に沁み込みます。毒のやうに。

夫人。(徐に身を起して退場しつ。)(お二人のお話を聞いてゐると、寒氣が致して參ります。お休みなさいませ。伯。(オギンスキイ二人跡に残り、重々しく身を起す。)(オギンスキイ、もうこの位で話の方を付けてしまはう。

從弟。うむ。今日でなければ明日ぢや。逃れぬ處ぢや。

伯。わしは今日の事にしようと思ふ。(意味あり氣に。)よろ
休まれい。

從弟。(同じ態度にて。)此方もようお休なさりませい。

伯。こりや。オギンスキイ。そちは明日の日の目は見られぬ
ぞよ。

從弟。(嘲けるやうに。)お互の事ぢや。

伯。左様かも知れぬ(間。)併しそちは見苦しい死態を致すの
ぢやぞよ。

從弟。そんなら此方は見苦しい生態をして永らへてをられる
事であらう。

伯。左様かも知れぬ。(間。)わしは唯の嫌疑計りで其方の體
に手は下さぬ。

從弟。餘計な誓ぢや。

伯。あれが身を確に穢したのか。

從弟。(凱歌を奏する如く。)わし共二人は樂の限を盡したに
違ひござらぬ。

伯。宜しい。(劍を上げて机を三度打つ。)この相圖にて用人
を頭に武器を持ちたる家來等亂れ入る。)爲事に掛れ。

(伯退場。家來共手早くオヤンスキイを縛し引きずり
て退場す。舞臺は暫く空虚になりなる。ひつそりとし
て物音なし。侍女ドルトカ甚しく恐る、様子にて登場
す。)

侍女。奥様。奥様。

(夫人登場)

夫人。ドルトカや。何をそのやうに騒いでをるのぢや。

侍女。まあお目にかゝられて宜しうござりました。

夫人。何事ぢや。

侍女。お庭の奥の望樓に、あれ御覽なさりませ。又燈火が點
きました。

夫人。それだけの事かいの。

侍女。大勢の人が籠燈を點けてお屋敷の中を歩き廻つてをり
ます。

夫人。何をしてをるのぢや。

侍女。皆刃物を持つてをります。

夫人。馬鹿らしい。其方は夢でも見てをるのか。

(舞臺の一方の戸を開きて伯登場す。伯は夫人の顔を
つと見る。伯の顔は眞蒼になりなる。)

夫人。旦那様。何事でござります。

伯。何でもなし。

夫人。左様ならば、明朝伺ふ事に致しませう。お休なさりま
せ。

伯。いや、今宵はお前を寝せる事は出来ん。外套を羽織つて
御苦勞ながら一しよに來て貰はう。

夫人。お見受け申します處が、あなたは跡方もない事にお

迷なされて、どうかなされてお出なさるやうでござります
る。

伯。わしがどうかしてをる。うむ。面白い事を言ふ。(侍女
に。)こりや、ドルトカ、そちはあちらへ參れ。左様いた
して用人に斯う言うて呉りやれ。殿の言付けられた事を致
したかと斯う云うて返事を聞いて來やれ。

(侍女退場)

伯。奥、さあ、一緒に來て貰はう。

夫人。いえ、わたくしは參りませぬ。

伯。何、參らぬといふのか。

夫人。參りませぬ。

伯。來ぬなら來ぬで好い。唯問ひたい事がある。

夫人。あなたはどうかされてお出なさります。何の爲やら
わたくしには分りませぬ。

伯。お前の爲かも知れぬぞよ。

夫人。もし左様ならば、わたくしはお暇を願ひませう。どん
な下様な身になつても斯うしてその日を送るよりは遙にま
しでござります。あなたはどうぞあなたのお心の濟むや
うにしてこの世をお過しなさいませ。

伯。わしに一人でこの世を過せといふのか。そちは此處を出
て行つてわしに何を殘して置くと思ふか。

夫人。何にもわたくしは持つて逃げは致しませぬ。あなたは

わたくしに愛想をお盡したされたのでござります。それ
がよろわたくしに分つてをります。お目障のわたくしゆ
ゑ、出て參るのでござります。

伯。うむ。出て從弟のオギンスキイが處に行くのぢやな。

夫人。まあ、何を仰ります。

伯。オギン。キイが處に行くのであらうが。

夫人。たつてさう仰りまするか。どこへ參らうと、それは
わたくしの勝手でござります。

(夫人立ちて、一間をあちこち歩く。)

伯。もし言はずにしまはれると思ふなら言はぬが好い。ぢや
が其方はわしの處へ來る前にオギンスキイと夫婦の約束を
致してをつたのであらうが。

夫人。さうまで仰ればどうぞわたくしの言ふ事を聞いて下
さりませ。わたくしも、もう辛抱が出来ませぬ。從弟が御
一しよにお酒に酔ってどんな事を申しましたやら。わたくし
と從弟とは幼馴染でござります。謂はゞ子供同士の言う
たりしたり致した事でもござります。あなたもわたくしも
子供ではないものを、何で又過去つた事を言ひ出してわた
くしをお慮めなさります。そのやうな事が止められぬと
仰やるなら、わたくしが出て參るより外はござりませぬ。

伯。そんなら今は從弟が可哀うはないといふのか。それが聞
きたい。

夫人。今も可哀う思ふのなら、何で又わたくしが、あなたの妻になりませう。このお屋敷の様子は初からわたくしに面白かつたわけではござりませぬ。人は誰でも子供の時の世界が面白い世界に思はれるもので致し方がござりませぬ。伯。うむ。面白い樂天地であつたらう。

夫人。それも左様でないとは申しませぬ。併しあなたと夫婦になつた上はもう宜しいではござりませぬか。

伯。そんなら其方はわしを可哀いと思ふのか。

夫人。いえ。唯今は決してあなたを可哀いとは思ひませぬ。そのやうに人を責め苛む人が何で可哀うござりませう。然し初めてあなたにお目にかゝつた頃は、わたくしも幸福ぢやと存じました。わたくしは面白く日を送るのが好きな性分ではござります。それゆゑ今はあなたを可哀いとも存じませぬ。

伯。そんなら来い。

夫人。何方へ参るのでござります。わたくしは参りたりござりませぬ。どちらへかお出になるなら一人でお出なさりませ。どうもあなたは御病氣のやうにお見受申しますから本當なら醫者の處へもお出になるのが宜しうござります。正直を申しますれば、わたくしには心配でござります。御一しよに参るのは恐ろしうござります。伯。そんならたつた一つ聞く事がある。今では從弟を愛して

はをらぬのか。

夫人。いえ、愛してはをりませぬ。

伯。死んでも生きても何とも思はぬなう。

夫人。わたくしの爲に生きてゐる男ではないゆゑ。わたくしの爲に死にも致しますまい。

伯。そんなら来い。

(伯は夫人の手首をむづみ、引きずりて退場す。)

第六場

道具變りて第一場の間となる。但し僧房の中央に圍まれたるにはあらで、猶孤立したる塔の下の一間のまゝなり。奥に寢臺あり。その前に幕を垂れあり。その左右に金鍍金の丈高き燭臺を右左に立てあり。但し燭臺には火を點けあらず。夜。月の光さし込みなる。寢臺の前に用人大刀の拔身を持ち立ちをる。侍女來かゝる。

侍女。まあ何といふ夜であらう。(間)チモスカさん。こゝにお出で、ござりますか。

用人。うむ。何か用かい。

侍女。殿様のお使でござります。殿様のこなたにお言付なされた事を皆致されたかというて問うて来いと申す事ではござりました。

用人。先づぬかりはない積りぢや。行つて殿様に申上げて呉

れい。死んだ狼はもう生きた羊を食ふ氣遣はござりませぬ。と斯う申上げて呉れい。(間)もうお前なぞが此處らにぐづぐづしてをるには及ばぬ。早う行くが好い。

侍女。(顔ひながら)一體どうしたわけではござります。何をしようとしてゐるのでござります。

用人。それは殿様に聞け。

侍女。何故だか知れぬが、お前様の様子を見ると、ぞつと身の毛が立つやうな。

用人。その筈ぢや。少しは蟲が知らせるのかも知れぬ。

侍女。わたしの身の上は何事かあるといふのでござりますか。

用人。何かあるかも知れぬて。

侍女。わたしが何を致したといふのでござりますか。

用人。賣女め。覺えがあらうが。

侍女。チモスカさん。可哀さうだと思つて下さりませ。わたしは何にも存じませぬ。

用人。一體手前達は家の大事な殿様を、あのやうな目に逢はせて、殿様の事を可哀さうだとは思はぬのかい。

侍女。殿様がお可哀さうとは。

用人。それがお前には分らぬか。たつた此間まで殿様は立派なお身の上で、御領分は榮える。お身體も丈夫である。下々をばお恵みなさる。何から何まで申分のないお方であつ

た。それがどうお成なされた。少しの間にお年が寄る。お庫の中は空になる。重なる遺恨を晴さうと寢臺を合せておいでになる。これが誰の爲ぢやと思ふのか。

侍女。そしてそれをわたくしの科ぢやと云ふのでござんすか。

用人。勿論、お前ばかりの科ではない。お前の奉公するラシエツク家の奴輩がした事ぢや。ほんにあの一家の者がなかつたら、御當家にこのやうな禍は起るまい。思へば思ふほど憎い奴輩ぢやわい。

侍女。ラシエツク家のなざる事が何でわたしの身の上に掛かるといふのでござります。奥様にこそ御奉公いたしますが、その外の方々のなざる事は、わたしの知つた事ではござんせぬ。

用人。まだ奥様といひをるか。あれは奥様ではないわ。お前と同じ賣女ぢやぞ。

侍女。まあ途方もない事をいふ人ぢや。もしそのやうな告口でもしたものがあつたら、それはそのものが嘘突ぢや。殿様やお前さんが欺されたのぢや。

用人。何もかも皆ばれてをるのぢや。あれはもう奥様では無い。悪魔ぢや。賣女ぢや。ワルシヤワの町で物乞をしてをつたのを、殿様が拾ひ上げてお出になつたのがお家の不運ぢや。謂はゞ悪い毒蟲を知らずに畜うてお置なされたのぢ

や。御隠居様とこのわしとは遠から気が付いてをつたけれど、どうもしやうがなかつたのぢや。贅澤の限を盡して殿様のお物入がどのやうに驚まうと何とも思ひをらぬ。その上兄弟の奴輩まで取られるだけ取つて行く。一家揃うて殿様のお身体に吸ひ付いて血を吸うてしまふのぢや。さつさと逃げて行くが好い。ぐづ／＼すると命がないぞよ。

(侍女退場。伯戸口に立ち現はる。)

伯。(後を振向きて。) 何格別な事ではない。まあ此處まで上つてお出。成程お前のいふ通り詰らぬ事ではあるけれど、わしが頼むからどうぞ一しよに來て貰はう。

夫人。(姿は見えず、聲のみ戸の外より聞ゆ。) もうこれから先へは参りませぬ。

伯。これから先へ來ぬというたとして歸るわけにはいかぬのぢや。望樓の周には武器を持った家來共が警戒線を張つてをる。一人で跡へ歸つて行くとお前の一命が危いのぢや。わしに跟いて來るのには何の危い事もない。それともお前は恐いのか。

(夫人外套を身に纏ひ、戸口より入る。)

夫人。(強情に。) いえ、恐がるわけではござりませぬ。

伯。それで好い。中へ入れば温いのぢや。望樓の外は寒いではないか。今宵は殊に凍が強い。お前と此處まで歩いて來た庭の上には眞白に夜の霜が置いてをつた。お前はこの道

を夜中に歩いた事はないかや。

夫人。(用人に。) お前は誰ぢや。(伯に。) あそこに立つてをるのは何者でござりまする。

伯。まあ、此方へ來るが好い。わしが外套を脱がせてやる。立つてをるのは用人のチモスカ爺ぢや。まあ、落着いて此處へ腰でも掛けるが好い。(間。ほんにこの部屋は陰氣な部屋ぢや。初めて此處へ入るものは好い心持は致すまい。昔建てた時分から妖怪でも住んでゐたかと思はれるやうな處ぢや。お前はまた一遍も此處へ登つて來た事はないのかや。)

夫人。わたしが此處へ登つた事のあるのぢや、且那樣も御承知の筈ではござりませぬか。なぜ改めてお問ひなさるのでござりまする。

伯。わしはそれを知らなんだのぢや。この氣味の悪い部屋にそちは何遍登つて來た。

夫人。(強情に。) 度々登つて参りました。

伯。あの垂絹の後に何があるか知つてをるか。

夫人。度々参りましたゆゑ、垂絹の奥にあるものは、わたしも知つてをりまする。

伯。知つてをるならばつきりと言うて貰はう。わしは仔細があつて問ふのぢや。確と返事が聞きたいのぢや。(間。) あの垂絹の奥にあるのは寢床であらうかの。

夫人。それが何と致しました。

伯。そればかりではない。お前はこの頃下人部屋の隅々や、城の周の村々で、この望樓の寢床の事を噂をするのを知つてをるか。

夫人。そのやうな事は存じませぬ。又承らうとも存じませぬ。もう澤山でござりまする。わたくしは歸りませう。

伯。先程も言つた通り一人で此處を出て行く一命が危いぞよ。まあ落着いてをるが好い。世間で話す昔噺はチモスカ爺が知つてをる。お前に話して聞かせるであらう。

用人。(巻物を取り出し、聲高く徐に讀み上ぐ。) 昔、伯爵何某とて心様まめやかに、家富榮えたる人ありて、老たる母と共に安らかに世を送りたりしが、或時ふと一人の女子に懸想し。

伯。待て、わしの言付けた事は皆してしまつたか。

用人。仰せの通り一々仕りました。

伯。何にも爲残した事はないかの。

用人。残らず致してござりまする。

伯。好い。後を讀め。

用人。その女子を妻にせしに、そは女子にはあらずして數多の蛇の集くなる土の穴にてありければ、心様素直なりし伯爵を欺きて、家の耻辱を醸したり。伯。その惡事は何處で致したのぢや。

用人。(寢床の方を指す。) あの處で致しました。

伯。あの寢床でか。

用人。左様でござりまする。

夫人。まあ。此方達は氣が違うてをるさうな。人殺し。人殺し。

(夫人は恐れ慄き身を顛はせて、一間の隅に立ち、壁に身を付けぬる。)

伯。(徐に。) いや。奥。恐がる事はない。お前をどうもするのではないわ。(用人に。) 蠟燭を點けい。

用人。はつ、只今。

(左右の燭臺に火を點す。)

夫人。(物狂はしく燭臺の火を見て。) ドルトカは何處にをる。オギンスキイ様わたくしは夢に魔はれてをりまする。

大嫌な夢でござりまする。ドルトカや。早うわたしを起して呉れい。あの黒い垂絹が厭ぢや。何故あれに氣が付かなんだやら。この蠟燭の火はこれまでも度々夢に見た。何故早う起して呉れぬ。この夢はもう見たら無い。

伯。奥。氣を落着けるが好い。お前をどうも致さうとは言はぬ。その上お前は夢を見てをるのではない。これは皆現ぢや。併しどうぞ嘘を言はずに正直に返事をして貰ひたい。わしも一所懸命に問ふのぢやから、正直に返事がして欲しい。お前の體は汚れてをる。それは取返しのかかぬ事ぢ

や。ちやが、たつた一言そのオギンスキイを最早愛しては
るぬのなら、それをわしに聞かせて呉れい。
夫人。(恐怖の爲に聲も絶えぬに。)先程も申上げた通り、
唯今ではオギンスキイを愛してなどはをりませぬ。
伯。それが眞なら、わしは其方を汚れたものとは思はぬぞ
よ。こちへ参れ。

(この時、伯、用人に相圖す。用人は燭臺の火を點け
終りて寢床の前の垂絹を開く。床の上にはオギンスキイ
の絞め殺されたる死骸横たはりをる。夫人は伯の詞を聞
き、伯に寄添はんとして忽ちこの死骸を見、全身痲痺し
たる如くになり、死骸の爲に引寄せらる、如く苦しき呻
吟聲を出して踊躍きつ、死骸の上に伏し重なる。伯も
用人も稍暫く詞なく、この様子を眺めぬる。)

伯。(苦痛の聲にて。)奥。エルガア。(夫人答へず。伯は一
歩進みて聲優しく。)エルガア。
夫人。(振向く。面には忿怒の色現はれ、恰も狼の母のその
子を守護するが如き態度にて。)この死骸に障つて貰ひま
すまい。

伯。(省むる如く優しく。)エルガア。
夫人。(立ち上り、甚しく憎み厭ふ様子にて伯に向ふ。)仇讎
ちや。傍に寄つて下さりますな。

(一間暗くなる。第一場にて聞きし僧等の合唱の聲聞

ゆ。暫くして、窓ほの白くなる。窓より旭亦く差し入る
と共に、第一場にて寢床に寝れし騎士の姿見ゆ。一間の
中には、何物もあらず。寢床の前の黒き垂絹は開きあ
り、外より戸を叩く音す。)

騎士。誰ちや。はいつて参れ。
家来。(入り来る。)旦那様、もうお立になつても宜しい時刻
でござりまする。

騎士。ベエテルか。よう来て呉れた。早う馬に乗つて出て行
きたい。晴やかな生々した世の中へ出て行きたい。
家来。朝の御膳も上らずにお立ちなさるのでござりまする
か。坊様達は朝のお勤の最中でござりまする。

騎士。直ぐに立たう。坊様達にまた顔を合せたうない。(間。)
其坊様の一人にはそちが寝た跡で昨夕逢うた。早う馬に乗
つて外へ出たい。ほんに氣味の悪い夢を夜通し見た。この
お寺に寝た一夜はわしには生涯忘れられまい。

(幕)

債 鬼

(ストリンドベルク)

湯治場のホテルの廣間。奥にエランダ(外に向ひて造り
出したる家の部分)に出づる戸あり。エランダの外の見
色見ゆ。右手に寄せ卓あり。色々の新聞紙を載せあり。
卓の右に長椅子。左に常の椅子一つ。舞臺の右手に隣の
部屋に通ずる戸。畫工アドルフ、教員グスタフの二人、
卓の右に立ちぬる。

畫工。(小さき彫刻臺の上に造りかけある蠟人形をいぢりぬ
る。傍らに兩方の脇の下に當てて突く丁字杖といふもの二
本立てかけあり。そして何もかも皆君のお蔭なのだ。

教員。(シガアをふかす。)馬鹿をいひ給へ。

畫工。いや。笑談ではないよ。妻が立つてから二三日の間と
いふものは、僕はほんやりして長椅子の上に寝ころんだき
りで、馬鹿らしい程戀しく思つてみたのだ。言つて見れば
妻は僕のこの二本の杖を持つて行つてしまつたやうなもの
で、僕は一足も一人で歩き出す氣になれなかつたのだ。そ
んな風で夜も晝もとうとうしてゐたが、次第に目が覺める
やうに今まで熱に浮されてゐた頭が元へ戻つて來た。昔思

つた事を思ひ出す。何かやつて見ようといふ心持も出て來
る。昏んでゐた目が又物を大膽に眞直に見るやうになつて
來る。そこへ君が來たのだ。

教員。さうさ。僕の君に會つた時は君の様子が好くはなかつ
たよ。それに何しろ杖を二本突いてゐるといふわけだから
ねえ。だけれど僕がゐたので君が直つたのだなんぞと言ふ
のは遠つてゐるよ。丁度君が落付いて男と交際してゐれば
好くなる處へ僕が來合はせたのだ。

畫工。それは君のいふ通りに違ひない。僕は随分大勢の男の
友達と附合つたものだ。さて妻を持つて見ると、この撰り
ぬいた友達が一人あれば後は入らないものだと思つてしま
つた。それから少し経つて僕は新しい人と知合になつて來
た。さうすると妻が嫉妬を始めた。妻は何んでも僕を一人
で占領してゐるよと思ふのだ。それはまだ好い。新しく出
來た僕の友達をも妻は占領しようとするのだ。そこで僕は
一人ぼつちになつて、今度は僕の方で嫉妬をしなければ、
ならないやうになつたのだ。僕は焼餅焼になつてしまつた

のだ。

教員。うむ。一體君は焼餅饅になる素質を有してゐる。
畫工。僕は妻を失つて了ひはしまいかと心配するやうになつた。そしてどうにかしてさうならないやうに豫防しようといふ氣になつた。君、變だらう。その癖僕は妻が友達の内誰かと通じるだらうなと思つたのではないのだ。
教員。さう。大抵亭主といふものは、そんな事は思はないものだよ。

畫工。實に變だよ。僕の心配はどうかして、友達が妻の意志を左右するやうになつて、そして間接に僕を左右するやうな事が出来て來はしまいかと思ふやうになつたのだ。さう思ふと何んだかゝるても立てもゐられないやうな心持がして來た。

教員。うむ。さうして見ると君と細君とは萬事に付けて意見が合はなかつたのだね。

畫工。さうだよ。こゝまで話した序だから一層の事何もかも話すから、聞いて呉れ給へ。(問)妻は獨立した考へを持つてゐる性だよ。(問)君、なぜ笑ふのだい。

教員。まあ。後を話し給へ。君の細君は獨立した考へを持つてゐる。そこで。

畫工。そこで僕のいふ事がどうも耳に這入らないのだ。教員。その癖君でない人のいふ事が耳に這入るといふのだから。

うね。

畫工。(少し間を置く)さうだて。(問)何んだか僕のいふ事は筋が間違つてゐるからいけないといふのではなくつて、僕が言ふからいけないといふやうに思はれたのだ。なぜといふのに、どうかすると僕がずつと前に言つた事を、妻が自分の言出した事のやうに主張する事がある。それから何か僕の言つた事をその儘友達に話すと、妻が同意するのだ。まあ、誰のいふ事でも、僕のいふ事でさへなければ同意するといふ風なのだ。

教員。それでは夫婦仲が悪いといふわけかね。
畫工。だけれど、僕は幸福だとは思つてゐるのだ。何んにしてあれをと思つた女を妻にしたので、又あれより外に妻にしたら好からうと思ふやうな女はないのだからね。

教員。そして君は一度も離婚して自由な體になつたら好からうと思つた事はないかね。

畫工。さうさね。はつきりさう思つた事はつひぞないよ。だけれど若し一人身になつたら落付くだらう。樂になるだらう。といふ様な心持のした事は随分あるよ。そこでどうかいふわけで妻がちよいと留守になる。さうすると馬鹿に戀しくて堪らないのだ。何んだか手か足かを持つて行かれたやうなのだ。馬鹿らしいけれど、あれは別な人間でなくつて、何んだか僕の一部分ではないかと思ふやうなのだ。僕

の臟腑か何かで、それが無くなつてしまふと僕のこの世に生きてゐるよと思ふ意志、生きてゐる價值のあるやうに僕を動かしてゐる原動力を持つて行かれたやうになつてしまふのだ。解剖學でいふ、生活の結節といふやうなものを僕は、妻の體の中に預けてしまつてゐるやうな心持がするのだ。

教員。それはさういふ風になる因縁があるのかも知れないよ。

畫工。どうしてこんな風になつたのか知らん。妻は獨立してゐる人間で、自分だけの考へを持つてゐるのだらう。それに僕が出會つたのだ。その時は僕は何んでもないのだ。謂はゞ妻が藝術家のひよつこであつた僕を育て、呉れたのだ。

教員。それでもしまひには君が細君の思想を發展させて細君の方を育てるやうにしたのだらうが。

畫工。いや。さうはいかない。妻の發展は何んだか行き留りになつたといふやうな形なのだ。そこで僕がそれを奨励する、後から押すといふやうな事があつただけだ。

教員。さうさ。細君の畫くものは、あの處女作以來好くはない。退歩したといつては當らないか知らないが、何しろ進歩はしない。變だよ。併し初めのは材料が好かつたんだからねえ。(問)何んでも主人公は先の御亭主ださう

だ。君はその男を知らないのかい。何んでも馬鹿な奴だといふではないか。

畫工。僕は一遍も會つた事はないよ。なぜといふのに丁度僕が妻と心易くなつた時は、妻の先の亭主は六ヶ月間旅行をしてゐたのだから、何んでも妻の書いてゐる處で見ると珍らしく馬鹿な男であつたと見えるよ。(問)妻の書いたのは寫生に相違ないからね。

教員。それは僕もさうだらうと思ふ。(問)併し何んだつて、あんな男を亭主に持つたのだらう。

畫工。それは知らずに持つたのだらうよ。人物といふものは、後からでなくては知れないものだといふではないか。

教員。それだから後から結婚するが好いかも知れない。(問)兎に角、先の亭主といふ奴は馬鹿な癖に壓制をしたに違ひない。

畫工。どうして。

教員。それは亭主といふものは、皆壓制をするものだからねえ。(談話の一步を進むる調子)君だつて壓制家だ。

畫工。僕が。僕は妻に勝手に出這入りをさせてゐるではないか。
教員。あたりまへさ。そんなら壓制をするといへば、部屋へ入れて鏡でも掛けて置くといふ事になるのかね。夜なんぞ歸つて來ないのは、君は平氣かい。

畫工。さうは行かないよ。
教員。見給へ。(調子を變ふ。)正直に言へばそんな風だと君は馬鹿氣て見えるのだ。

畫工。なぜ。自分の妻に信用を置いてみると馬鹿氣て見えるかねえ。

教員。さうだよ。君はたしかにその爲に馬鹿氣て見えるのだ。

畫工。(癡癡的に。)さうだらうか。君、さう聞けば、僕はほんとか決心をしなければならぬ。

教員。そんなに激してはいけぬよ。又發作が来るからね。

畫工。それでも僕が夜出て歸らなくても妻は馬鹿氣て見えな

いで、妻が夜出て歸らないと僕が馬鹿氣て見えるといふのはどういふわけかね。

教員。どういふわけも何もあるものか。兎に角事實がさうなのだ。君がなぜさうだらうなんぞと氣樂に考へてゐるうちに飛んだ過ちが出来るよ。

畫工。どんな過ちが。

教員。一體女といふものは、壓制家の亭主をでも、亭主を持つのは自分の自由を得ようとして持つのだ。亭主といふ看板があれば何でも出来るのだからね。

畫工。さうさ。

畫工。僕が。
教員。君も亭主である以上は。
(畫工ぼんやりして何か考へてゐる。)
さうではないか、君。
畫工。(不安の様子。)さうさねえ。(間。妙なもので長い間女と一しよになつてゐて、その女がどんなものか、その女と自分との關係はどんな風だか、少しも考へずにて、或時ふいと考へ初めると、考へて見ねばならぬやうになるから妙だね。(間。君は僕の友人だ。今まで男の友達で君のやうに親しくなつたのはない。この八日の間に君は僕に生きて世に立つて行く勇氣を取返へさせて呉れた。君の磁石力が僕の體へ傳はつたやうな心持がする。君が時計師で、僕の頭の中のからくりを直してせんまいを巻いて呉れたやうな心持がする。何んでも君のお蔭で僕は物をはつきりいふやうになつたやうだ。少くも僕が又昔の時のやうな聲で物を言ふやうになつたのは事實に相違ないよ。)
教員。僕にもさう見える。君はどうしてさうなつたと思ふんだい。
畫工。さうさねえ。いつも女とばかり話をしてゐると細い聲で物を言ふやうになるかも知れん。兎に角妻はいつでもそんなに吐鳴らなくてもいゝと言つた。
教員。さうだらう。さう言はれて段々聲を細くして尻に敷か

れてしまふのだ。

畫工。そんな詞を遣ひ給ふな。(考へて見る様子。)實はそれよりもつとひどい目に逢つてゐるのかも知れない。併しその事はまあ今言はずに置いて呉れ給へ。(間。)何を言はうと思つたのだづけ。さうだ。君がここへやつて来て、藝術といふものに關して僕の目を明けて呉れたのだ。實は餘程前から繪畫が氣に入らなくなつてゐた。どうも僕が表現しようと思ふ事を正しく表現するには、繪畫は不適當だといふやうな感じがあつた。處へ君がやつて来て解釋を與へて呉れた。繪畫は所詮現代の藝術家の欲望を充すには足りないといふわけが、君の議論で分つた。僕は今まで盲であつたのが、急に目が見えるやうになつたと同じで、もうこれからは、色彩をもつて製作をして見ようといふ氣はなくなつたのだ。

教員。そこで君はもう決して繪を描かないといふ事が確實かね。又繪を描いて見たいといふ病氣が再發しはしないかね。

畫工。いや。もう決してその氣にはなれない。(間。)僕は試して見たよ。君がああ議論をした晩に、僕は寐てから繰返して考へて見た。君の論點を一々丁寧にあたつて見た。さてその晩はとうとう寐ないで、翌朝になつて、頭がはつきりして來た處で、僕は稻妻に射られたやうに若しや君の言

つた事が違つてゐはしまいか。僕にはまだ繪を描いて見るといふ氣がありはしないかと思つた。僕は飛び起きてパレットと筆を出して描いて見ようとした。處が駄目だ。今まで描いてゐた繪がまるで、繪の具をぬすくつただけのものにしか見えない。僕はどうして今までこの中にカンパスと繪の具との外に何物かがあるといふ事を信ずる事が出来たのだらう。どうして自分でそんな事を信じて人にそれを同じやうに信じて貰はうと思ふ事が出来たんだらう。僕の目の前に立ち籠めてゐた霧が晴れた。僕はもう繪といふものを描く事は出来ない。丁度大人になつたものが、もう一遍子供になる事が出来ないと同じわけだ。
教員。うむ。そこで君にも時代が實物を要求する。手につかまれるやうな物を要求する。藝術の形式は彫刻でなくてはならない。三方に廣がり有してゐるものでなくてはならない。物體でなくてはならない。といふ事が分つたのだね。
畫工。(ふたしかに。)さう。三方に廣がり有する。うむ。
一言でいへば物體でなくてはならないのだ。
教員。そこで君は彫刻家になつてしまつた。さうではない。君は素から彫刻家であつたのを迷つて悟らずにゐたのだ。丁度道に迷つた人が本當の道を人に教へられたやうなものだ。(間。)どうだね。興味を持つて爲事をする事が出来る

かね。
畫工。いや。お蔭で生き戻つたやうな氣で爲事をする事が出来るよ。

教員。何をやつてるか。僕が見ても好いかね。

畫工。女の體だ。

教員。成程。これがモデルなしに行くかね。こんなに、活氣のあるやうに。

畫工。(沈みたる聲。)なに、或人に似てゐるのだよ。どうもあの人が僕の體の中に沁み込んでゐるから不思議だ。僕の體があの子の體の中に這入りこんでゐるばかりではないと見えて。

教員。それは、細君の體が君の腹に沁み込んでゐるのは不思議はないよ。(間。)君は輸血法といふ事を知つてゐるかね。

畫工。輸血法だつて。人の血を體の中へ注ぎ込むのだらう。教員。さうだ。君は自分の血を細君に皆注ぎ込んでしまつて、其代りに細君の影が君のうつろな體の中に入つて來てゐるのだ。僕は君の拵へかけてゐるこの人物を見ると、これまでぼんやり想像してゐた事が、はつきり分つて來るよ。君は細君に死ぬ程惚れてゐるのだね。

畫工。まあ、さういつたやうなものだよ。僕が妻だか、妻が僕だか分らない。妻が笑へば僕も笑ふ。妻が泣けば僕も泣

く。さういへば可笑しい事があつた。妻が子を生む時、僕は腹が痛んだよ。

教員。うむ。君吃驚してはいけないよ。僕は今の様子を見てゐるが、君には癩癩になる兆候があるねえ。

畫工。(吃驚す。)僕がか。どうして。

教員。僕の弟がね、癩癩になつたのだ。房事が過ぎて。畫工。その兆候といふのは。

(これより教員は目に見ゆるやうに力を入れて描寫せんと努む。畫工は極めて注意して聞きなり、覺えず教員のする科を眞似す。)

教員。實に目もあてられない様子だつたよ。併し聞いたら君が氣分を悪くするかも知れないから委しく話すのは止さうよ。

畫工。(心配氣に。)好いからどうぞ話して呉れ給へ。

教員。好いかい。弟は話らない小娘に迷つたのだ。毛をちやらせた、鳩のやうな目付をした、顔が子供で、心が天使のやう。娘なのだ。そいつと結婚した處が、弟はいくぢもなぐその女に自由にせられてしまつて、何んでも女が持ちかければそれに願ひなければならぬといふ風になつたのだ。

畫工。ふむ。

教員。その結果、その天使のお蔭で弟は天に昇らなければ、

ならないやうになつた。併し天に昇る前に十字架を背負はねばならない。爪を肉に打込まねばならない實にひどい状況であつた。

畫工。(屏息す。)どんな癡癡で。

教員。(ゆるやかに。)僕は弟と向ひ合つて話してゐる。暫く話してゐると、弟の顔は石灰のやうに眞白になる。手も足も堅くなつて來る。手の拵指が。かういふ風に内へ曲つて來る。(しかたをなす。畫工眞似す。)それから目が血走つて來る。そしてこんな工合に齒ぎしりをして來る。(齒ぎしりす。畫工眞似す。)痰が咽の奥でころ／＼鳴る。胸が締木にかけられるやうになつて來る。瞳孔が瓦斯燈の焰のやうにちら／＼して來る。口からあぶくが出る。そしてかういふ風に、ぢいつと體が後の方へ反つくり返つて椅子の背に倒れかゝつてしまふ。丁度水に溺れるやうな工合に。

それから。
畫工。あ。もう止して呉れ給へ。
教員。それから。(間。)君、氣分が悪いかい。
畫工。うむ。どうも。

教員。(立ち上り、コップに水を汲みて渡す。)さあ、呑み給へ。何か外の話をしよう。
畫工。(くた／＼になりある。)有難う。だが後を話して呉れ給へ。

教員。さうかい。それから弟は目が覺めると何事があつたかちつとも知らないのだ。人事不省になつてゐたのだ。君、氣を失ふやうな事がありはしないかい。

畫工。うむ。折々眩暈がするよ。醫者は貧血のせいだと言つたつけ。

教員。さうだらう。それが初めの兆候だよ。氣を付けないと本當の癩癩になるのだ。

畫工。氣を付けるつて、どうすれば好いのだらう。

教員。まあ、第一に、一切房事を止めるのだね。

畫工。どの位の間。

教員。少くも半年間は我慢しなくては。

畫工。それはむづかしいよ。そんな事をしては夫婦の中が變になるからね。

教員。それでは致し方がない。おさらばだ。

畫工。(蠟人形の上に切を覆ふ。)どうもむづかしいよ。

教員。それでは君は命の助かる方法があるのに、それをやらないと云様なものだ。(間。)話が別になるが、君は何んでも僕に打明けて話すのだから序に聞きたいのだ。何か君は創のあるのを隠してゐるやうな事がありはしないかね。何か君の心を苦しめるやうな秘密がありはしないかね。なぜといふに、君のやうに性の合はない女と結婚してゐると様々の誤解やなんぞが生じて來易いのだから、何かひどく衝

突してその創痍が癒えないといふやうな事がありはしないかね。君の世渡りの舟の板子の下に、君が自分でも見ないやうにして隠してある死骸がありはしないかね。(問。)僕はあてずつぼうに言つて見るが、さつき君は子供が出来たと言つたつね。その子供はなせもなくつたのだい。なぜこゝにゐないんだい。

畫工。妻が内に置きたくないといふのだ。
教員。どういふ理由があつてか。(問。)それを言つて聞かせ給へ。

畫工。實は三つになつた頃から、子供の顔が妻の先の亭主に似て来たといふので。

教員。うむ。君は細君の先の亭主を見た事はないのだね。
畫工。一度も見た事はない。下手に描いた肖像のあつたのをちらと見た事がある。併し僕には子供がその肖像に似てゐるかどうだか少しも分らないのだ。

教員。それはさうかも知れない。肖像なんといふものに本當に似てゐるものはないよ。それに人間の容貌は始終變つて行くものだから、肖像を描かせた時と、その後とは顔が變つてゐるかも知れない。(問。)そしてその子が先の亭主に似てゐるといふ事に就いて君は何か疑ひを起しはしなかつたかね。
畫工。それは僕は何んとも思ひはしなかつた。子供は結婚し

てから一年目に生れたのだ。それに僕が妻に會つた時、先の亭主は旅行をしてゐてゐなかつた。妻に會つたのは、やつぱりこの湯治場であつた。しかもホテルもこのホテルであつた。それだから夏が來ると夫婦でこゝへ來るのだ。

教員。それでは君は少しも疑ひはしなかつたのだね。それは疑ふには及ばない。再婚をした女の子は死んだ先の亭主にも似る事があるのだ。それは餘り感心した事ではない。それだから印度では後家は皆焼殺してしまふと言ふではないか。(問。)併し君、細君は先の亭主の事を記憶してゐるだらう。君はその記憶に對して嫉妬を起した事はないかね。君が細君を連れてどこか歩いてゐると思ひ給へ。さういふ時にふいと先の亭主に出くはすといふ事がないには限らないね。その時君の細君と、先の亭主と顔を見合はせるだらう。目と目が物をいふよ。其目の詞は、互ひに己がと言はない。己達がといふのだよ。

畫工。それはそんなやうな事を氣にした事もあるよ。
教員。それ見給へ。(問。)さういふ考へは永久に消滅しないものだよ。人生の不調和にはどうしても直されないのであるよ。だから君は耳を蠟で潰して製作でもしてゐるが好いのだ。製作をして年を取つてその間に得た新しい印象で、死骸の隠してある板子の透間を損めるのだ。さうすれば死骸が動き出すに濟むのだ。

畫工。ちよつと待ち給へ。(問。)君がさうして物を言つてると、何んだかひどく妻に似てゐるやうな心持がして來て不思議でならない。それに君は折々右の目で瞬をするだらう。丁度人の顔を射るやうな工合に。その目が何だか僕に何物をかサジエストするやうなのだ。妻の目も折々そんな事があるのだよ。

教員。はてね。
畫工。おや。その「はてね」といふ呼吸がやつぱり妻にそつくりだよ。妻もよく「はてね」といふよ。

教員。それは君の細君と僕とは遠い親類なのかも知れないよ。一體人類は皆親類に相違ないからね。兎に角、さう似てゐると聞いて見れば僕は君の細君に會つて見たいやうな氣がして來るよ。

畫工。それから妙なのは、妻の様子に少しも僕に似た處はないといふわけだ。僕の不斷使ふ詞は妻は殆ど避けて使はないやうにしてゐるかと思はれる位だ。僕のする科を妻がする事もまるでない。世間では夫婦は似て來るものだといふが、僕等夫婦は反對だ。

教員。うむ。そのわけが君には分らないかい。(問。)君の細君になつてゐる女は少しも君を愛してはゐないのだよ。
畫工。なに。
教員。失敬。併し事實だ。女の愛といふものは、相手から物

を受取るにある。何物をも受取らないといふのは、即ち相手を受けないのだ。君の細君は君を愛してはゐないし、元から君を愛した事なんぞはないのだ。

畫工。一體君は、妻が一度先の亭主を愛した以上は、二度目に僕を愛するといふ事はない事のやうに思ふのかね

教員。それはないと思ふ。遍詐偽にかゝつたものは懲りてゐるから、それからは目を明いてゐるものだよ。君なんぞはまだ詐偽にかゝつた事はないのだ。それだから詐偽にかゝつた事のある人間は恐いものだよ。君なんぞは、さういふやつに逢つたら用心しなくてはいけない。

畫工。何んだか君の詞は鋭い小刀のやうに僕の胸を刺して、胸の中で何かと眞二つに切れてしまふやうだ。併し僕にはそれを防ぐ事が出来ない。併し切れても好い。どうせ腫物のやうなものがあつて、それが潰すにゐたのだから切れても好い。(問。)妻は僕を愛した事はないと。(問。)そんならなぜ僕を亭主に持つたのだらう。

教員。そんならどうして細君が君を亭主に持つ事になつたのだから考へて見給へ。一體君の方で細君をつかまへたのか。細君の方で君をつかまへたのか。

畫工。それが僕に分るか知らんて。(問。)どんな行きがかりであつたか知らん。(問。)兎に角一日で出來た事ではなかつた。

教員。君の記憶がそんなにぼやけてゐるなら、僕がどんな風に君達が夫婦になつたか、當てゝ見ようか。

畫工。それは幾ら君にでも出来まい。
教員。いや、さうでない。今まで君が色々話して聞せて呉れた材料を綜合して見ると、君達が夫婦になつた手續を想像するのは造作はないと思ふ。まあ、聞いてゐる給へ。(聲色を勵まざして、殆ど戯れの如き調子にて語る。)先の亭主が留守になる。研究旅行か何かに行つたのだらう。女は一人になる。初めのうちは體が自由になつたやうで愉快を感じる。併し二週間位一人でゐて見ると、女は空虚を感じて来る。そこへ新しい男が来る。その男が知らず知らずの間に、次第にその空虚を填める。そのうち留守をしてゐる亭主の傍がぼやけて来る。なぜかといふと只遠ざかつてゐるからなのだ。數學上の原則で距離の二乗にぼやけるのだ。そのうち女の胸の中で情慾が次第に燃え立つ。女は不安を感じる。第一に良心の上から濟まないと思ふ。亭主に對して恐れを懐く。そこで女は何物かを楯にしようと思ふ。無花果の葉の蔭に隠れて、兄さんといふものとこつこをする。感情が肉に傾いて来れば来るほど、女の頭では、空想の詩を吟るやうに關係を靈的にする。
畫工。兄さんといふものとこつこをする。どうして君はそれが分つたか。

教員。その位な事は判断が付くのだ。子供はお父さんとお母さんこつこをする。それから段々大きくなつて来ると、兄さんといふものとこつこをする。それは隠して置きたいもののあるのを隠して置く爲めなのだ。それからお互に穢れた事をすまいといふ誓をする。そして隠れんぼをする。併し隠れんぼをしてゐるうちにどうかすると誰の目にもかゝらない暗い隅で會ふ事があるのだ。(わざと責むる如き調子にて。)さて誰の目にも、かゝらないとはいふものゝ二人の心の内に暗い處から誰かゝ見てゐるやうな氣がして来る。二人は覺えず恐れをのゝく。この恐れの内留守をしてゐる亭主の生靈が出て来る。次第にその姿が大きくなる。この生靈が夜は二人が戀の夢を妨げる。魔になる。外へ来て戸を叩く債鬼になる。二人が手水を使はうと思つて、一しよに手を鉢の水に入れるとその間へ黒い手がまじつて這入る。それが戀の債をはたりに来た生靈の手である。靜な夜に二人きりであると、その静けさを破る聲は高く打つ二人が脈の外にはない管であるのに、誰の知れない厭な聲が聞えて来る。それが彼の生靈の聲である。生靈は二人が一しよになるのを妨げる事は出来ない。唯二人に十分幸福を味はせないやうにする。そこで二人はこの目に見えない威力に幸福の邪魔をせられて終には逃げようとする。處がさうは行かない。過去の思出が逃げる跡から追つ

て来る。今まで造つた罪が追つて来る。お負に社會の制裁といふやうなものまでそこへ出て来て二人を威す。かうなつて来て二人がこの苦境を逃れようとするには禍を何者かに嫁せねばならぬ。二人は自由な思想を持つてゐるなんぞと言つてゐても留守をした亭主の前に出て自分達は戀をしたのだといふ程の勇氣はない。そこで卑怯にも邪魔になる債鬼を殺さねばならぬといふ事になる。どうだ。まあそんな物ではないか。

畫工。さうかも知れない。併し君は妻が僕を教育して僕に新しい思想を興へたといふ事を勘定に入れてゐないのでないか。
教員。いや、それも勘定に入れてゐる。君はそんなら細君がなぜ元の亭主をも自由な思想になるやうに教育しなかつたのか知つてゐるのか。
畫工。それでも先の亭主は馬鹿だつたといふではないか。
教員。それは如何にも馬鹿であつたのだらう。只僕の思ふには、馬鹿なんといふ事は幾段にも理解せられる。細君の書いた小説を讀んで見ると、先の亭主が馬鹿だつたといふのは、細君を知る事が出来なかつたのだ。細君の心が分らなかつたのだと言ふに過ぎないではないか。失敬な事をいふやうだが君の細君は本當にそんなに考へが深くつて分りにくいのかい。あの小説なんぞを讀んで見ても別にそんな深

みも見えないやうだが。

畫工。僕にだつて別にあの小説なんぞに深みがあるやうには思はれないよ。(間。)併し打明けて言へば僕にもどうも妻の心は好く分らない。言つて見れば妻の脳髓と、僕の脳髓とは機關の構造が違つてゐて、妻の方の齒車と僕の方の齒車がうまく噛みあはないやうな氣がする。強ひて僕の方で先方の考へを了解しようとする、僕の頭の中で何物かゝこはれるやうな氣がするのだ。
教員。さういふ君もやつぱり馬鹿なのかも知れないぞ。
畫工。そんな事はあるまいと思ふよ。それに妻と意見の合はない處を考へて見るといつも妻の方が無理なやうだ。(間。)この手紙なんぞも今日妻の處から届いたのだが、君、ちよつとこれを見て呉れ給へ。(かくしより手紙を取出す。)
教員。(受取りてざつと讀む。)うむ。何んだか僕には覺えのある書き振りのやうだ。
畫工。殆ど男の書いた手紙のやうだらう。
教員。さうさ。少なくとも僕はこれと同じやうな手紙を書く男を一人知つてゐる。(間。)兄上様と書いてあるね。まだ兄さんといふものとこつこの喜劇を止めないのかね。(間。)しなびても無花果の葉がまだくつゝいてゐるのだ。(間。)細君の詞遣ひはなぜこんなに他人らしく丁寧なのだい。
畫工。でも禮儀をなくしてしまひたくはないから。

教員。うむ。それでは禮儀の爲に、自分に物體を付けようと
して、いもうとだなんぞと書くのかね。
畫工。僕の方で、僕が自重するといふよりは寧ろ妻の方を尊
敬してゐたいのだ。妻が僕の「我」のより善き半分なのだ
からね。

教員。それは人の方をより善き半分にして置く方が氣樂かは
知らないが、やつぱり、君、自分の方をより善き半分にし
てゐなくてはいけないよ。一體君は細君の下風に立つてゐ
ようと思ふのかい。

畫工。それは妻を上置いて好いと思ふのだ。何に付けても
僕の方が一段下つてゐると思ふのが僕には心持が好い。ち
よつと言つて見ると泳ぎなんぞは初め僕が妻に教へてやつ
たのだ。そのうち妻が泳げるやうになつて僕より上手だと
誇るやうになると僕は却てそれを愉快に感ずる。初めのう
ちは僕は妻に大膽にやらせようと思つて自分が臆病で負け
たやうな風をする。そのうちいつか僕が本當に臆病になつ
て負けてしまふのだ。謂はゞ妻が僕の膽力を奪つてしまふ
やうなものだ。

教員。君は何か外のものをも細君に教へたかい。
畫工。うむ。君、外の者には内証だよ。僕は妻に假名遣ひを
教へた。妻はまるで知らなかつたのだからね。そこで聞いて
呉れ給へ。妻は段々假名遣ひが分つて手紙が書けるやう

になつたので、僕は手紙の往復を妻に任せてしまつた。さ
うしてゐるうちに實に不思議ぢやないか。今度は僕が長い
間手紙といふものを書かない爲に假名遣ひや天爾遠波をち
よいちよい忘れるやうになつたよ。さうなると妻の方では
初め僕が教へてやつたのだといふ事はそぶりにも見せな
い。僕は初めからの馬鹿として扱はれるのだ。
教員。はゝあ。もう君も馬鹿になつてしまつてゐるのだね。
畫工。それは、妻が僕を馬鹿だといふのは、無論笑談にいふ
のだがね。

教員。さうさ。笑談は笑談だらうよ。だがね、君の話の聞き
て見るとさういふのがカニバリズムといふのだ。生蕃主義
といふのだ。君には分るかね。蠻人といふやつは相手をつ
かまへて食つてしまふ。そしてその食はれた人間の持つて
ゐた長所を自分の方に取つてしまふ積りであるのだ。問。
君の細君になつてゐる女は、君の魂を喰ふのだ。君の膽力
君の智識を喰ふのだ。

畫工。さうかねえ。その論法から言へば僕の自信も妻が喰つ
てしまつたのだ。君は、妻の著述を始めたのは僕が勸
めたのだといふ事を知つてゐたか。
教員。(相手の詞を聞き思ひあたりたる事ある如き様子。)
さうかい。
畫工。初めのうちは僕は妻の書いたものを下らないとは思つ

たが、わざと妻めて書かせるやうにした。(問)僕は、心
易い文士仲間に妻を紹介した。君の論法で言ふと妻はその
社會のあらゆる花から蜜を吸つたのだね。僕は骨を折つて
批評家が妻の書いたものを悪評しないやうにした。僕は妻
に自信力を吹き込んだ。吹き込んでゐるうちに僕の息が續
かなくなつたのだ。僕は自分の持つてゐるものを妻に遣り遺
りしてとらう、自分にはなんにも持つてゐないやうになつ
たのだ。僕は何かも言つて了ふから聞いて呉れ給へ。

(問)今から思つて見れば不思議だよ。人の心といふもの
は妙なものだ。僕の繪畫の評判が善くつて妻の書くもの、
評判が僕の名に覆はれてしまひさうになつた時、僕は妻に
自信力を持たせようと思つて妻の書くものを褒めては僕の
畫をけなすやうにした。そして一體藝術の中で詩が高尙な
もので畫なんぞはつまらないものと言ふ論を立て、あ
らゆる證據を並べてその論の根據にした。そのうち僕はそ
の論が妻を勵ます爲に立てたものだといふ事を忘れてしま
つて自分でもその論を信するやうになつたのだ。それだか
ら僕が繪畫を止めたのは君の議論に服したのではない。君
は只繪畫に對する僕の信用が、子供が骨牌を立て、拵へた
家と同じで、吹けば倒れるやうになつてゐたのを偶然來て

吹いて倒したに過ぎない。
教員。うむ。君は僕と話をしはじめた時、細君は君から何物

をも受けない、取らないと言つたやうだつたが、それでは
大分話が違ふやうではないか。

畫工。それは現に何んにも取らないのだ。もう僕からは取ら
るにも取るものがないのだ。
教員。うむ。蛇が餌を食つてしまつて唾を吐いてゐるやうな
ものだね。

畫工。事によると妻は僕が意識して取られたと思ふより以上
の物を取つてゐるかも知れないよ。
教員。それは言ふまでもない事だと僕は思ふ。細君はたしか
に君の目の届かないものを取つてゐるよ。さういふのは盜
むといふものだね。

畫工。事によると妻は僕を教育したのでも何んでもないかも
知れないよ。
教員。なに教育するものかね。無論君の方で細君を育てたの
だ。細君の方では君に育てられてゐながら、却て自分が君
を育てゝゐるやうに、君に思はせたのだ。一體細君が君を
教育したといふのはどういふ風であつたか、僕に話して聞
かせる事が出来るかね。

畫工。出来るとも、先づ第一に。(問)ふん。
教員。どうだね。
畫工。さう。僕が。

教員。君がではないよ。細君がといふべき處だ。

畫工。さうかね。僕にはもうどう言つて好いか分らなくなつてしまつた。

教員。それ見給へ。
畫工。兎に角妻は僕の自信をも食つてしまつた。それで僕の生活は段々下り坂になつて来た。そこへ君が出て来て僕に自信力を授けて呉れたのだ。

教員。(微笑)君の彫刻に對する自信力をね。

畫工。(たゆたひつ)さうだ。

教員。ふん。そこで君の彫刻に對する自信が成立したのだね。よし。さうして見ると今では君は彫刻が命だね。人類の極めて幼稚なる時代の陳腐なる藝術、最も抽象的なる藝術が君の命だね。君は純粹なる形だとか、三方の廣がりを持つてゐるとかいふやうな説明を眞面目に聞くのだね。

(問)それで好いかい。(問)そんなもので現代の人間の唯物的な思想に影響を及ぼす事が出来ると思ふかね。人間にイリュージョンを興へるといふ事が色彩なしに出来ると思ふかね。最も人を刺戟する色彩といふ者なしにだよ。好いかい。それを君は信ずるか。

畫工。(身も心も微塵に碎かれたる如くなる)いや、僕にはもうそれも信ぜられなくなつた。

教員。さうだらう。僕もそんな事は信じない。
畫工。それに君はなぜ信じてゐるやうに言つたのかね。

なんぞと言つて女といふものに對して自由に考へて見る事が出来ないなどは馬鹿氣てゐるぢやないか。君は自分の細君を深い、了解がたい、スフィンクスのやうなものだなんぞと思つてゐるが、その不可思議の正體を何だと思ふ。只「愚」に過ぎないのだ。(問)これを見給へ。手紙を書いて假名はやつぱり違つてゐる。なんにしる女といふものは構造を誤つた機關だね。四角な物に丸い物を當て嵌めたやうなものだ。衣裳ばかりの代物だ。君の細君にずぼんを穿かせて鼻の下に鼻で入の字髯を書いたと想像して見給へ。そして自分の頭腦を冷靜にして何を饒舌るか聞いて見給へ。何んの有難味もなくなるよ。丁度蓄音器が君の自分で言つた詞や餘所の人の言つた詞をぼやけさせて聞かして呉れるのと同じ事だ。君は女を裸にして見た事があるかい。(問)あるに違ひない。まあ青年男子の胸に乳房をくつ付けたといふ形だね。男子の成熟しないのだ。發育不全だ。子供が臺が立つて實が入らないでゐるやうなものだ。慢性貧血症の患者だ。そいつが年に十三遍血を下すのだ。そんなものが何んになるかい。

畫工。それは君の言ふ通りかも知れない。それなのになぜ僕には妻と自分が同等なものやうに思はれるのだらう。教員。それは幻視だ。錯視だ。女の着物に眩惑せられるのだ。さうでなければ、(問)君が妻君と同等に下落したの

教員。それは君を氣の毒に思つて言つたに過ぎない。
畫工。あゝ、實に僕は氣の毒なものだよ。僕はもう精神上に破産した。僕は駄目だ。(問)そして僕の不幸の絶頂はあの妻を失つてしまつたといふ一事だ。

教員。君は細君を惜んでゐるやうだが、一體細君が何んの役に立つてゐたかね。

畫工。何んの役どころではないよ。僕は無神論者になる前に神といふものを使つてゐた。神といふものを無くしてしまつてからは、妻をその代りにしてゐた。僕の尊敬の對象が妻であつたのだ。

教員。ふん。そんならその尊敬といふものを芥と一しよにいけてしまつて、その上に何か新しい草を生やすさ。まあちよつと言つて見れば人生を卑しむ情とでもいふやうなものを生やすさ。

畫工。僕は尊敬なしには生きてゐられないから困るよ。
教員。それでは君は奴隷だね。

畫工。僕は女といふものを尊敬せずには生きてゐられないから困るよ。
教員。いやはや。手が付けられない。兎に角何か尊敬するものがなくては困るといふ事なら爲方がないから、女を捨てて元の神を呼び戻すさ。一體無神論者になつて神の代りに女に迷ふなんぞは馬鹿氣てゐるではないか。思想の自由だ

だ。細君が毛細管作用で君の汁を吸ひ取つて、君と細君とが同じ高さの水面を形造つたといふに過ぎない。(問)彼はいふ内に、(時計を出し見る)もう君と六時間饒舌つてゐる。もうそろ／＼細君の歸つて来る頃だらう。君も草臥たらしいから、もう話も止めようではないか。

畫工。いや、どうぞ僕を一人で置いて歸る事だけは勘忍して呉れ給へ。僕は心寂しくてもう一人ではゐられないから。
教員。なに少しの間だよ。今に細君が歸つて来るから。
畫工。さうだ。妻は戻つて来る。(問)まあ何んと云不可思議な事だらう。僕は妻が戀しい。その辯又妻が恐い。妻は僕に優しくする。併し何んだか妻に接吻せられると吸付かれるやうな、ぼかさされるやうな、心持がする。曲馬では道化師が子供を見物の前に出す時、樂屋で抓つて、見物の前に出た時頬べたが赤くなつてゐて丈夫さうに見えるやうにする。どうも己はその子供のやうな心持がする。

教員。どうも君の様子を見てゐると氣の毒でならない。僕は醫者ではないけれど、どうも君は遂からず死ぬだらうと思はれる。一體こなただ君の描いた畫を見たばかりでも、君の壽命の長くない事は分るといつて好い位だ。

畫工。さうだらうかね。あの畫にどんな處があるといふのだね。

教員。君のつかふ繪具は變な水色で血の氣がなく、薄くぼや

けて見える。透して見ればキャンパスが死人の肌のやうに黄色く透いて見える。何んだかその奥には君の顔が透つて土氣色になつて映つてゐるやうだ。

畫工。もう止して呉れ給へ。止して呉れ給へ。

教員。さう思ふのは僕一人ではないやうだ。君は今日の新聞を見たかい。

畫工。(ざくりとして。) いやまだ見ない。

教員。こゝに机の上に来てゐるではないか。

畫工。(手を伸べて新聞に觸れれども取上げんとしてたゆたふ。) これに書いてあるのかね。

教員。読んで見給へ。それとも僕が読んで聞かせようか。

畫工。いや、それには及ばないよ。

教員。君、僕はもうお暇をしようかと思ふがどうだい。

畫工。まあ、まあ、まあ。ちよつと待つて呉れ給へ。(間。)

どうも何んと言つて好いか知らん。君の言ふ事を聞いてゐると、僕は段々君を憎む様になつて来る。その癖どうも君を歸したくない。(間。) 言つて見ると僕は水の中におつこつてゐて浮き上るたびに君が頭を擲つては深みへ沈ませるやうだ。君に秘密を打明けたい前には少くも僕の體にはまだ臓腑があつた。それが今ではまるでからつぽになつてしまつた。伊太利亞の名高い畫工の描いた畫がある。それはある聖者の猷身の事蹟を書いたもので、聖者の腹を截割

つて腸を引出して糸巻に巻いてゐる。腹が段々からになつて糸巻がふくらんでくるといふ工合だ。(間。) 丁度そんな風に、君と話をしていると、僕は何かも君に吸取られて、それを吸取つた君が段々強くなつて来るやうに思はれる。君が歸つて行く時には、僕の臓腑は君が持つて行つてしまつて跡に残る僕はぬけ殻になつてしまふのではあるまいか。

教員。君は随分空想に耽ける人だね。(間。) 僕が君の臓腑を持つて行く代りに、細君が君の心の臓を持つて歸つて来るから好いではないか。

畫工。いや、もう妻は僕の心の臓を持つてはゐない。君が僕の目の前で妻を焼いて灰にしてしまつた。君は何もかも灰にしてしまつた。僕の藝術、僕の戀愛、僕の希望、僕の自信力何もかも灰になつてしまつた。

教員。なに、それは僕が焼くより前に崩れかゝつてゐたのだよ。

畫工。崩れかゝつてゐてもまだ助ければ助けられたのだ。併しもう今になつては取返しが付かない。君は火付け、人殺同然な人だよ。

教員。いや、成程僕は色々なものを灰にしたかも知れん。併しこれからその灰の中に種を蒔いて新しいものを生えさせて遣るよ。

畫工。いや、いや。僕はもう君の言ふ事は聞かない。僕は君を憎むのだ。

教員。ふん。大分勢ひが出て来たな。君の爲に賀すべしだ。さうなれば僕が君を生き戻らせてやる。君にはまだ生き返る力があるわい。僕の言ふ事をしかと聞き給へ。僕の言ふ通りにし給へ。

畫工。さあ、どうともして呉れ給へ。何んでも言ふ通りにするから。

教員。(立ち上る。) 僕の顔をしかと見給へ。

畫工。(相手の顔を見る。) おや。君は又そんな目をして僕を見るね。僕を引付ける目をするね。

教員。僕の言ふ事を聞き給へ。

畫工。何んでも聞くよ。だがもう僕の事を言はずに君自身の事を言つて呉れ給へ。僕はもうどこもかしこも疵だらけになつてしまつて障られると痛くてたまらないから。

教員。いや、僕自身について言ふべき事は何んにもない。僕は古代言語の講座を受持つてゐる學校教員で妻になくなられた一人者だ。その外には僕の身の上について言ふべき事はない。(間。) 僕の手を握つて見給へ。

畫工。まあ、何んといふ恐ろしい力だらう。まるで電氣の機械に障るやうだ。

教員。さうか。その僕も丁度君のやうに弱い時があつたとい

ふ事を君に言つて聞かせる。(間。) 立ち給へ。

畫工。(起つ。直ぐに教員の首に抱き付く。僕はもう骨なしの子供のやうになつた。そして僕の脳髓はまるで曝露してゐる。

教員。この部屋の中を歩き給へ。

畫工。僕には歩けないよ。

教員。歩けねばいかん。歩かないと打つぞ。

畫工。(覺えず身を真直ぐにして。) 何んだと。

教員。打つぞ。

畫工。(一歩下り憤然と。) 君。それは何んといふ事だ。

教員。は、それ見給へ。やつとの事で君の頭に血が這入つた。君の自己が蘇つた。そこで君に電氣を授けて遣る。

(間。) 君の細君はどこにゐるのだ。

畫工。妻の行つた先か。

教員。さうだ。

畫工。妻は會に行つたのだ。

教員。きつとか。

畫工。きつとだ。

教員。何んの會だ。

畫工。孤兒院設立會といふのだ。

教員。細君が出て行く時君は平和に出してやつたか。

畫工。(たゆたひつつ。) 平和ではなかつた。

教員。よし。それでは出て行く時に喧嘩をしたね。(問。)君は細君を何と言つて怒らせた。

畫工。實に君は恐ろしい人間だ。僕が何か言つたといふ事を君はどうして悟つたのだ。

教員。既知の数が三つあればXはわけなく出る。(問。)さあ細君に言つた詞を聞かせ給へ。

畫工。僕の言つた詞は、(問。)たつた二言であつた。併し實に残酷な詞であつた。僕は今になつて後悔してゐる。

教員。後悔なんぞするには及ばない。(問。)僕にその詞を聞かせ給へ。

畫工。「色深い婆め」と僕は云つた。

教員。それから。

畫工。その後ではなんにも云はなかつた。

教員。いや、それは嘘だ。君はたしかにその後で何か言つたのだ。それを君は思ひ出すのを恐れてゐるのだ。さあ、その鏡前のかゝつた處へしまひこんである分の秘密の口上を打明けて僕に聞かせ給へ。

畫工。もう僕には思ひ出されない。

教員。ふん、君には思ひ出されないが、僕はそれを知つてゐる。君はかう云つたのだ。「そんなに年を取つてどの男も構ひ付けないやうになつてから、色氣のある素振をして恥かしいとは思はないか。」君は細君にかう云つたね。

畫工。僕はさう云つたかねえ。成程さう云つたに違ひない。(問。)だが君はどうしてそれを知てゐるのだ。

教員。僕はこゝに来る時汽船の中で、細君が連の人に話すのを聞いてゐた。

畫工。連の人とはどんな人に。

教員。細君は四人の青年に話して聞かせてゐた。細君は無邪氣な青年を好くと見える。

畫工。それは罪のない事だ。

教員。人間はお父さんお母さんになつてしまふと、兄さんと妹ごつこをするのだ。

畫工。それを君は見たのかね。

教員。うむ。見た。僕は見たが君には見る事は出来ない。君のゐない處で細君のする事はどうしても君には見られないのだ。それだから亭主といふものには所詮妻は見えないのだ。(問。)細君の寫眞があるかい。

(畫工。懐中より妻の寫眞を取り出し、何んの爲に寫眞を求むるかさ怪しむ様子にて教員に示す)

この寫眞を取つた時には君は傍で見えてゐたのではあるまいね。

畫工。いや、僕はゐなかつた。

教員。さうだらう。(問。)君の描いた細君の肖像とこの寫眞と似てゐるかどうかね。(問。)顔は似てゐるさ。併し表情

が違ふよ。君にはそれが見えないのだ。自分の心に持つてゐる細君の姿を自分の目と寫眞との間に置いて見るから駄目だ。(問。)君は畫工だからこの寫眞を畫として見て見給へ。實物の女がどんな女だか知らない積りで見て見給へ。

(問。)どうだ。此表情は誰をでも迷はさうとかゝつてゐる色深い女の表情ではないか。君この口のそばの筋を見給へ。恥かしいのなんのといふ事をまるで捨てた表情だ。それからこの目を見給へ。そこにゐない男を探してゐるといふ目付だ。この上着の胸の思ひ切つて切明けてゐるのは何んの爲だと君は思ふか。この髪を掻き付け工合、袖のたくし上げ工合はどうだ。君、これを見てもまだ分らないかい。

畫工。うん。成程分る、分る。

教員。氣を付け給へよ。

畫工。何に。

教員。細君が復讐せずには置かないから、氣を付けて居給へといふのだ。もう男を引付ける力がないといふのは、細君に對しては最大の侮蔑だ。もし君が細君に向つて、お前の小説は寢言だと云つたのなら細君は君を趣味のない男だとして笑つて済したのであらう。それとは違つてあの男を迷はさうとばかり思つてゐる女に、もう男が迷はぬやうに年寄つたと云つたのだから、細君は復讐をせずに済ます筈がな

い。かういつてゐるうちに、もう或る復讐をしてしまつてゐるかも知れない。もしまだしてゐなければそれは細君がしないのではなくて相手がしなかつたのだ。

畫工。そんな事があれば僕はどうしても聞き出さずには置かない。

教員。聞き出されるなら聞き出して見給へ。

畫工。どうでも僕は聞き出して見せる。

教員。さういふ氣なら僕も應援してやらう。

畫工。うむ。どうせ僕は死ぬる身なら、ちつとやそつと早く死んでも差支へない。(問。)どうしたら好いと君は思ふのか。

教員。よし。先へ僕に一つ言つて聞かして置いて貰ふ事がある。何か細君にしかとした押へ處になるやうな弱點はないのか。

畫工。さうさ。殆どなからうよ。猫には命が九つあるといふ事だが、妻も先づその位は命がありさうだから。

教員。はてな。(問。)あれは汽笛の聲だ。(問。)もう直ぐにこゝへ歸つて来るね。

畫工。そんなら僕はいつもの通り棧橋まで迎ひに行つてゐるばなるまい。

教員。いや。それはいけない。君はちつとしてこゝにゐるのだ。そして不機嫌な顔を見せるのだ。そこでもし細君の衷

心に疚しい事がないのなら細君は君に打つて掛るだらう。もし自分の身に暗い事があるのならあべこべにちやはやするだらう。

畫工。その位な事でたしかに分るだらうかね。

教員。それは受合はれない。兎も妙に跳ね廻つて係蹄にかゝらない事がある。併し僕には僕の手段がある。僕はその隣の部屋を借りて置いた(椅子の後なる右手の戸を指さす)。僕はあの戸の向うで見物してゐるから君はこゝで細君と狂言をして見給へ。君の狂言が済んだ後では僕が君と入替る。そこで僕が蟒蛇の檻に這入つて蟒蛇を抜つて見せるから君は僕の部屋に這入つて鍵の穴から覗いて居給へ。そこで二場の狂言が済んだから、君と僕とは庭で落合つて話をする事にしよう。併ししつかりやり給へよ。もし君が意氣地なく細君に巻かれてしまひさうになれば僕が隣で合圖をする。僕が椅子で床をとんとんと二つ突いたら目を覺して細君の麻薬に酔はないやうにするのだよ。

畫工。うん。(間)併し君、きつと隣の間にある呉給へよ。逃げてしまつてはいけないよ。

教員。そんな心配は御無用だ。(間)それは好いが後で僕の番になつてから君は餘程しつかりしてゐなければならん。僕は人間の魂を切明けて見せる。僕は君の細君の臟腑を引ずり出してこの机の上に擡げて見せる。君のやうな生な男

はそんなものを見た事がないのだから定めて身の毛がよだつだらう。併し見た跡で後悔はしまふと思ふよ。(間)一つ注意して置くが僕に會つたなんぞといふ事をちよつとでもにははせてはいけないよ。僕の名は言はないまでも新しい人間に近付きになつたなんぞといふのではないよ。細君の弱點を僕がほじくり出して見せるから。(間)しつ。もう細君が上の部屋に歸つてゐる。聞き給へ。鼻唄の聲がする。好い氣なものだ。(間)さあ。しつかりしてゐ給へよ。あの君の椅子に掛けてゐ給へ。さうすると細君が今僕の掛けてゐるこの椅子に掛けるだらう。そこで僕は鍵の穴から二人をはつきり見る事が出来るのだ。

畫工。畫までにはまだ一時間ある。(間)ホテルに新しい客は來なかつたらしい。入口のベルが鳴らなかつたから。(間)多分邪魔をするものはあるまい。(間)あゝ、いやでも試験をせねばなるまい。

教員。氣力があるかね。

畫工。僕の身はもうなきものにしてある。(間)併しこれから先の出來事がこはい。とはいふものゝその出來事を防ぎ止める事は出來ない。石は山腹をころがり始めた。そしてそれをころがらせたのは最後の水の一滴でもなく、また最初の水の一滴でもない。總ての水の雫の力だ。

教員。ころがる石はころがらせる外はない。(間)ころがつ

て落ちてしまはねば落付くといふ事はない。(間)そんなら後に又會はう。

(教員退場)

第二場

畫工は別れ去る教員に頸にて會釋す。手には妻の寫眞を持ちゐるが、今それを引裂き紙切を机の下に投げ捨つ。さて椅子に腰掛け神經質なる手付にてネクタイをいぶり髪を拂付け、上着の襟を直しなごす。妻テクラ入り來る。眞直に歩みて夫の前に寄り接吻す。優しく打明け

て面白氣に、氣嫌よき様子。

妻。今歸つて來たのよ。今日はどんな工合。

畫工。(待ち構へゐたる意氣込み、既に半ば破る。少しく反抗しつゝ、戯れのやうに)外へ出てどんな悪い事をして來たので、言わけに接吻なんぞをするのだい。

妻。それは直ぐに話してよ。(間)大變にお金を遣つたの。畫工。そして面白かつたかい。

妻。それは面白かつたには違ひないわ。孤兒院設立の話なんぞは面白くないわ。(間)それはなんだといふ事は知れ切つてゐますわ。跳馬語で言へば。(間)あなただけ留守のうち何をしてゐたの。(室内を見廻す。何物かを求め、何物の匂かを嗅ぐ如く。)

畫工。いや早、己は退屈しきつたよ。

妻。誰か來たの。

畫工。なに、一人ぼつちだつた。

妻。(夫の様子を見る。長椅子に腰を掛く。)こゝに誰か座つてゐたのね。

畫工。そこに。誰も座つてゐやしなかつた。

妻。變だわ。長椅子が温かなのだものを。それにちよいとこの處を御覽なさい。脇を突いた跡があるわ。女が來たのではないかつて。

畫工。馬鹿な。お前だつて口ではさういふけれどそんな事あり得べからざる事だといふのが、自分にも分つてゐるのだらう。

妻。でもあなたは顔を赤くしてよ。何んだか怪しいわ。ごまかしてゐるのね。(間)さあ、ちよつとこゝへ來て白狀しておしまひなさいよ。(引寄す。畫工は頭を妻の膝の上に乘す。)

畫工。(微笑)實にお前は悪魔だわ。自分でそれが分るかい。

妻。いゝえ。わたしには自分の事なんかは餘り分つてゐなくてよ。

畫工。お前は自分を觀察するといふ事はしてんでないのだね。

妻。(何物かを探る如く相手を見る)随分わたしは自分の事

を考へてみますわ。(問。)わたしは随分自己中心主義なの。(問。)あなたは今日に限つて妙に哲學的なね。
畫工。お前の手を己の額に當て、見て呉れないか。
妻。(戯る。)またこの頭の中を蟻が這ひ廻つてゐるの。どれ蟻を追退けてやりませう。(額に接吻す。)そら。もう好いでせう。

畫工。うん。もう好い。
(暫く間を置く。)

妻。留守の内何をしてゐたの。少しは描いて。
畫工。いや、己はもう繪を描く事を止めにした。
妻。なんですと。もう繪を描く事は止したのですと。
畫工。愚圖々々いつてはいけないよ。もう繪を描く氣にはなれないのだから爲方がない。
妻。そして何をしようといふの。

畫工。己は彫刻家になる。
妻。おや、また新しい思想をどこから持つて來たのね。
畫工。愚圖々々いつてはいけないといふではないか。(問。)ちよいとあれを見て呉れ。

妻。(蠟人形の上に覆ひある布を捲る。)まあ。(問。)これは誰なの。
畫工。當て、御覽。
妻。(柔かに。)これがわたしなの。こんな物を捲へて氣が咎

妻。だがどうですと。變だわ。一體繪を描いてはならないなんぞと誰があなたにいつたの。

畫工。誰がいふものか。お前は己の背後に誰か、潜んでゐるやうに思ふらしいが、それは感違ひだ。それは焼餅だ。
妻。え、わたししたしかに焼餅焼よ。何んだか誰か、來て大事なあなたを持つて行つてしまひさうでならないわ。
畫工。そんな分らない話があるものか。どんな女でもお前の、己の頭の中で占めてゐる位置を奪ふ事は出來ない。お前といふものなしには己は生きてゐられないといふ事は好く知つてゐる癖に。

妻。實は女よか、男の方があなたを欺して、わたしから遠ざけてしまひはしまいかと思はれるのよ。
畫工。(相手の氣を引くやうに。)ふむ。何か感附いてゐるのだな。

妻。(立ち上る。)誰かこゝに來てゐたのね。誰なの。
畫工。己がお前の顔を見つてそんなに驚いて飛び上らなかつたつて好いではないか。
妻。でも變な見やうですわ。そんな風にあなたはわたしを見

た事はこれまでにないのよ。
畫工。どんな風に見たといふのだ。
妻。あなたは、わたしの臉の下へもぐり込むやうに見るのですものを。

めはしなくつて。

畫工。似てゐやしないか。
妻。どうしてそんな事が分るもんですか。顔も何も無いのに。

畫工。それは無いさ。顔はなかつたつて外の物が色々ある。(問。)外の美しい物が。

妻。(戯れに夫の頬を打つ。)黙つて入らつしやいよ。いろんな事をいふと又接吻してよ。

畫工。(防禦す。)よせ、よせ。(問。)誰か來るといけない。妻。構ふもんですか。わたしがわたしの亭主に接吻したつてどこからも尻は來ないわ。わたしの法律上に有してゐる權利だわ。

畫工。でもホテルでけこちとら夫婦ではあるまいといつてゐるさうだ。夫婦ならあんなに接吻はしないだらうといふのださうだ。折々は喧嘩もして見せるけれど、それでもやっぱり夫婦だとは思はないらしい。色といふものもやつぱり偶には喧嘩をするものだといふ事だ。
妻。なぜわたし共は喧嘩をするのでせう。なぜいつでもこんな風におとなしくしてゐないの。何んとか仰やいよ。こんなにしてゐたつて好いでせう。こんなにしてゐればいつも幸福なのだから。

畫工。それはかうしてゐたいどころではないよ。だが。

畫工。ふむ。さうだ。實は己はお前の臉の奥の方にどんなものがあるかと思つたのだ。

妻。御覽なさいとも。何んにも隠してなんかなくつてよ。(問。)それにあなたの物の言ひやうも變だわ。(問。)あなたは、いつも遣はない詞を遣ふのね。(擇るやうに。)いやに哲學的になつたのね。(脅迫する如き態度にて夫の前に歩み寄る。)誰かこゝに來てゐたの。

畫工。己の頼んでゐる醫者なのだ。
妻。醫者ですと。どんな醫者。
畫工。ストリヨオムスタットの醫者だ。

妻。何んといふ人。
畫工。スヨオベルタといふのだ。
妻。何んといつて。
畫工。言つた事か。(問。)おう。さうだつた。いろんな事をいつたが、己は癪になるかも知れないといつた。

妻。いろんな事をいつたのですと。そのいろんな事といふのはどんな事。
畫工。随分いやな事をいつたよ。
妻。何んでも好いからお話さないよ。

畫工。少しの間一ツ寝をしないやうにしろなんて云つたつけ。
妻。は、あ、そんな事だらうと思つたのよ。わたし共を引分

けようとするとするのね。疾からそんなやうな事があらうと思つてゐたわ。
畫工。それは不可能だ。己が聞いたのがつひさつきなのだから、それをお前が疾から感付いてゐる筈がない。
妻。さうですか。

畫工。何しろないものが見える筈がない。お前の想像で餘計な疑を起してゐるものだから、ないものまで見えるのだらう。疑心暗鬼を生ずるといふやうなものだ。一體何を疑ふのだ。お前が己にから見せようと思ふ處を、己がいつもの目で見ているのは好いが、もし己が人の目を借りて来てお前のかう見せようと思ふ様子の奥にどんなお前があるかといふ事を見ては困るといふのかい。
妻。まるであなたは空想の走るに任せて、止め度がなくなつてゐるのね。それは人の心の中の獣だわ。

畫工。ふむ。そんな言葉を誰に教はつたのだ。一しよに汽船に乗つてゐた青年共に教はつたのかい。ええ。
妻。(狼狽せず) ええ。青年にも教はつて好い事があるわ。
畫工。お前はそろ／＼青年を愛するやうになるのだね。
妻。それは元からだわ。あなただつて、青年として愛して上げたのだわ。それが悪いの。

畫工。それは悪くはない。併し己は己だけを愛して貰ひた

い。餘所の青年共を愛する序に愛してなんか貰ひたくはない。
妻。(戯れのやうに作り聲して) わたしのハートは大きくて幾人でも這入ります。

畫工。でも、己は外の青年なんかと同居するのは厭だ。
妻。それ御覽なさい。あなたこそ焼餅焼だわ。焼餅ではなかつた、ほんたうの妬みだわ。
ちよいとこゝへ入らつしやい。頭を掻き捲つて上げるわ。
(隣の部屋にてこゝ／＼と椅子にて床を二度突く。)

畫工。いや、己は戯けるのは嫌ひだ。お前に眞面目で話す事があるのだ。
妻。(又作り聲) おや。おや。眞面目に話さねばならないのださうだ。大相旦那様が眞面目になつておしまひなすつた。(頭を引寄せて接吻す) 少し笑つて御覽なさいよ。(間) さあ。

畫工。(不精々に微笑む) ひどいやつだ。魔法遣め。
妻。それ御覽なさい。もうひねくれた事を云ひつこなしですよ。又あんな事を云ふと本當に魔法で化してしまつて上げるわ。
畫工。(立ち上る) おい。ちよつとさうして横を向いてゐて呉れ。顔をやつて見るから。

妻。それはちつとして位ゐて上げて好いわ。横を向きて

どつこしてゐる。
畫工。(妻の顔を見詰め蠅人形の顔の處を掃へる振をしてゐる) 今己の事を思つてはいけないよ。誰でも好いから外の人の事を思つてゐて呉れ。

妻。ええ、ええ。最近の色の事を思つてゐませうよ。
畫工。うん。その青年の事を思つてゐて貰はう。
妻。いゝわ。本當にあの少し生えた入の字髯の可哀らしいこと。ほつべたがまるで熟した林檎のやうだわ。柔かですべつこくつて食ひつきたいやうだわ。

畫工。顔を撃む) うん、そこだ。その口付が入用なのだ。
妻。ええ。
畫工。そのシニツクな肉慾的な口付が入用だ。その口付は己は今までまるで氣が付かずにゐた。

妻。(顔をやる) かうなの。
畫工。それだ。(立ち上る) プレット・ハートが操を破つた女をどんな風に殺してゐるか知つてゐるかい。
妻。(微笑む) 知らなくつてよ。レットなんかといふ亞米利加人の書いたものはわたし一つも讀んでは見ないわ。
畫工。何んでも色の着いた女がさうだといふのだ。決して顔を赤くするといふ事がないのださうだ。
妻。決してないのですと。それでも色に逢つたら顔を赤くする事があるでせう。亭主やレット先生が見ない處で。

畫工。屹度さうだと思ふのかい。

妻。前のやうなる調子。何んにしろ亭主は女房の頭に血をのぼらせるだけの腕前がないのですから、その血のよぼつて行く面白い狂言を見物する事も出来ないでせうよ。

畫工。(憤然として) おい。テクラ。
妻。お馬鹿さん。
畫工。おい、けしからん。
妻。いつものやうに友達といつてお見なさい。直ぐに顔を赤くして見せるわ。さあ、お言ひなさいよ。

畫工。(降参したる様子) 實にけしからん女だ。憎い動物だ。噛付いてやりたい程憎い。
妻。(擲擲ふ) さあ。来て噛付いて下さいよ。さあ。(兩手を夫の方へ伸す)。
畫工。(女の頂に手を廻し接吻す) 噛んで噛んで噛殺してやりたい。

妻。(笑談らしき調子) あら。誰か來るといけませんわ。
畫工。誰が來たつて構ふものか。己はお前をさへ取逃さないやうにしてゐる事が出来れば、世界中のものが何んと言つたつて、何んと思つたつて構はない。
妻。そしてわたしを逃がしてしまつたらどうなの。
畫工。さうなれば死ぬ。
妻。でもわたしは、年が寄つてしまつて誰も構ひ手がないの

だから、その御心配は入らないわね。
 畫工。成程、そんな事を云つたつけ。お前はまた忘れずにゐると見えるな。己が悪かつた。取消す。
 妻。あなたは焼餅焼の癖に、わたしの逃げてしまふやうな事はないと高を括つてゐるのでせう。どうしてそんなに平氣でゐられるのだから言つて聞かして頂戴よ。
 畫工。どうも己には何んとも説明する事が出来ない。併し言つて見ればこんな風かも知れない。事によるとお前の體を自由にしたものがあるといふ考が己の心の底で芽を出して来るのかも知れない。時々己のお前に對する戀が作り物語のやうな氣がする。そしてこの戀は己の身に取つては正當防禦なのだ。敵を向うへ見ての輔當だ。もし己が幸福でないといふ事を敵が悟りはしまいかと思ふと、己は何んともいへない苦痛を感じるのだ。あゝ。己はその男を一度も見た事はない。だが、どこかにさういふ男がゐて、いつも己達夫婦の不幸を祈つてゐる。己が慙失敗してしまつたら、その男が口を明いて笑ふだらう。それを思つたばかりで己は何んともいへない心持になる。さういふ想像が己の背に乗つて己を鞭で打つてゐる。そして己はどこへ向いて走らねばならないのだと思ふ。お前の處へ駆付けける外ないのだ。さう思ふと己の頭はぼうつとして来る。己は麻痺してしまふ。

妻。そんならわたしがあなたと別れてその男を喜ばせたいやうに思つてゐるとお思ひなの。その男の豫言が當るやうにとわたしが思つてゐるとお思ひなの。
 畫工。いや、さうは思はない。
 妻。そんなら落付いてゐられる筈ぢやなくつて。
 畫工。處がさういかない。お前の相手構はずに愛相を好くして、媚を呈してゐるのを見ると、己は朝から晩まで氣の落付く暇がない。なぜあんないたづらをするのだい。
 妻。いたづらではないわ。わたしは人に好かれたいのですもの。その外に理由はないわ。
 畫工。人にといふけれど、男に限るのだらう。
 妻。勿論だわ。なぜといつて御覽なさい。女が女を好くといふ事は絶對的に不可能だわ。
 畫工。時に(間)この頃お前はあの男に逢つた事はないかい。
 妻。半年この方ないわ。
 畫工。あの男の事をちよいちよい思ひ出すかい。
 妻。いゝえ。(間)子供が死んでからといふものは、あの人とわたしの間には何んの關係もないのですもの。
 畫工。往來で見た位の事はあるだらう。
 妻。いゝえ。そんな事もないわ。何んでもあの人は西海岸の方に住つてゐるといふ事です。なぜそんなに根掘り葉掘り聞きたがるの。

畫工。なぜだか己にも分らない。この間中一人である時己はあの男の事を考へた。あの男がお前を無くした當座、どんな心持がしただらうといふ事を考へた。
 妻。そんならあなたはわたしを女房に持つた爲に良心に責められてゐるといふやうなわけなのね。
 畫工。うむ。まあそんなものだ。
 妻。自分が人の物を取た盜賊のやうな氣がするのね。さうでせう。
 畫工。殆どそんなやうな氣がする。
 妻。そんな風に思つて貰はれよばわたしは幾らか感謝して上げてほしいわ。世間の男は人の女を横取をしても、子供を取つて行つた位、もつとひどいのは誰を盗んで行つた位にしきや思つてゐないわ。(間)何しろあなたは少くもわたしの體を一廠の動産か不動産かのやうに思つて呉れるのだから有難いわ。
 畫工。いや。己はお前を財産以上の物だと思つてゐるのだ。財産なら外のもので取返す事も出来る。あの男はお前といふ女房をなくして取返しを付きやうがないのだ。
 妻。大間違ひだわ。わたしの身の上でいつて見ると、あなたがあの人の代りになつたでせう。その通りである人が二度目に奥さんを買へば代りが出来たといふものだから、あなたが彼を思はなくつても好いわけだわ。

畫工。うん。己がああ男の代りになつたといふのだな。(間)一體あの男を愛してゐたのかい。
 妻。それは愛してゐたわ。
 畫工。それから。
 妻。それから飽きたわ。
 畫工。そんなら己も飽かれはしまいか。
 妻。あなたは飽きないわ。
 畫工。それでも今の處で、お前が男といふものはこんな風でなくてはならないと思つてゐるやうな、さういふ性質の男が出て来たらどうだ。さうなれば己を捨て、その男の方へ行つてしまふのだらう。
 妻。そんな事はしないわ。
 畫工。でも其男がお前を迷はしてしまつたらどうだ。なんでもかうその男に引付けられてしまつて動かれなくなれば無論己を打つちやつてしまふのだ。
 妻。さうにも極らないわ。
 畫工。それでも「等思二人戀」といふやうな事も出来まいぢやないか。
 妻。なぜでせう。なぜ出来ないのせう。
 畫工。己はそんな氣にはなれないのだ。
 妻。でもあなたに出来ない事も外の人には出来るといふ事があり得るでせう。人と人とは別々に出来てゐるのだから。

畫工。ふん。段々お前の心持が分つて来るやうだ。妻。はてね。

畫工。「はてね」だと。(何事をか思ひ出さんとして思ひ出さざる如き様子。おい。お前の詐らざる告白が段々聞きづらくなつて来るぞ。

妻。だつて何んでも打明けるといふのが人間の最上の道徳だとあなたはいつでも云つてゐたぢやありませんか。そしてわたしにもさうしろと教へて呉れたのだわ。

畫工。それはさうだ。それに違ひはないが、人は詐らざる告白の背後に自分を隠してゐるといふやうな事もあるものだ。お前もそんな風ぢやあないかと思ふ。

妻。え、え、それが新發明の戦術ですわ。

畫工。何んだか知らないが己にはそろ／＼こゝいらの空氣が神經に障るやうになつて来た。お前が同意すればもうこゝをしまつて歸つてしまはう。(間)今から直ぐにでも好い。

妻。それは又何人といふ思付きなの。まだ来たばつかりぢやありませんか。直ぐに歸る事なんか厭だわ。

畫工。それでも己が歸りたいのだ。

妻。あなたが歸りたくつたつて、わたしが厭だわ。歸りたけりや一人で歸りなさい。

畫工。さうはいかない。次の船でどうでもお前を連れて歸る。

の愛人で、お前の夫ではなかつたのだ。

妻。夫なんといふものは看板だわ。そしてその蔭に隠れて何かするのだわ。(間)愛人なのが厭ならいつでも辭職をして下すつても好いわ。夫なんかわたしは入らないのだから。

畫工。さうだらう。己にもそんな風に見えた。どうもこの間中からお前は己の側を、そつと逃げ出して行くやうに見える。丁度盜賊が物を取つしまつて出て行くといふ風だ。そしてお前は餘所のやつの中へ交つて己の處から抜いて行つた羽で幅を利かせる。己の處から持つて行つた寶石を光らせる。そこで己もつひ勸定書をお前の目の前に突付けたくなつたのだ。己は厭な債鬼になつたのだ。債鬼なんといふものは誰だつてなるたけ遠ざけてゐたいものだ。そこでお前は差引勸定をして帳面を仕切つてしまつてもうこれから先己の筆筒からは何んにも取るまいと思つたのだらう。そして他人の處をうろついてゐるのだ。己は自分でならうと思はずにお前の愛人からお前の夫になつてしまつた。そこでお前は己を憎まざる事を得ない。好いとも。己はお前の夫になる。お前が何んと思つても否應なしにお前の夫になる。お前の愛人にはもうなつてゐられないから。妻。(戯れのやうに) まあ、何んといふノンセンスを言つてゐるのでせう。お馬鹿さん。

妻。連れて歸るのですつて。まあ馬鹿らしい。

畫工。お前は己の妻だといふ事を忘れたのか。

妻。あなたはわたしの亭主だといふ事を忘れたのですか。

畫工。それは違つてゐる。妻は亭主の言ふ通にするもので、亭主が妻の言ふ通にするものではない。

妻。は、あ、そんな風に出るのね。(間) あなたはわたしを愛した事なんぞは無いのね。

畫工。何んだと。

妻。愛した事は無いのだわ。なぜといつて御覽なさい。愛するといふのはその相手の満足するやうに讓歩するのだわ。或るものを相手に與へるのだわ。

畫工。それだ。己は與へ過ぎたのだ。(間) 男の愛するのは

與へるのだ。女の愛するのは取るのだ。己は與へて與へて何んにもなくなつてしまふのだ。

妻。何をそんなにわたしに呉れたの。

畫工。何もかもやつてしまつたのだ。

妻。成程。さうして見ればわたしはそれを貰つたのです。そして今になつてあなたはわたしの前へ勸定の書附を出すのですね。あなたの呉れたものをわたしは貰つたのならその貰つたのが、わたしがあなたを愛したといふものだから。女

は愛人より外の人の手から品物は貰はないのだから。畫工。愛人とは好くいつたものだ。それが本音だ。己はお前

畫工。おい。人を皆な馬鹿だと思つて自分だけ馬鹿でないやうに思ふのは危険だぞ。

妻。だつて、誰だつて多少さう思ふのだわ。

畫工。それから己はこの頃氣の付いた事がある。お前は元の亭主を馬鹿だつたと云つてゐるが、何んだかお前の元の亭主は馬鹿ではなかつたやうだ。

妻。おや、おや。あなたはそろ／＼あの人に同情するやうになるらしいのね。

畫工。うむ。まあそんなやうなものだ。

妻。さう。さう。(間) あなたはあの男と知り合になつて打あけ話でもして見たいと云ふのでせう。面白い圖だわ。(間) だが何んだかわたしもそろ／＼先の亭主が思ひ出されて来たわ。何んにしろ赤ちやんのお守役にも飽きましたから

ね。兎に角あの人は一人前の男だつたわ。わたしの夫だといふだけが缺點で一人前の男には違ひなかつたわ。畫工。それ見ろ。(間) だがあんまり大きな聲をするな。人が聞くかも知れない。

妻。人が聞いて夫婦だと思つたつて好いぢやありませんか。畫工。そこでお前は無邪氣な青年を愛すると同時に男らしい男も愛するといふのだな。

妻。さうですとも。わたしは何をでも愛するわ。わたしの愛は無際限なのだから、わたしは胸を擡げて若い者でも年寄

でも美男子でも醜男子でも何んでも入れるわ。わたしは全世界を愛するのだから。

畫工。ふん。どうしてそんな風になつたのだから知つてゐるかい。

妻。何をわたしに知るものですか。わたしは只さう感じるのだから。

畫工。それは年が寄つて來るのだ。

妻。また始めたのね。氣をお付けなさいよ。

畫工。お前こそ氣を付けるが好い。

妻。なぜ。

畫工。双物に氣を付ける。

妻。(作り聲) そんな危ない手遊てあそびの事は云はないものですよ。子供には不似合ですよ。

畫工。うん。己も子供のやうに遊ぶ事は止めましょう。

妻。はい。眞面目になるといふのね。おなりなさいとも。大眞面目におなりなさい。さうなればあなたがわたしを見損なつてゐるのだといふ事を知らして上げるわ。知らせるといつてもあなたには知れつこなしだわ。その代り世間の人が皆知つてあなただけが知らない事になるわ。そして知らないながらに知らずと察してあなただけ片時も氣の休まる事は無くなつてしまふわ。何んだか自分に馬鹿にせられてゐるやうな、だまされてゐるやうな心持が絶えずして

己はお前の死んだやうになつてゐるのを呼び生けて生きて世の中に呼び戻して未來といふものを信せさせる爲に自分で自分を制して自分が先づ未來に望みを屬するやうにしたのだ。そこでお前が己に感服する、其時は己も男だつた。

お前を捨て、行つた力持のやうな男が男ではなくつて、己が男だつた。己は意志の強い催眠術者で、己の神經の力がお前の弛緩した筋肉に運動を與へて己の電氣がお前の空虚になつた腦髓に生活を與へたのだ。さういふ風にして己は一旦倒れてゐたお前を起してやつた。お前の爲に交際を求めてやつた。己の交際を犠牲にしてお前をちやほやして呉れる友人の群を拵へてやつた。そしてお前を己の目の上に推載して己の家をお前に献納した。そして己の肖像繪にお前の姿を描く。背景を絹地にしてその上に鴉色や藍色の衣裳を着た姿を描く。そしてその繪が展覽會のあるたびに一番目立つ處に掛つてゐる。聖セシイであつたり、マリ・ア・スチニアアトであつたり、カリン・マンストツベルであつたり、エツバ・ブラへであつたり、その畫題は變つてもモデルはお前だ。そんな風にして世間のやつらがそのモデルのお前に注意するやうにしたのだ。己の迷つてゐる目でお前を見るやうに、世間のやつがお前を見るやうにしたのだ。己はさうしてお前の人格を世間のやつらの注意の集合點にして世間のやつが否應なしにお前に同情をしなくつて

ゐて、そしてあなたには何一つ證據になるものは手に入らないでせう。なぜといつて御覽なさい。亭主といふものは證據を手に入れる事は出来ないものだから。まあさういふ境遇になつてゐるが好い。

畫工。お前は己を憎んでゐるな。

妻。いえ。さうではなくつてよ。今も憎んでゐないが、これから先もあなたを憎むといふ事はあるまいと思ふわ。あなたも赤ちやんだからわたしには憎む氣になれないのかも知れないわ。

畫工。うむ。今はさうだらう。併しな。昔の事を思つて見ろ。何んだ。お前の身の上に嵐が吹き荒んだ時はどうだつた。お前こそ只赤ん坊のやうになつて、倒れて泣いてゐたのだ。それを己は膝の上に抱き上げてお前が寢入るやうにその目に接吻をしてやつたのだ。己はお前の子守役をした。お前が外へ出るといへば髪を挿付けて出るやうに氣を付けてやる。お前の靴の破れたのを沓屋へ直しに持せてやる。飯時が來てお前の食ふものがあるやうに臺處を見廻つてやる。お前が世間から見放されて世間のやつがお前を土足で踏付けるのでお前は臆病になつて身動きもせずゐるのを己が傍にゐてお前の手をしつかり握つて力を付けてゐてやつたのだ。己は己の舌が乾いて己の頭が裂けるやうに痛んで來るまでお前が元氣を恢復するやうに説き付けた。

はならないやうにしたのだ。(問) そんな風にお前の手を引いてやつたので、お前は一人歩きが出来るやうになつたのだ。(問) ところでお前の方は一人前になる。己の力は種切になつて精神過勞の爲にへとへとになつたのだ。己はお前を持上げて置いて自分が深みへ落ちたのだ。己は病氣になつた。お前の方ではそろ／＼生活が面白くなりかかつたのだから己の病氣を迷惑に思ふ。折々はお前の腹の中でこの債鬼と證人とがゐなくなつてしまへば好いと思ふ事さへ察せられる。お前は患者を下目に見て世話をしてゐる看護婦のやうな態度になつた。そこで己は爲うことなしに一人歩きの出来ない子供のやうな役廻りに甘んずる事になつた。お前の愛が無くなつたらしくはない。どうかすると却て先よりは優しくして呉れるやうにも見える。併しそれには憐愍が交つてゐる。その憐愍のうちには侮蔑が交つてゐる。そのうち己の繪が拙くなつてお前の著述が評判になるに連れてその侮蔑が次第に度を加へて來る。(問) 併しこれまでも己の水を吸取つたお前の泉が、己の水を吸はなくなつてから、いや、己の水を吸はないと見せかけようとし出してから何んだか潤れて來さうになつて來た。そこで己もお前も一しよに墮落するのだ。そしてその墮落は誰のせいだといふ問題が出來る。誰をかつかまへてその罪を背負はせねばならない。なぜといふにお前は弱蟲で罪を一人で背負

つてゐる事は出来ない。そこで己は罪亡ぼしに贅にせられる事になつたのだ。お前は己の筋を切つた。そしてそれがやはり自分の負ふ創だといふ事に気がつかないのだ。この長年の間一しよにゐてお前と己とは双子のやうにくつゝいてしまつたからどちらか一人が創を負へば今一人の方も満足ではゐられないのだ。植木に譬て見れば己は元木でお前はその枝から取木をしたやうなものだ。それが根の十分に出来ないうちに元木から離れようとしたから育つ事が出来ないのだ。そこで元木の方は餘り大事な枝を取木にせられたものだから、これも枯れてしまふのだ。

妻。成程。つまりあなたはわたしの書いた本も自分が書いたやうなものだといふのですね。

畫工。いやさうではない。お前のさういふのは己を嘘つきに爲ようと思ふのだ。(間)己は凡五分間も饒舌つたのだらう。そして随分微細な説明をした。色でいへばあらゆる濃淡、聲でいへばあらゆる半音を盡して二人の立場を明にしたのだ。お前は思想が荒つぽいからそれが分らないのだ。お前の楽器は一本調子の音しきや出さないのだ。

妻。え、え、併し兎に角結論はわたしの書いた本をあなたが書いたわけになるのね。

畫工。いや、結論なんぞはない。アコオドになつてゐる音を一つの音にまとめる事は出来ない。人生の複雑な現象を一

の数字で云ひ現す事は出来ない。お前の書いた本を己が書いたのだなぞとそんな氣の利かない事は己は言はない。

妻。言はなくても心持でさう思ふのでせう。

畫工。(じれつたき様子)心持でもそんな事は思はない。でもつよめて見れば。

妻。(愈じれつたがる)つよめては見られない。寄算をするから合計が出るのだ。己は寄算なんかはしない。己の言つた事は或數を割つて割切れないで、どこまでも續く小數が出るやうなものだ。

妻。でも、わたしが寄せて見るわ。

畫工。お前は勝手に寄せて見るが好い。己はそんな事はしない。

妻。でもあなたは寄せて見ようとしたのだわ。

畫工。(力抜けたる様子にて目を瞑る)いや、いや、いや。そんな事はない。もう己に物を言つて呉れるな。己は揮筆を起すかも知れない。(間)どうぞあつちの方へ行つて呉れい。お前は釘抜のやうな道具で手荒く己の脳髓をこはしてしまふのだ。お前は己の思想に鋭い爪を打込んで引裂いてしまふのだ。(人事不省になる。目は眞直に凝視し、手の拇指は廻轉する如き運動をなす。)

妻。(優しく)どうしたの。鹽梅が悪いの。アドルフさん。(畫工兩手をばたばたさす。)

アドルフさんといへば。(畫工頭を振る。)

どうしたのですよ。

畫工。うん。

妻。あなたが無理をいつたのだといふ事が分つたでせう。

畫工。うん、うん、うん。分つた、分つた。

妻。そんならあやまつたとお言ひなさいよ。

畫工。うん、うん。あやまつた、あやまつた。あやまつたからどうぞ己に何んにも言はないで呉れい。

妻。わたしの手に接吻なさいよ。

畫工。妻の手に接吻す。はい、はい。接吻するよ。どうぞもう何んにも言つて呉れるな。

妻。ようございませう。さあ、今から外へ出て晝頃まで新鮮な空気を呼吸して入つしやい。

畫工。うん。それもよからう。それから歸つて荷物を片付けて歸るのだ。

妻。いゝえ。そんな事はしないわ。

畫工。(立ち上る)なぜしない。理由を聞きたい。

妻。なぜといつたつて立たれないわ。今夜は宴會の約束もあるのだから。

畫工。それが理由か。それが理由だわ。出席するといつてやつてあるのだから。

の。

畫工。言つてやつてあつたつて構ふものか。出ようと思つたが急に差支が出来て出られないと言つてやればそれまでではないか。

妻。いゝえ。わたしはあなたとは違つて人に約束した事は守るのだわ。

畫工。ふむ。誓つた事は守るも好い。不斷べらく饒舌る事を一々約束と見なして守るには當らない。それとも誰かに誓つたのか。

妻。え、誓つてよ。

畫工。假令誓つた人があつても亭主が病氣になつたからといつてやれば違約の出来ない筈がない。

妻。いゝえ。そんな事はしないわ。あなたは病氣といふ程の事はなから、わたしと一しよに宴會に行つて貰ふのだわ。

畫工。なぜいつも己を引きずり廻すのだ。己のゐる方が却つて氣が落付いてゐて好いとも言ふのか。

妻。何んですと。わたしにはあなたの言草が分らないわ。

畫工。いつでもそんな事をいふ。何んでも聞きたくない事は分らないのだ。好かない事は分らない事にしてしまふのだ。

妻。おや、さうなの。わたしが何を好かないの。

畫工。又始まつた。好いからもう止して呉れ、止して呉れ。
(間) そんならちよいと出て来るよ。まあ好く考へて見て
どうともするが好い。
(奥の方の戸を開きて外に出て、右の方に行く。)

第三場

畫工の妻テクラ一人にて居る。其處へ直に教員グスタア
フ入り來り、テクラに氣付かぬ振して卓の上にある新聞
紙を取らんこ、卓に進み近付く。
妻。(驚き、さて氣を鎮むる様子。) おや。誰かと思つたら。
教員。己だ。(間。) 御勘辨を願ひたい。
妻。何處から此處へお出でなすつたの。
教員。陸をやつて來たのだ。併しお前達が泊つてゐるのを見
ては、こゝに足を留めるわけにも行かまい。
妻。わたし共がゐたつて好いではありませんか。(間。) 大分
暫くですね。
教員。ふん。暫くだ。
妻。あなた大相お變りなすつてよ。
教員。お前は相變らず美しいな。却てあべこべに若くなつた
やうだ。(間。) 併し己が此處にぐづぐづしてゐたらお前達
夫婦が困るだらう。勿論さうと知つたら己は來るのではな
かつた。

妻。それはあなたの方で面倒にお思ひなら爲方がないが、わ
たし共に御遠慮は入りませんわ。
教員。己の方には何んにも差支はないのだ。だが、ふん、何
か云へば一々感情を害するやうなものだて。
妻。まあ、そこへちよつとお掛けなさいよ。何んの感情なん
か害するものかね。あなたは元から感情を害するやうな事
を、誰にでも云ふ人ではないわ。
教員。これは痛み入る。併しお前の御亭主が、お前と同じや
うに、考へるかどうだかは疑問だからな。
妻。いゝえ。たつた今もあなたに大相同情してゐたの。
教員。ふん。(間。) 木の幹に名を彫り付けても、木が育てば
癒えついで消えてしまふ。それと同じ事で一旦腹の立つた
事も、いつまでも心の中に消えずにゐるものではない。
妻。内の人はあなたを見た事もないのだから腹なんぞ立てた
事もない筈だわ。(間。) わたしはいつもこんな事を夢のや
うに思つてゐたわ。内の人とあなたが友達になるの。
お友達だか何だか知らないが、わたしの目の前で出會つて
それから手を握つて別れて行くやうな工合になれば好いと
思つてゐたの。
教員。己だつて一しよら懸命可哀がつてゐたお前の事だか
ら、それをしつかりした人の手に渡して置きたいといふや
うな心持は、いつでもしてゐたのだ。お前の御亭主の評判

は中々好いのだ。書いただけの繪は皆な見た。其處で己も
年が寄らないうちに一遍手を握つて、顔を合せて、どうぞ
奥さんを大事にして貰ひたいものだと思つて置きたいやう
な心持がしてゐた。さうしたらこの己の胸の中に、厭でも
ある筈の憎みや嫉みも消えるだらう。そして己の心が平和
と満足とを得て下らない生涯をも苦しまずに送られるやう
にしたいものだと思つてゐたのだ。
妻。あなたがさういふのを聞いてゐると、まるでわたしの心
を言ひ現はして下さるやうだわ。あなたにはわたしの心が
よく分つてゐるのね。有難いわ。
教員。いや。己はつまらない男だよ。それだからお前の態ふ
藍になる程の大木ではない。お前は自由に渴した靈を持つ
てゐたのだから、己のやうな單調な生活、奴隷のやうな爲
事をして、小い範圍の交際をしてゐるものが、なんでお前
の役に立つものか。己には未練はない。併しお前は人間の
心を研究してゐるのだから分るだらうが、己がこれだけの
自覺をするまでには随分骨が折れたのだ。
妻。さういふのは、本當に高尚だわ。偉大だわ。何んでも自
分の弱點を認めるといふのはむづかしい事なのね。誰にで
も出來るといふものではないわ。(溜息をつく。) あなたは
初めから正直な、誠のある、何んでも任して置かれる方だ
と思つて、わたしは尊敬してゐただけだ。

教員。いや。さうではなかつた。あの頃はさうではなかつ
た。併し苦痛と悲哀とを閲して來たのだ。
妻。まあ、お氣の毒な。(間。) どうぞ勘忍して下さいよ。勘
忍して下さいよ。
教員。何んだと。己に勘忍しろといふのか。それはまるであ
べこべだ。己が勘忍して貰はなくちやならないのだ。
妻。(沈みたる様子。) まあ、こんな事を云つて二人で泣き出
すかも知れないわ。爺さん婆さんが。
教員。(徐に沈みたる様子に變る。) うむ。己はたしかに爺さ
んだよ。併しお前は婆さん處ではない。段々若くなつて來
るばかりだ。
(教員は自然の態度にて左手の椅子に腰を掛く。畫工の
妻は續いて長椅子に腰を掛く。)

妻。さうでせうか。
教員。それは拵が上手だからな。
妻。それはあなたが爲込んだのだわ。そら。わたしの色とい
ふものがあるといつてあなたが發見して下すつたでせう。
教員。さうだつてな。
妻。あら。忘れてしまつたの。わたしはまだ好く覺えてゐて
よ。それ。あのボンソオ色といふ強い緋なのね。わたしが
あれを着ないといつて怒つた事さへあつたわ。

教員。さういへばそんな事があつたやうだが、怒つたといふのは嘘だ。己はお前に對して一度も本當に怒つた事なんぞはない。

妻。でもたしかに怒つた事があるわ。それはあなたがわたしに考へるといふ事を教へようとした時だつたわ。あれを覚えて入らつしやつて。わたしには何うしても考へるといふ事が出来なかつたのですもの。

教員。馬鹿な。そんな事があるものか。誰だつて考へるといふ事の出来ないものはありやしない。この頃なんぞは考へる處ではない。並の人間より思案力が鋭いやうだ。兎に角作をする時だけはたしかに鋭い。

妻。(少し困りたる様子にて、對話を急ぎ、外の事に移らんます。) 何んにしろかうして又お目にかゝつたのが嬉しいのね。そしてこんなに平和にお話が出来るのだから。

教員。ふん己だつてさう喧嘩買ではないのだ。夫婦であつた時だつてお前の平和を破る事なんかは餘りなかつた筈だ。

妻。さうでしたね。餘り平和過ぎたかも知れないわ。教員。さう。でもあんな風にしてゐる方がお前の氣に入るだらうと、己の方では思つてゐたのだ。何んでもいひなづけでゐた時、己はお前の話をそんな風に聞き取つたのだ。妻。その頃何をいつたか分るものですか。自分でもどうして好いか分らないでゐたのですもの。それにお母様がこん

な風にしてゐなければいけないといふやうな事を仰やつたのを、正直に守つてゐたんだから。

教員。好いではないか。その代り今は厭けくらのやうな暮をしてゐるのだらうから。藝術家の生活なんぞといふものは活潑な、花々しいものに違ひない。それに御亭主もぐづぐづしてゐる人ではなさうだから。

妻。騒々し過ぎるのも困るわ。教員。(此頭を轉ず。) おや。お前はまた己のやつた耳飾をしてゐるではないか。

妻。(間の悪き様子。) えゝ。してゐたつて好いちやありませんか。わたしとあなたとは敵同士といふわけではないでせう。わたしこれを記念品にしてゐるのだわ。それに今時分こんなのを買はうと思つたつてありはしないわ。(耳飾を一つはづす。)

教員。さうかい。そんならそれで好いが、御亭主はなんとも云はないのか。妻。あの人は何と云つたつてわたしはかまはないわ。教員。何といつたつてかまはないのだと。(間。) でも御亭主は困るだらう。何うかすると人が知つてゐる亭主の耻にならないにも限らない。

妻。(手短に、獨言のやうに。) どうせ耻は掻いてゐるのだから。

教員。(女の一旦はづしたる耳飾を耳に嵌めんとしてあせるを見て、立ち上る。) どれ。嵌めてやらうか。妻。有難う。

教員。(耳をつれる。) あつげな耳だな。(間。) かういふ處を御亭主が見たらどうだらう。妻。泣き出すわ。教員。焼餅焼なのかい。妻。焼くの焼かないのではないわ。

(右手隣の室にこまこま物音す。) 教員。隣の部屋にはどんな人がゐるのかい。妻。知らないわ。(間。) この頃はどんな鹽梅だか、何をして暮してゐるのだから、わたしに話して聞かして頂戴よ。

教員。お前こそどんな工合だか話して聞かせないか。(女は間の悪き様子にて傍の塑像に覆へる布をまくる。) おや。それは誰なのだい。何だい。(間。) それがお前なのか。

妻。わたしの積りではあるまいと思ふわ。教員。でも似てゐるぜ。妻。(猥褻なる想像をなしつつ。) さう見えて。教員。ふん。「御前様、何うしてそれを御覽遊ばしましたか」といふ話と同じ事だ。

妻。(聲高く笑ふ。) ほんとにあなたは人を馬鹿にしてゐるの

ね。(間。) 何か耳新しい話を知つてゐるなら話してお聞かせなさいよ。

教員。いや。己は知らないがお前なんぞは面白いのを知つてゐるだらう。妻。大違ひだわ。笑ふやうな事と云つたら近頃まるで聞きつこなしなのだから。

教員。一體御亭主はお目出たいのかい。妻。えゝ。まあその方なの。教員。そればかりかい。妻。それにこの頃は病氣なの。

教員。ふん。さうかい。餘所の蜂の巢へ鼻なんぞをつゝ込まなければ好いのだ。妻。(笑ふ。) ほんとに人を馬鹿にしてゐるよ。

教員。おい。まだ覚えてゐるかい。新婚の時に住まつてゐたのは此部屋だぜ。あの時は大分造作が違つてゐた。あすこの柱の傍には棚があつたつて。それから寢臺はあすこにあつた。

妻。お止しなさいよ。教員。ちよつと己の顔を見て見い。妻。顔位見たつても好いわ。(二人目を見合す。) 教員。何でも頭に強い印象を受けた事は忘れないものだな

あ。
妻。さうねえ。記憶といふものは争はれないものだわ。殊に若い時の記憶は。

教員。己がお前を初めて見た時の事を覚えてゐるかい。お前はまだちつぽけな愛くるしい子供だった。云つて見ればあの時のお前は小い石版でその上に両親や家庭教師がちつとばかり樂書をしてゐたやうなものだ。それを己が消してしまつて己の勝手な文句を一ぱいに書いたのだ。まあ己なんぞはお前の今の亭主にはなりたくないなあ。(問)併し人は好き好きだから今のお前の亭主になつて好い氣になつてゐるものもあるだらうよ。(問)何しろお前に會つて見ると面白い。お互に思つてゐる事がびつたり合ふのだから。かうしてこゝに座つてゐてお前に物をいふのは、自分の醸造した葡萄酒の瓶の栓を抜く様なものだ。己の酒を己が飲むのだが、その瓶が餘所にしまつてあつて年をくつたので旨くなつてゐるのだ。(問)己は近いうちに又結婚しようと思つてゐるが、今度は何でも極若いのを貰つて仕込んでやるのだ。何うしても女房といふものは亭主の育てた子供でなくちやいけない。さうでない亭主がかゝあの育てた子供になつてしまふ。さうなつた日には天地がひつくり返つたやうなものだからなあ。
妻。おや。又結婚なさるのですつて。

教員。うむ。もう一週運だめしをして見るのだ。今度は馬が放れないやうにしつかり繋いで置かなければならん。妻。別品なの。
教員。己の目には別品だ。だが、己の方がちつと年寄過ぎて不似合かも知れない。處で妙なのはかうしてひよつくりお前の傍に来て見ると、何だか新規に女房を持つのがむづかしいやうな氣がするのだ。
妻。何うしてね。
教員。どうも己の命の木はまだお前の土地に根をはつてゐると見える。何だか古癪がまた口を明いたやうだ。おい。テタラ。お前は危険な女だなあ。
妻。さう。處がわたしの若い亭主に云はせるとわたしにはもう色は出来ないのですつて。
教員。ふん。それはお前の御亭主がお前を愛せなくなつたといふに過ぎない。
妻。一體内のが愛するといふ事を何う心得てゐるのだからわたしには分らないわ。
教員。何でもお前達二人は長い間目隠をしてつかまへくらをしてゐて、たう／＼つかまりこなしになつたやうなものだ。浮世はさうしたものだよ。お前は二度目だからおぼこらしい面を冠る。そこで御亭主は餘計な遠慮をする。さうだらう。亭主を取替へるのも好悪さ。さうではないか。

妻。あなたはわたしの舊惡を責めるのね。

教員。さういふわけぢやない。何でも物事が出来るのは必然の結果だ。それがさうならなかつたら、どうにか別な風になつたのだらう。處がさうなつたのだから爲方がない。妻。ほんとにあなたは物分りの好い方ね。思想が自由だわ。今までいろんな人にも會つて見たけれど、あなたと話すやうなわけにはいかないわ。あなたは少しも説教がましい事を云はないから感心だわ。道徳がどうのかうのといつて、人にいろんな束縛を加へないから好いわ。あなたとかうして話をしてゐると自分の心が自由なやうな氣がするわ。ほんとに今度あなたと結婚する娘になつて見たいわ。
教員。ふん。己は又お前の今の御亭主になつて見たいのだ。妻。(立ち上る。)さあ。もうこれでお別にしなくちやならないのね。永遠のお別に。
教員。さうだ。永遠の別だ。(問)だが、お別をしなくちや別れられない。さうだらう。
妻。(不安の様子。)いゝえ。これで別れるのだわ。
教員。(女の部屋の方に行きかゝるを追ひかけ行く。)いや。さうはいかない。(問)お別をしなくちやならない。感瀾の中にあらゆる記念を葬つて、酔の醒めた曉には何の記憶も残らないやうなお別をするのだ。さういふ感瀾の爲方があるよ。さういふ酔方があるよ。(右手を伸べて相手を抱

く。)お前の今の御亭主は不治の病を持つてゐてその病的精神にお前を感染させたのだ。己がお前に新しい性命を吹込んでやる。己はお前の天才を蘇らしてやる。歸り咲の薔薇のやうな花が秋の末になつて咲くやうにしてやる。
妻。旅装したる貴夫人二人庭の方の戸口に現はれ、畫工の妻と教員との様子を見て驚き、指差して笑ひ、通り過ぐ。
教員。(平氣にて。)旅人さ。
妻。もう歸つて下さいよ。わたしはあなたが恐くなつたわ。教員。なぜ。
妻。あなたはわたしの靈を奪て了ひさうなのだもの。
教員。うむ。奪つて、その代りに己の靈を呉れてやるのだ。一體お前には元から靈なんかはありやしない。あるやうに見えるのはまやかした。
妻。ほんとに妙な人だよ。人の腹を立てないやうに、人に侮辱を加へるのだから。
教員。そりやお前の體には己の手付が打つてあるのをお前が感じてゐるからだ。(問)さあ何時にしよう。何處にしよう。
妻。いゝえ。幾らなんでも内のが可哀相だわ。やつぱりわたしを愛してはゐるのだから、そんな不實な事をしては濟まないわ。

教員。なに愛してゐるものか。愛してゐない證據が見たいか。

妻。そんな證據をあなたが持つてゐる筈はないわ。教員。(床に落散りたる、裂けたる寫眞の切れを拾ひ上ぐ)

これだ。御覽。

妻。まあ。ひどい事をしたのね。

教員。それ御覽。(間。)さあ。何時にしよう。何處にしよう。

妻。ほんとにおとなしさを顔をしてゐて、ひどいやつだわ。

教員。何時にするのだ。

妻。内のは今晚八時の船で立つのだけ。

教員。そこで。

妻。九時にね。

(隣の部屋にてがた／＼と物音す。)

喧しいのね。どんな人がゐるのだらう。

教員。(隣の部屋との隔の戸に近寄り、鍵の穴を覗く。)どれ見てやらう。(間。)おや、おや。長椅子の前の小さいテブルがひっくり返してあつて、水の瓶が壊れてゐる。それつきりだ。誰か犬でも締込んで置いたのだらう。(間。)そんなら九時だね。

妻。いゝわ。あの人の自棄自得だから。ほんとにひどい人だ

教員。己は八日この方泊つてゐる。

妻。それではわたしの乗つてゐた蒸汽に乗つてゐたのですね。

教員。うむ。乗つてゐた。

妻。そして今わたしを擒にしようとなさるのね。

教員。ふん。擒にはもうしてゐる。

妻。いゝえ。まだですよ。

教員。いや。もうしてゐる。

妻。あなたはわたしの小羊の傍へ狼のやうに狙ひ寄つたのね。あなたはわたし共夫婦の中を裂いて、幸福を破壊しようといふ残酷な作戦計畫をしてそれを着々實行したのね。だが、もうわたしの目が明いたから、あなたの計畫は水泡に屬してよ。

教員。お前の今邪推してゐる通りでもないよ。本當の事をいつて見ればかうだ。勿論お前達二人の幸福を祈つてはゐない。併し己が手出しをしなくつてもお前達が長く幸福でないといふ事は知れてゐたのだ。己は随分用事があるから、お前達に復讐をする爲に狂言を書いてゐる暇はない。只ぶら／＼してゐるうちに、ふいと汽船の中でお前が若い者を相手にして笑談を云つて遊んでゐるのを見付けた。そこでお前達夫婦に會ひに来る時節が到来したと思つたのだ。(間)そこでやつて来た。お前の大事な小羊は造作も

わ。眞實、眞實といつて何でもほんとの事ばかりを云へといつた癖に、人を欺して。(間。)併し待つて下さいよ。何うだつて。わたしが歸つた時、妙に不機嫌な様子でわたしを迎へてと。その前にいつも棧橋まで出て来るのが來なかつた。それから何だつて。おう。それから蒸汽の中で青年と話をしたといふから、わたしが白ばくれたと。一體あれを何うして知つてゐたのだらう。(間。)待つて下さいよ。それから女といふものは何うのかうのと哲學じみた事を云つたと。それから先の亭主の事を、あなたの事を云つたと。それから彫刻が現代藝術だから彫刻家になると云つたと。その言振がまるでああなたが平生云つてゐたのと同じだつたわ。

教員。はてね。

妻。はてねですと。(間。)はゝあ。分つたわ。ほんに、ほんに。あなたは凄く悪黨ね。あなたがわたしの歸る前にこゝへ来てわたしの亭主を引裂いてしまつたのでせう。その長椅子の上に座つてゐたのはあなたでせう。わたしの亭主が顯病だといつたのはあなたでせう。わたしの亭主は女房と一しよに寝てはならないと云つたのはあなたでせう。わたしの亭主をおだて、男らしくしつかりして女房に反抗しろと云つたのはあなたでせう。あなたですとも、あなたですとも。(間)一體あなたはいつから此處に来てゐるの。

なく狼を親友として歓迎した。何うして己がお前の御亭主の歡心を得たかといふ事を説明するのは少しお氣の毒だから見合せる。初め逢つた時は氣の毒になつて同情したよ。それは丁度昔の己の境遇と同じなのだからなあ。そのうち向うで己の古癩をいちぢり始めた。お前の書いた本の話を書出して己が馬鹿だといふ事を饒舌つた。そこで己はお前の御亭主を子供がいたづらに取つて来た花を撈るやうに、撈つてしまはうといふ氣になつた。むしつてしまはう。引裂いてしまはう。引裂いてもう緒ひが利かないやうにしてしまはうと思つた。その爲事はわけもなく出来たよ。お前が下地を拵へて置いて呉れたもんだから直ぐ裂けるやうに、お前が念の入つた手段で、脆くして置いて呉れたもんだから。(間)そこで残つてゐるのはお前丈だ。まだあの男の破れ屋體の動いてゐるのはお前といふ撥條があるからだ。これからその撥條をはづすのだ。さうしたら機關が逆に廻り始めるだらう。ぎい／＼いふ音が聞え始めるだらう。(間)己もお前の處へ這入り込んで来た時はどんな風な話を爲掛けたら好いかと迷つてゐた。勿論方略は幾らもある。丁度將棋の手のやうなものだ。お前の方でどう出るか差を見なくつちや分らないのだ。そこで將棋は始まつた。あゝ出ればかう出る。と／＼お魚は網に這入つてしまつたのだ。(間)もう逃しつこはないのだよ。

妻。いゝえ。わたしは捕はれてなんかはあないわ。
 教員。處が捕はれてゐるよ。(問。)否でも唯でも、お前はも
 う、己の手を通れる事は出来ない。お前が初めの亭主と仲
 直りをした、初めの亭主の實のあるのを見て後悔して又寐
 返りを打つたといふ事は、もう世間が見てゐる。あの旅の
 女が二人、世間を代表して見てゐる。あれは己が巧んで來
 させたのではない。己は狂言師ではないのだから。併し世
 間が見たには相違ない。どうだ。もうこの位で好いかい。
 妻。復讐は大抵この位で好からうと思ふわ。(問。)だがね。
 一體あなたはいろんな思想に捕はれてる方でけないのでせ
 う。公平に考へる方でせう。わたしがあなたと別れなけり
 やならないやうになつた時も、あなたは、これは必然の結
 果だ。人間の行爲は自由意志で何うにでもなるといふもの
 ではないといつたでせう。それなのに何うしてこんなひど
 い事が。
 教員。(詞を遮る。)ちよつと待つて貰はう。人間の行爲は絶
 對的に自由にならないのではない。或意味に於いて意志で
 左右する事が出来ないといふのだ。
 妻。おんなじ事だわ。
 教員。おんなじ事なものか。
 妻。あの時あなたはさういつたわ。わたしのした事は、わた
 しの性格と境遇とがさうしなければならぬやうにしたの

だから、わたしのせいではないとさういつたわ。そのあた
 が何處からわたし共に對して復讐すると云權利を得たの
 でせう。それが聞きたいわ。
 教員。分りきつた話だ。己の性格と境遇とが、己に復讐をさ
 せるのだ。お互様だ。(問。)だが、お前達夫婦が己と戰鬥
 をすれば負けなければならぬのは、なぜだか知つてゐる
 かい。
 (畫工の妻は、「へん」とでもいひたさうなる侮辱的表
 情をなせる。)
 なせお前達夫婦が、己に馬鹿にせられなくてはならないの
 だか知つてゐるかい。(問。)己はお前達より強いからだ
 ぞ。お前達より賢いからだぞ。お前が馬鹿なのだ。(問。)
 そしてお前の亭主も馬鹿なのだ。一體お前達は繪を書いた
 り、小説を書いたりするのは馬鹿でない證據のやうに思つ
 てる。それをしないものを馬鹿にしてゐる。處が小説も
 書かない、繪も書かないものになつて馬鹿でない人間はる
 るのだ。これからはその積りでゐるが好い。
 妻。本當にあなたは情といふものはまるでないのね。
 教員。ないとも。(問。)なけりやこそ己が考るやうな事が考
 へられるのだ。すこしはお前にも己の考が分つたのだらう
 な。情なんといふものがないので、己のするやうな事が出
 來るのだ。お前も少しはその邊の事を否唯なしに味はつて

見る事になつたのだ。
 妻。まあひどいのね。好くも、ちよつとばかり侮辱せられたや
 うな心持がしたといふばかりなのに、これほどの残酷な
 復讐が出来たのね。
 教員。そればかりではないのだ。併し侮辱せられたやうな心
 持を、人にさせるといふのは良くない事だから、これから
 は止すが好い。随分人には應へるものだからな。
 妻。本當に呆れた意地悪ね。
 教員。ほんとに呆れた尻軽だ。
 妻。それがわたしを見抜いた處でせうか。
 教員。それが己を見抜いた處だと思ふのかい。(問。)誰でも
 自分の性格を十分に發揮しようと思ふ時は、先へ相手の性
 格をよく見て置く事だ。さうしないと自分の双物で、自分
 が怪我をするからな。怪我をして吠えたり齒をがた／＼云
 はせたりしたつて始まらないのだ。
 妻。あなたなんぞは、罪を赦すの勘辨するのといふ事はない
 のね。
 教員。大違ひだ。お前の罪は赦してゐたのだ。
 妻。まあ。
 教員。たしかに赦してゐたのだ。別れてから長の年月、己が
 お前達に手出しをした事があるかい。手出しなんぞはしや
 しない。今度此處へ來て見りやあ、お前達夫婦の間にはも

う縫潰されないやうな創が出来てゐたのだ。調停の出來な
 いやうな衝突が出来てゐたのだ。己が文句でも云つたか
 い。説教でもしたかい。そんなわけぢやあない。己は只お
 前の亭主に洒落まじりの話をした。その話だけでお前の亭
 主ははぢけて飛んでしまつたのだ。己は今お前の前に、原
 告になつて來てゐるが、己の云つたりしたりするほどの事
 に對しては己は責任を負ふのだ。おい。テクラ。お前は自
 分に罪はないといふのかい。
 妻。何でわたしに罪なんぞがあるものかね。(問。)キリスト
 教徒に云はすれば、わたし共のする事は神の攝理に依るの
 でせう。外の者に云はすれば、それが運命といふものでせ
 う。さうして見れば罪だとは云へない筈ではなかつて。
 教員。大體はそんなものだ。だが、何處かの隅に神の攝理や
 運命でない處が残る。その中に罪が隠れてゐるのだ。其處
 で遅いか早いか債鬼には出くはさずには濟まないのだ。罪
 はないかも知れない。責任はある。罪がないといふのは所
 謂神の前に出ての話だ。もう實際にはなくなつてゐる神と
 いふものゝ前に出ての話だ。責任があるといふのは自己に
 對しての話だ。自己と人間仲間とに對しての話だ。
 妻。それではあなたは債鬼になつて借金を取りに來たのね。
 教員。うむ。己はお前に盗まれた物を取戻しに來た。お前に
 呉れてやつたものを取返さうとは云はない。お前は己の名

譽を盗んだ。それを取返すにはお前のを取つてやるより外に爲方がないのだ。さうぢやないか。

妻。さうなの。そして此でもう腹が癒えたといふの。

教員。うむ。もう腹が癒えた。(ベルを鳴らして宿屋のガルスンを呼ぶ。)

妻。そしてこれからいひなづけの奥さんの處へ行くのね。

教員。そんなものはない。(問。)又生涯そんなものを拵へようとも思はない。それかと云つて内へ歸るでもない。なぜといふに内なんといふものはない。又これから内なんといふものを拵へようとも思はない。

(宿屋のガルスン入り来る)

勘定してお呉れ。己は八時の船で立つのだから。

(ガルスン禮をして退場。)

妻。そしてわたしと和睦はしないのね。

教員。和睦だ。お前は意義のなくなつてしまつた詞を澤山持つてゐるな。お前と己とに和睦が出来るかい。男二人に女一人で仲好く暮さうともいふのかい。お前が借金を返して帳消しにしようといふのかい。それはお前には出来ないう爲事だ。お前は只取れるだけ取つたのだ。そして取つたものを皆食ひ盡した、消耗した。もう返さうといつても返しやうはない。(問。)己がこんな風にも云へば好いのかい。どうぞお前が己の胸を搔裂いたのを、己に對して赦し

て呉れい。お前が己の名譽を奪つたのを、己に對して赦し

て呉れい。お前が七ヶ年の間己の預つてをる生徒に己を笑

はして呉れたのを、己に對して赦して呉れい。己がお前を

兩親の束縛の中から救ひ出して、無智迷信の繩を解いてや

つて、己の家の女王にしてやつて、位置を拵へ、友達を拵

へてやつて、子供のやうな奴であつたのを一人前の女にし

てやつたのを己に對して赦して呉れい。己がお前に對して

赦してやつたやうに、お前も己に對して赦して呉れいと、

かういへば好いのかい。(問。)ここで己は帳面を仕切る。

これからお前は亭主の處へ行つて夫婦の中の勘定をするが

好い。

妻。そのわたしの弱い亭主を、まあ、あなたは何うして呉れ

たの。何だか恐ろしい事をしたのではないかと思はれる

わ。(問。)一體まだ未練があるのか。

妻。あつてよ。

教員。そんならさつき己を愛するといつたのは何うしたの

だ。あれも本當かい。

妻。本當だわ。

教員。ふん。そんならお前は何だ。

妻。あなたはわたしを人非人だと云ふのね。

教員。いや、只お前は氣の毒な女だといふのだ。さういふ性

質はな。己はさういふ過失とはいはない。さういふ性質は

な。悪い結果を來すぞよ。テクラ。お前は可哀相な女だ。

(問。)何といつて好いか知らないが、何だか後悔とでもい

ふやうな心持が、流石の己もして來たぞ。勿論己に罪はな

いが。お前同様罪はないが。兎に角己があの時感じたやう

な事をお前も感じて見るのが爲にならないにも限らない。

(問。)お前の亭主が何處にゐるか知つてゐるかい。

妻。え。今になつて見れば大抵分つてよ。(問。)あの隣の

間をあなたが借りて置いて、其處へわたしの今の亭主を入

れて置いたのでせう。そしてわたしの亭主が、ここで二人

で云つた事を、何もかも聞いたのでせう。聞いたばかりで

はない。何もかも見たのでせう。そして人は自己の「Y」を

目撃しては、もう生きてはゐられないものだわ。

(畫工園の方へ突出したる間の戸口に現はる。顔の色眞

蒼になり、片頬に剣を貫かひる。剣よりは血出でゐる。)

兩眼は動かず表情なし。口角よりは白き泡出でゐる。)

教員。(畫工を見て一步下る。)御亭主は此處へ來られた。

(問。)さあ。夫婦の仲の勘定をするが好い。御亭主も己と

同じやうに切り離れの好い取引をするか何うだか、分らう

といふものだ。(問。)左様なら。

(左手に歩み去らんとして、又立ち留る。)

妻。(兩手を擡げ、夫の前に進み寄る。)アドルフさん。(畫

工は園の上にはたりと倒る。妻その體の上に伏さりて優し

くいたはる。)

アドルフさん。まだ生きてゐるのなら、何とか言つて下さ

いよ。好い子だから何とか言つて下さいよ。(問。)テクラ

は悪者だつたからあやまるのですよ。勘忍して下さいよ。

御返事をなさいよ。聞えないの。(問。)もう聞えないのだ

ね。とう／＼死んでしまつたのね。まあ、何うしよう、何

うしよう。

教員。成程、まだあの男を愛してゐるな。(問。)可哀相な女

だ。

(幕)

昭和三年十月二十六日印刷
昭和三年十月二十八日發行

版權
所有

發
兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目六番地

改
造
社

電話
芝
(43)
八四〇
二二二
四三二
番番番番

著
者
森
鷗
外

發行
者
山
本
美

印刷
者
椎
名
昇

新選森鷗外集
定價金壹圓

(新裝社製本)

新選名作集

Table listing authors and their works, including 新谷崎潤一郎集, 新菊池寛集, 新前田河廣一郎集, 新永井荷風集, 新藤森成吉集, 新葉山嘉樹集, 新北原白秋集(詩歌), and 新武者小路實篤集. Each entry includes a brief description and pricing information.

新選名作集

Table listing authors and their works, including 新吉田絃二郎集, 新森鷗外集, 新横光利一集, 新長田幹彦集, 新前田河廣一郎集(篇續), 赤穂浪士(上巻), 赤穂浪士(中巻), and 赤穂浪士(下巻). Each entry includes a brief description and pricing information.



終

